鬱これ：財前提督シリーズ

駒由李

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※ｐｉｘｉｖからの転載、だいぶんひどい設定、百合や本編からの派生でオメガバースも混じったり　最終的に明石とケッコンカッコカリします。

▼公式とは違うパラレルだと思いねぇ。色々捏造。訳あり提督と秘書艦敷波を主とした、密やかに展開される提督の計画

目次

何者にもなれない ―― 1
強さと弱さ ―― 8
新米司令官の基地は人手も資材も不足しています ―― 16
信じていないのは ―― 24
コーヒー・カンタータ ―― 29
どうか私を信じないで ―― 37
沈む ―― 47
提督「もしかして豆ぶつけとけばいいと思ってない？」 ―― 52
少女 ―― 58
幸せを知っている ―― 64
目的のための手段、手段のための目的 ―― 71
コンプレックス【※派生オメガバースパロ】 ―― 80
夏の執務室 ―― 94
ストーブ出すのしんどい ―― 98
ついでだから。 ―― 106
塞翁が馬 ―― 109
「母」 ―― 120
【派生オメガバースパロ】体温【大和×アイオワ（＋提督）】 ―― 127

何者にもなれない

軍の人事は何を考えているのか。その基地にはじめて着任し、当時の秘書艦だった漣に司令官と顔合わせをさせられた時。最初は同じ「艦」かと思った。しかし「艦」は女性しかいない。一瞬、見間違えたものの彼はどう見ても男だった。そして次に司令官と知り、あまりの外見の若さ――否、幼さに思わず、直ぐに口に出してしまった。

「……宜しく、といいたいところだけど。司令あんた、幾つなの。私らと変わらなそうに見えるんだけど」

「変わらないよ。１８歳だよ」

「えっ」

漣が声を上げた。机に向かいながら万年筆を走らせる司令官。何でもない様子の彼へ、漣は机越しに詰め寄った。

「ご、御主人様⁈　てっきり１５かそこらだと思ってました!!　合法ショタキタコレ!!」

「漣、発言は慎みなさい。それに、合法っていうにはやっぱり成人してないとまずいんじゃない。あと２歳足りないよ」

荒ぶる漣に、彼は慣れた様子でサインを続ける。敷波はそんな２人を半ば呆然と見詰めていた。

とんでもないところに来てしまった。なぜ、そんなに若い司令官が基地ひとつを任されたのか。自分達「艦」は、司令官の指先ひとつで命を左右されるのに。敷波は、自身の先行きの暗さを思って目眩がした。だから、直ぐには気付けなかったのだ。なぜ、どう見ても男である筈の彼が、「艦」だと思ってしまったのかという意味を。

「まあ、君の不安は尤もだよ。俺は軍に身ひとつで放り出されたようなもんだからね」

「本当にそうだったのかよ」

それから暫く経つ。幸い、敷波は今のところ轟沈の憂き目に遭っていない。尤も、それはここに着任した「艦」全てにいえる事だと、敷波は知っている。頼まれた茶を出しながら、彼女はさらけ出した当時の不安に対する答えに思わず呆れ顔になる。

何度も旗艦を任されてレベルが上がり、今では漣と交代しながら秘書艦も務めている。出撃した艦隊のうち、ひとりでも中破以上のダメージを受ければ夜戦まで、大破すればたとえボス戦手前でもその場で引き返す、入渠や補給はこまめにといった、基本的な方針を司令官が徹底しているこの基地は中々戦績が上がっていない。だが経験値は積んでいる為、気が付けば第1艦隊を最も多く率いていた敷波は、最初の秘書艦だった漣を抜いた強さにまで至っている。現在は着任してきた軽巡洋艦や重巡洋艦などに抜かれ気味ではあるが、近代化改修や改造なども施されて現在も前線に出ている。そんな彼女は、司令官とは時にツッコミを入れつつ入れられつつ巫山戯合う漣とはまた違った信頼関係を築いている（但し、それが信頼であるとは敷波は認めたがらない事だが）。当時は少佐だった司令官が、なぜこの若さで基地ひとつを任される事になったのか。大体の推察は出来ていた。

司令と呼ぶにはあまりに幼い顔の少年は、湯飲みを取る手はそれなりに大きかった。湯気の立つそれを啜りながら、彼は童顔に見合わぬ深々とした溜息を漏らす。

「色々やり過ぎて、上層部にちょっと煙たがられてねえ。『向こうで功績立ててこい、帰ってこなくてもいいぞ』って辞令と一緒に日本から追い出された時は、さすがにどうしようかと思ったよ。少佐昇進という名の左遷だったね。選んだ秘書艦が中々にツッコミ所溢れる子だったから困ってる暇はなかったけどさ」

「漣も仕事をしてますよ。知らないけど」

「知ってるの知らないのどっち。まあそれはわかってるけどね。……漣はいつ風呂から上がるかねー」

湯飲みを口から離し、呼ぶのは今は入渠している駆逐艦の少女の事だ。少々突飛な口ぶりだが、仕事には意外に真面目だ。司令官の慎重すぎるともいえる采配に付き合ってきたのも彼女だ。時に入渠を嫌がる天龍を共に宥め、時に資材の遣り繰りで共に頭を悩ませた。現在は司令官が慣れたのもあってそれなりに安定した運営になっているが、敷波が秘書艦になるまでそれを手伝ったのは彼女だ。但し今でも時にドジを踏む為、現在はメインで秘書艦を務める敷波がそのフォ

ローに回っている。勿論、愚痴を零しながら。敷波は盆を抱き締めて溜息を吐いた。
「あんたがそれなりに無謀な奴じゃなくてよかったよ。最初は何でかぱっと見、女の子にも見えたし。でもどう見ても男だって気付いたあとは、こんな若い上司でこっちもどうしようかと思った」
「俺も『艦』だったら同じ事を思ったろうな」
　万年筆を走らせ続ける司令は、敷波の物言いにも鷹揚に笑う。目を細めると、より幼く見えた。答える声の低さや体格そのものは、成人男性のそれに近い。体が出来上がっているのは軍人の訓練ゆえだろう。しかしまだ成長途上らしい彼は、それと顔立ちのあどけなさに落差があった。だから敷波は、ふと口を噤む。
（何で、こいつは軍人なんてやってるんだろ。こんな鷹揚とした性格だと、どこかの良いところのボンボンっぽいのに。色々やらかしたとかいってるから結構、過激なのかな）
「けど、そんなに君達に似てるかな俺は」
　不意に、司令が問う。それは何気ない様子だった。万年筆のインクが切れたらしい。万年筆を置き書類を退け、抽斗を引く彼を見下ろして、敷波はいう。
「似てるっちゃ似てるよ。何ていうのか、顔立ちのタイプみたいな……系統が同じみたいな。女顔じゃないんだけど、何か私達っぽい」
「自分じゃわかんないんだよねえ。散々他の子達にもいわれてるけど。お、あったあった」
　目当てのものは1段目にはなく、2段目にあったらしい。彼の手にはインク壺とスポイトがあった。白い軍服を恐れる事なく慣れた様子で万年筆を解体する。インク壺を開きながら、彼はいう。室内の為に軍帽を被っていない彼の横顔は、やはり幼かった。何気ない様子で、彼はいう。
「君達に似てるのは、俺が母親似だから当たり前っちゃ当たり前だって、死んだ養父さんもいってたんだけどね」
「――？」
　その物言いが、引っ掛かった。だが見咎める敷波の視線に構わず、

彼は壺にスポイトを突っ込んだ。吸い取られた墨が、黒く管を染める。それを見詰めながら胴軸にインクを注ぐ彼は、どこか遠い目をしていた。

『〝艦〟は家畜のようなものなんだよ』

実母も育てたという、養父は全てを諦めたように養子に語った。元軍人だという彼の手は既に枯れていて、その面影を感じさせなかった。

『はじまりは私も詳しくは知らない。だがとにかく、昔、兵器装備の改造を受け付けられる少女がいたそうだ。彼女から〝艦〟の血統化、〝品種改良〟、〝配合〟……そうして１００種類以上の〝艦〟が生まれた。前線に出て戦うのが娘ばかりなのは、単に改造を受け付けられるのが男よりも女の方が耐久性が高いというだけだ。男が生まれにくいのもあって、〝艦〟の男は一生、軍に囲われる事になった。種馬が必要だったからな。それこそ赤ん坊から老衰するまで、飼い殺しだ。娘も同じようなものだがな。彼女達は現役のうちは自分達の運命を知らん』

『じゃあ、何で俺はここにいられるの』

『……お前の父親は、軍人とはいえ一般人だったからな』

吐き捨てるように、養父はいった。嘗て、娘として育てた彼の母親の事を想ってだろう。その小さな眼に、悲哀が過ぎった。

『一般の人間と〝混ざる〟と、生まれながらにして丙種扱いだ。一般人と交わって生まれたのが娘だった場合は、人手がなくなれば予備の兵器として、改造を受け付けられる余地があるから乙種。だが男は、〝艦〟の娘と混ぜれば更に〝劣化〟する。かといって女より改造を受け付けられる可能性が低い。だから軍としては兵器開発に使えない、と放置されている。それでも戦況が切羽詰まればお前にも手が掛かるだろうが』

枯れ枝のような手が、彼の頭を撫でた。丸い頭すら母親似であると、彼は知らない。ただ養父の話を淡々と聞き続けるだけだ。暖炉の前。絨毯に座る養子に、養父はいう。その眼が細められた。憐れみ

で。
『……実のところ、お前のような子供はあまり珍しくはないよ。今の娘達には私の訴えが効いて、保険として軍からピルが配付されているらしいし、昔も一般人が不用意に娘を孕ませれば、兵器開発の邪魔をしたと国家反逆罪に処せられたがな。それでも軍は男所帯だ。年頃の乙女を自らの欲望の捌け口にしたがる奴は跡を絶たない。恋愛をしたいという者は、まだマシな方だな』
『結婚も許されないの』
『許されてはいる。但し、一般人と結婚する場合は、その前に種馬の男との子供を産んでからじゃないと許可が下りない。そしてその子供は軍に取り上げられる。加え、彼女達との間に生まれた子も、有事には取り上げられる可能性もある。男でも可能性はある。たとえ跡継ぎでもだ。それでも構わないという男がどれだけいるか……出逢いが軍人としかないも同然だし、家の跡継ぎの場合も多い。……お前の実父もそうだったが、実父は国家反逆罪で処刑されてしまったからな。向こうが引き取りたがらなかった』
　彼はわからなかった。養父が、なぜ急にこんな話をしだしたのか。自身を否定するような親ではなかった。それは養母もだ。だから、彼の話は戸惑いしか産まない。それをわかっているのか、養父は話を続けた。
『お前のような子供は、多くが軍を嫌う。嫌って、違う仕事に就く。不幸中の幸い、〝艦〟は少々常人より体が丈夫だ。何をするにしたって体が資本だ。何をやってもうまくいける。有事には徴集される身とはいっても、今までその例はなかった。だから、■■■。お前も、わざわざこんな御時世に軍人を選ぶ必要はないよ。お前の性格だと、私の商売を継がなくても、もっと穏やかな仕事に』
『丈夫だっていうなら、勿論、軍人にもなれる訳だね。寧ろそれが最適な訳だ』
　それが養父の求めた答えとは真逆である事を、彼は理解していた。養父は目を瞠った。そして、直ぐにかなしげに伏せられる。その目元に老いを感じた。

『……お前のような存在は、軍の中では公然の秘密だ。色々いわれる。何をやっても〝艦〟の子だから、で片付けられるような色眼鏡で見られる。いざとなればとっつかまって一生、飼い殺しの種馬だ。種切れになれば捨てられるだけだ。お前は頭が良い、屹度、上層部からは煙たがられるぞ。ましてや、有能な軍人を何人も処刑する切欠になった騒動の落とし種だ、お前は。軍の愚行の象徴として扱われるぞ』

『それでも、養父さん』

彼はいった。決然とした表情で。それは日頃の温和さが鳴りを潜めた、強い眼差し。

『そこでは、俺を産んで直ぐにいなくなった、母親の行方が掴めるのかも知れないんでしょう』

そして、かなしい眼差しでもあった。

轟沈したとも、ただ消息を絶ったともいわれる、現役の軽巡洋艦だった「艦」。それが彼の生みの母親だった。

『俺は、それがわからないと、〝艦〟にも種馬にも軍人にも、人間にもなれないよ』

「司令。インクが机に溢れてる」

「おっと」

気が付けば、スポイトで注いでいたインク。それが胴軸から溢れていた。慌てて、且つ慎重にスポイトを引っ込める。残った中身を壺の中に戻すと、それを傍らに置きながら、横から差し出された雑巾で万年筆を、続いて机を拭く。しつこいぐらい、彼は机を拭いていた。敷波はそんな司令官の顔が無表情である事に気付いた。溜息を吐く。

面倒そうな事情を抱えていそうだ。

「司令、もう充分だろ。ほら、これで手を拭いて。指にもついてる」

「……そうだね。御免ね」

「書類についたら困るし。とっととその万年筆を締めて」

投げ渡された箱入りのティッシュペーパーで軽く手を拭く。盆を小脇に雑巾を持ち上げた敷波は、促されるがままに万年筆を片付ける上司の向かう机の前を横切る。そして執務室のドアノブを掴んだ。振り向く。

窓から差し込む日の光。その中で万年筆をいじる彼は幼い少年だった。傷ましい程に。
「……何でもいいけどさ」
「え、何」
「あんたのプライベートに関わる事で、私達の采配に影響を出すような下手は打たないでよね」
顔を上げる司令官。彼に放った言葉は、一見突き放したようにも思えるものだ。
だが、そうではない事を、彼もまた理解した。相手の事を理解しはじめていたのは、敷波だけではなかった。彼は微笑んだ。光の中で溶け入りそうな程、柔らかく。
「大丈夫。それだけはしないよ。今の俺は、君達がついてくるのを後悔しないような『司令官』である事を目指してるから」
光の中にあるのに、彼のその笑みには、かなしさが付きまとっていた。
その表情に、とある既視感が頭を過ぎる。
「……ま、頑張りなよ」
敷波は、扉を閉めた。脳裏に過ぎったその連想を振り払うように、引き攣りかけた自身の表情を隠すように、強く。
(まさかね)
後ろ手に握るドアノブは冷たい。駆け寄ってくる漣の足音が聞こえる。入渠上がりらしい。それを耳にしながら、彼女の頭にはまだその強いイメージが残っていた。
面影を見た。深海棲艦、その中でも自分達に似た姿をしている、リ級以上の彼女達の。

敷波が、嘗てこの基地の幹部を一掃する事となった、「艦」が被害に遭ったという集団暴行事件の事を知るのは、今暫く先の事だ。更に、その「艦」が今なお生死不明だとも、彼女が知る由もなかった。
Ｅｎｄ.

強さと弱さ

対潜警戒任務の遠征の報酬。この司令官がそれで最初に買った家具は、布団だった。それに対して、当時の主な秘書艦だった漣は首を傾げた。ツインテールが揺れる。

「御主人様、何でオフトゥンなんです。壁紙でも床でもカーテンでもなくて」

「必要だからね」

いって、ピンクのカバーの布団を部屋の片隅に寄せる。軍服の白い後ろ姿を眺めていた漣は、はたと気付いた様子で声を上げた。

「はっ、まさか、私達を押し倒す為ですか!? この基地で爛れたハーレムを築くおつもりですか御主人様！ エロ同人みたいに！ エロ同人みたいに!!」

「漣、発言は自重なさいね。そんなんじゃないよ。ただ、そろそろ季節の変わり目でしょ」

秘書艦の言葉を諌めながら、司令官はいった。

「俺には必須なものだからね。次は暖炉かな」

「？」

その時の漣は、まだ彼の言葉の意味がわからなかった。

体温計を見る。水銀のそれが、とあるメモリまで伸びていた。それを見て、曙は声を上げた。

「馬鹿じゃないの、このクソ司令！ ３９℃とか何事?! 軍人らしい健康管理ぶりね！」

「曙、お願い、もう少し声を低く……頭に響く……」

「……何でこんな高熱なのよ、流感じゃないの」

マスクをつけた少年が、その部屋の片隅で布団に横たわっている。部屋の中央には達磨ストーブが鎮座しており、その上には鍋が置かれていた。この部屋の主の加湿の為に水が張られている。既に湯に変じつつあるそれに、誰かが汁粉の缶をいくつも漬けていた。許したのは部屋の主なのを知っているので、曙はそれに関しては何も言わない。何も言わずにローテーブルを布団の上に渡し、重ねて書類を載せ

る。そして無理矢理、身体を起こす司令官の頭から氷嚢を退けてやった。寝間着姿の彼は、マスクで覆われていてもわかる程に、白い顔を真っ赤に染めていた。大きな目は焦点が合わず潤んでいる。それでも差し出された印鑑をしっかり握ると、蓋の外された朱肉に押し付け、判を捺した。そして、司令官は仰向けに倒れた。布団へ。今の動作で疲れてしまった彼は、天井に向けて溜息を吐いた。マスク越しだったが。

「静かにしてくれて有難う……インフルエンザではないってさ。急な発熱って訳でもないし。じわじわ上がってきたのをちょっと放置してたら、気が付いたら38℃超えてて」

「馬鹿じゃないの」

「面目ない。37℃までだったらいけると思ったんだ……」

ローテーブルを片付けながら毒突く。そんな彼女に司令は目を瞑って眉を顰めた。自主的に布団を被り直す彼は、テーブルを隅に置く曙の背中に向かっていう。咳き込みながら。

「……こりゃ駄目だ。君達『艦』にはうつらないだろうけど今日はこの通りだ。今のみたいな余程、重要な書類以外は漣か敷波に頼んであるから」

「知ってるし。今のあんたが使い物にならないのは見ればわかるわよ、クソ司令」

「だよねー。それじゃ、お休みなさい……」

苦笑いした彼は、氷嚢を自分の額に乗せた。

本日、執務室には休業の看板がかかっている。その為に別室では、秘書艦が指揮を執りながら書類の整理をしている。その傍ら、漣が口を開いた。

「これで3回目ですねー御主人様が風邪を引くの」

「3回目ぇ？　あのクソ司令、まだここに着任して日が浅いんじゃないの」

「小さい頃から病弱なんだってさ。よく軍人になれたよな」

相槌を打つのは曙と敷波だ。先程、主に立ち回っている彼女達の代

わりに書類を持っていった前者は、漣の証言に呆れ顔になる。隣にいた霞や満潮も同じような表情だったが、前者の方がよりそれが深い。
「体調管理がなってないわね。体格は普通だし、あれだけ普段も食べてる癖に何で風邪ひくのかしら。見かけ倒しね」
「司令官なしで出撃は出来ないから、あの人が寝込んでるうちに全滅って事はないからまだいいけど体質改善はして欲しいわ」
「私達にどつかれても平気そうなのに、不思議よね～」
　背を向けて茶を淹れていた龍田が、至近にいた曙に湯飲みを渡しながらおっとりと首を傾げた。切り揃えられた髪が揺れる。装備を解いても浮いている頭上の輪が不思議だと、曙は密かにいつも思っている。書類を置いて焙じ茶を啜る彼女が眺める先で、龍田は次々に湯飲みを配りながら言葉を続けた。
「天龍ちゃんが肩パンしたり～プロレス技かけたり～寝技かけたり～それに川内ちゃんが夜戦させろって装備ごとどついてきたりしても～案外平気そうだもの～」
「主に天龍が酷い目に遭わせてるな」
「御主人様がマゾだったらとんだご褒美なんでしょうけどねー」
「怒らない上に抵抗もしない司令も司令ね」
　そういえばそんな姿を見た気がする。霞が怒る横で湯飲みを置いた。詳しい事はわからないが、霞の言葉通りなら、どうやらそれから逃げずに受け止めてしまっているらしい。その様を想像してみたが、普通の人間が「艦」の自分達の攻撃を喰らったら、あまり無事では済まない事が容易にわかった。そういった事は「艦」同士なればこそ、じゃれ合いで済む。丈夫なのは軍人ゆえだろうか。敷波が嘆息しながらも、何か物言いたげだったのを曙は気付かなかった。湯飲みを配り終えた龍田は、盆を戸棚に置く。
「ハードはそんな風にとても頑丈みたいだけど、どうにもソフトは弱いみたいね～。何でかしら」
「……取り敢えず食べて治して貰わなきゃいけないし、食事、司令のところに持っていってくる」
「あら、私が行くわ～。貴女はここで仕事を回してて。私は司令の口

に食事を突っ込んでくるわ～」
立ち上がりかけた敷波を、龍田がやんわりと押しとどめる。確かに彼女と漣にいて貰わないと今日は困るので、それは助かった。敷波は、頷いた。それを眺めながら、曙は思う。右隣の怒っている霞と、左隣の、呆れてはいるが、どこか心配そうな満潮に挟まれながら。
軍人にしては鷹揚で温厚な人間だ。曙は短い付き合いながら、この基地に就任した司令官をそう判断している。それは天龍や木曾などのような苛烈さとは遠く、それゆえに目覚ましい武勲を立てさせる訳ではない。戦って勝つ事が自分達「艦」の本分ゆえに、忍耐と慎重を求める采配に物足りなさを覚える者も少なくない。士気も上がりにくい事は否めなかった。その不満を緩和させているのが、普段は部下に好き放題をいわせ、させている彼の鷹揚さだった。どちらがましか、曙にはまだ判断がつかない。
『戦いに出る艦なら、それでいいよ。俺は君達のような気性の激しさは持っていないし。それに案外、君は運が良いようだしね』
それでも1度、見た事がある。霞がおっとりと彼女の物言いを受け入れている司令官に、「何とかいいなさいよ」と文句を吐けた。その際の答えがそれだ。
『君の叱咤に応えられる。それが俺が目指すところの司令官だしね。帰れば、また来られる。正しくその通りだ』
（満潮をはじめて入渠させた時も、そういえばいってたな）
曙は重ねて思い出す。霞とは違った捻くれた物言いをする満潮が見せた、はじめての本音。それに対し、彼は微笑んでいった。
『大丈夫。任せて』
（……それでも、聖人君子だとは思えない。軍人だから）
曙の頭に、どしりと乗る。それは司令官が、飽くまで自分達を運用する軍人に過ぎないという事実。彼女は書類の文字を追いながら、考える。
あの司令官は自分達の命を最優先するという点では、これ以上なく揺るがない。それだけは確かだ。あの年で、いっそつまらない程に功を急がないというのは貴重かも知れない。だが、それが、あまりにそ

れに従順すぎる印象を彼女は受けてやまない。まるで、そうする事で自分達の気持ちを集める事を目標としているようだ。平たくいえば、人気取りだ。良い司令官を演じているようだ。
(これはさすがに勘繰りすぎてるとは思うけど。実際、慎重すぎて不満も起きてるし。でも、少なくとも、目指すところが、「良い司令官」とは別のところにあるように思える。……その為に、ここで司令官でいる気がする)
だから、自分達は利用されているようなものだ。曙は、そう思い込もうとした。思い込んで、絆されそうになる自分を戒めようとしていた。窓の外では、そろそろ日が暮れる。

ひやり、冷たい手。それが額に触れた。
「兄さん、また風邪を引いたのか」
頭上から降ってくる。それは弟の声だ。自身とよく似ているといわれた。当たり前だ。呆れの色を帯びるそれを聞いて、彼は少し、安堵する。
(ああ、ここは実家なのか)
瞼は閉じたまま。開く事はない。降ってきた家族の声、それだけで安堵した。匂いも、音も、実家周りのそれだった。そして聞こえてきたその声に安堵した彼は、ゆるゆると思い出す。
自分より体格は細くとも、健康な弟。商才に恵まれていた。だから、弟が養父の事業を継いだ。それでよかった。それで安心した。安心して、軍人になる事を決められたのだ。家督争いの心配もなかったから。
それなのに、なぜ弟は、あんな顔をしたのだろう。あんな、辛そうな顔を。
「なぜ、好き好んで軍などに行くんだ。兄さん」
決めた事だよ。頭を振る。すると益々、弟は激昂した。
「あそこは僕達を生まれる前から蔑ろにするところだ。ましてや、兄さんの体が弱いのは、僕達が生まれた時に軍の保護が薄かったせいだろう」

それでも、■■■。俺はね。
「僕には兄さんが、わからない」
御免。御免ね。お前に、そんな顔をさせたかった訳じゃないんだよ。
ああ、帰れない。帰れないんだった。自分の目的を思い出して、涙が出そうになる。
御免ね。俺は帰れないんだったよ。御免、御免ね。御免ね。
「何を謝ってんのよ、クソ司令」
はたと、眼を開く。視界が滲んでいた。瞼を瞬くと、頬に伝う何かを感じた。額に乗る重たい感触がない。それに気付いて顔を傾けると、暗がりの中。薄明かりの傍らで、曙が氷嚢に砕いた氷を入れているところだった。その口を閉める曙は、この暗闇の中で昼間の服のままだ。そんな彼女に、彼は問う。
「曙。今、何時」
「時計を見なさいよ。……もうすぐ明け方ってところかしら」
憎まれ口を叩きかけたところで、暗くて時計が見えない事に気付く。それで窓の外を見遣った曙の応えに頷いた彼は、身を起こそうとした。
「夜明け前が1番暗いっていうけど、本当に暗いね……」
「ちょっと、先に熱を測りなさい。何が欲しいの」
「水」
いいながら布団に戻り、曙に渡された体温計を寝間着の中に突っ込む。敷き布団から晒された首筋に、ストーブは点いていても僅かな温度差が心地良かった。少しばかり気分が良かったから改善しつつあるのかも知れない。彼がそう思っていると、水差しの吸い口が差し出される。それを大人しく飲む。口から離された時に、彼は横の彼女に問うた。
「ありがと。でもどうしたの、こんな時間に」
「夜回りのついでよ。今日は私が当番だったから。司令官がいつまで経っても臥せってたら基地が滞るし」
「ああ、夜回りか……」

「秘書艦とはいっても、敷波や漣にばっか看病させる訳にはいかないでしょ。戦場でもないのに体力を使わせるとか」
「ああ、そうだねえ。気遣ってくれたんだね」
「……仲間をね」
「うん、そうだね」
　おっとりと頷く、彼の額に、曙は何かを誤魔化すように氷嚢を乗せた。やや乱暴に。少し潰れたような声がした。その下の、彼の頬に伝った涙は、既に乾いていた。それを眺めながら、曙はいう。
　看病の為にやって来たら、氷嚢がすっかり温くなっていた。それを取り替えていた矢先、魘されだした。ただでさえ幼顔なのに、寝顔は子供そのものだ。だから魘されている様は、少々見ていて辛い。だから起こそうとした。その時に、彼の口から漏れた名は。
「ねぇ。■■■って誰」
　脇に体温計を挟んでいる為、動けない。それでも彼の体が強張ったのが見て取れた。顔も顰められた。だが直ぐに、その表情はいつもの緩んだ笑みへと変じる。ただ、それは苦笑の類だった。細められた目が、頭上の曙へと向けられる。
「……呼んでたかあ」
「男の名前みたいだけど」
「うん。故郷の、弟」
　「故郷」という言葉に、気持ちがこもっていた。それは、病で弱っているからか。それとも別の要因か。曙にはわからない。彼女が返事をしかねていると、彼は「ちょっとツッコミが厳しいところは曙に似てたかなあ」と笑った。それが屈託のない、いつものものだったから曙はどこかで安堵しながらいつものように返事をする。
「男に似てるっていわれても嬉しくない」
「だよねえ」
　けれど、それから彼は言葉を続けなかった。まだ眠かったのだろうし、熱も下がりきっていない。曙は盥に僅かに残った氷を眺めた。湿気はあるものの温かい部屋の中で、早々にそれは溶けはじめていた。薄暗がりの中、東の空からは僅かに白んでいた。

「似てるから、私達の事を大事にしてるの」
「そういう訳じゃないよ」
「艦」に間違われる司令官。屹度、弟も似ているのだろう。それを前提にしての問い掛け。即座に否定の言葉が返ってくる。見下ろすと、円らな目が、まだ焦点は合わないもののこちらを見ていた。茫洋とした眼は、底知れないものがある。それが戦場での感覚に似ていた。そう、深海棲艦を相手取っている時のような。なぜ、ただの人間である筈の彼にそんな気持ちを持つのかわからないまま、曙は重ねて問う。
「じゃぁ何で」
「知りたい事の為に、軍に入った」
彼はいった。喉が荒れ、掠れた声で。
「でも今は、それとは別に、なりたいものが出来たんだ」
「……」
「その派生で俺の扱いが君達に対して良いものになっているなら、それは俺が目指すものに近付いてる証だから嬉しいよ。まだ、俺は迷ってるから」
「……質問に答えなさいよ」
けれど、それが屹度、今の彼なりの答えなのだろう。曙はそれだけは、悟らざるを得なかった。
迷いながらも、他に影響を与えないように進む。それが今日の彼の采配に影響していた。それが彼がまだ若く、あまりに人間的だと、気付かざるを得なかったのだ。

Ｅｎｄ．

新米司令官の基地は人手も資材も不足しています

売り言葉に買い言葉、という訳ではなかったらしい。

「暇なら整備でもしてきてよ！　ただでさえ、この基地は人手が足りないんだから」

「いいよー」

「え」

飛鷹の言葉に、彼はあっさりと頷いた。きょとり、眼を瞬く彼女の前。椅子を大きく引いた彼は、執務室の机。そこの1番下の抽斗を開く。1番大きく作られたそこから、取り出されたのは工具箱だ。真っ赤なそれはスチール製のようで、蓋を開くと3段式ユニットになっている。その中には工具の他に、何やら布の包みが押し込まれている。飛鷹がその箱の側面を見詰める中、工具を改めた司令官は、蓋を閉じるとクローゼットから服を取り出す。作業着とタオルだ。軍帽を机に置くとタオルで頭を縛った彼は、当たり前のように飛鷹を振り返った。

「それでどこだっけ、エレベーターの油圧だっけ、君の艦載機だっけ消火ポンプだっけ」

「……司令、2～3、突っ込みたいところはあるけど、それより先ずね」

巻物を巻きながら、飛鷹はそれを指差す。戦闘時には勅令を出すその指が示すのは、司令が取り出した工具箱。赤く比較的、真新しいそれの側面に、油性ペンで書かれたのだろうか。文字が躍っていた。

「『司令官に昇進という名の左遷祝い』って、これ嫌がらせじゃない」

「友人なりの餞だよ、これでも」

軍服のジャケットをハンガーにかける、司令官の幼顔には苦笑が浮かんでいた。その彼の背後、机に鎮座する赤い工具箱に書かれた文字は男性のものと思われた。

床の上に胡座を掻く。時折、工廠の整備員達が来て手伝おうとしては司令官にあしらわれて帰された。彼ひとりで充分らしい。飛鷹はいわれるがままに工具を手渡しながら、口の動くままに司令官とのお

喋りに興じる。目や顔は目の前の機械に一心不乱に向けている、作業着姿の司令官は淡々と語る。この工具セット一式を心温まるメッセージ付でプレゼントしてきた友人の話だ。
「訓練時代の同期でね。専ら剣術のライバル、っていわれてたな。とはいっても彼の方が圧倒的に強かったけどね。俺は点数稼ぎで勝つタイプだったから」
「へぇ、貴男、剣道出来るのね」
「……飛鷹、飛鷹ちゃん、飛鷹さん。俺、軍人だからここにいるんだよ」
　彼女の名を3度も呼んで振り返る、司令官の白い顔には既に黒い汚れがついている。それを何となく指先で拭き取ってやりながら、彼女は小馬鹿にしたように笑う。
「そうして凄く楽しそうに整備に勤しんでるところを見ると、幹部というよりは工兵だけどね」
「自分で頼んでおいて！　そこのペンチ頂戴」
「これね」
　取りかけ、手についた汚れを思い出す。それを司令官の作業着の端で拭ってからペンチを取った。彼は物言いたげに彼女を見遣ったが、悪びれず目を背ける飛鷹に軽く息を吐きながら作業に戻る。そして、受け取ったペンチを軍手で手にしながら、ふと、彼はいった。
「まあ、実のところ工兵希望だったけどね。昔なら」
「昔」
「小さい頃、そうだね。君達の事を知らなかった頃は、もし軍人になるんなら工兵がいいなって、友達と話してた。昔から機械いじり、っていうか物いじりは好きだったから。今でも趣味だから、左遷先でつまらなかったら気晴らしになるように、って友人はこれをくれたんだ。まあ楽しいけどね、今も」
　そう語る、彼の横顔は幼い。実際にまだ若い。昔を懐かしむような年でもないのに、語るその想い出は遠い昔の事のよう。飛鷹は、そんな彼に尋ねる。
「いつから、軍人を……幹部を目指すようになったの、貴男は」
「養父が元軍人だって知ってからかな」

「へぇ、何て人」
「――あれ、何か騒がしくない。向こう」
「あら本当」
　誤魔化されたとも思えない程、自然な言葉だった。飛鷹は彼の言葉に釣られて、そちらの方を見る。確かに、騒ぐ声が届いてきていた。あの声は同じ船艦の者達のものだ。特に一際騒いでいるのは、妙高型の誰か――「騒ぐ」という点で心当たりといえば、司令官にも飛鷹にもひとりしかいない。思わず顔を見合わせる。丸っこい目が交わったところで、軽やかな足音が近付いてきた。先に騒ぎの聞こえてきた方からの道を曲がってきた人物を、見咎めたのは飛鷹だ。彼女は声をかける。
「不知火、何かあったの」
「あぁ飛鷹。それに、よかった司令もここにいらしたんですか」
「あっちってドッグの方だよね。騒いでんのって、もしかしなくても足柄かな」
「もしかしなくても足柄です」
　鸚鵡返しに答える、不知火の言葉に司令官は嬉しそうでもなく溜息を吐いた。不知火は淡々と報告する。
「先程、足柄のいた艦隊が帰投しました。足柄は中破していたのですが、中破程度ならまだ出られるといって第６駆逐隊の遠征についていこうとしていて。今、那智が羽交い締めにして妙高と羽黒が説得に当たっています。どうやら士気高揚しているようで」
「困ったなあ。破損した時点で出ちゃ駄目っていってるのに」
「それで司令に説得して頂きたく」
「んーでも、こっちまだやりかけなんだよね」
「ちょっと貴男、司令官でしょ。こっちはいいから行きなさいよ」
　いいながらスパナを床に置く。そして工具箱の中を漁りだした司令官を飛鷹は咎めた。不知火は無表情のまま彼の行動を見守っている。司令官は「あったあった」と袋を取り出した。飛鷹が見た、あの布の包みだ。それから何かを取り出すと、不知火を手招きする。そして彼女の手に何かを渡した。それもまた藁半紙に包まれていた。瞬

きをする不知火を見ず、彼は作業に戻る。
「足柄に、あとで執務室に来るようにって言付け頼むね」
「諒解しました」
「ちょっと」
「飛鷹、不知火についてって様子見てきて」
　戸惑いながらも頷いた不知火。そんな彼女がさっさとドッグに戻ろうとしたので、飛鷹は司令官に命じられるまま、彼女についていく。黙々と作業を続ける司令官を振り返りながら。

『あんた、無茶しますね』
　手渡された大きな箱。それの中身が、この御時世にしては赤い立派な工具箱だと、知るのは船に乗ってから。見送りの港。小さな鞄ひとつ。それだけで海軍の船に乗り込もうとしていた。向こうには、養母。別れは先程、済ませた。弟は来てくれすらしなかった。それが、寂しい。勝手な行動の結果だとわかっていても。彼は笑う。
『好き放題した結果だから、粛々と受け止めるよ』
『よくいいますよ。あんた、態と問題を起こしたでしょう』
　嘆息する。彼とは違い年相応の見た目の友人は、切れ長の目だ。きょとりと瞠られる円らな目を睥睨する。友人は声を低めた。
『自分の能力と問題行動を秤に掛けて、上層部が自分の身の振り方をどう判断するか、正確に計測しきった。……あんたには、この上なく因縁のある泊地だ。僻地みたいなものだ。それでも立場でいえば18にして司令官、少佐殿だ。上や周りの溜飲が下がる上に、若い有能な士官の能力をフル活用させるには申し分ない。……あんた、何を企んでるんだ』
　友人が見据えてくる。大柄な友人に見下ろされると、彼はいつも自身が小柄なように思えてくる。こういう思いも、暫くはする事がないのだろう。それが、彼には寂しかった。寂しく思う事すら今の自分には烏滸がましいのだとわかっていても。友人の言い当てた通りで、こうして向かう先の鎮守府が、彼の計画を遂行する為の土台だったとしても。

だから、彼は微笑んだ。別れの為の微笑みだ。
『君が同期で、友人で、よかったよ。■■君。屹度、俺が、自分の決めたルールも破って何かをしでかそうとしたら。君は止めてくれるだろう』
『……甘えないでください。それぐらいの限度ぐらい、自分で見極めろ』
『うん。出来るだけそうする。そうしたいよ。……俺は、もし自分がそうなったら、自分に絶望するだろうな。……』
不意に、彼は首を傾ける。それを、訝しげに友人は覗き込んだ。そろそろ船の出港の時間だ。それを知らせる笛の音を耳にしながら、彼はいった。友人の背後では、養母が微笑んでいた。寂しそうに、微笑んでいた。
『俺と弟の生みの母も、そんな風に絶望したのかな。絶望は、死に至る病だそうだから』
『それは生物的な死ですか』
友人はいった。
『それとも、〝艦娘〟としての死――轟沈ですか』
『そっちだとしたら、もしかしたら、まだ』
『そろそろ橋を上げるぞー!』
船員の声がする。そして、彼は鞄と箱を抱えた。歩いてくる養母。友人と並んで、船に乗り、日本から離れた遠い地へと向かう上の息子を見送る為に。
自身の生まれた土地へと向かう、養子を見送る為に。
『あの人は、あの子が軍人になるのを嫌がっていました』
船を見送る息子の友人に、養母はいった。年老いた横顔。見下ろしながら、友人はいった。
『あの人の養父……貴女のご主人は、あの有名な軍人の』
『名など、欲しかった訳ではなかったでしょうけどね。あの人は。しかもあんな形で』
波が、さざめいた。

「戦場が、勝利が私を呼んでるわ!!」
「今は呼んでないからドッグに入れといってるだろうがー!!　司令が破損したら出るなといっただろう!!」
「そんな生温いルールなんて知らないわ!!」
「……那智、大変そうね」
「さっきから食い止め続けてる彼女はさすが重巡洋艦というべきでしょうか」
「あ、不知火に飛鷹」
　ドッグ前。飛鷹と不知火が駆け付けると、そこでは妙高型姉妹がいまだ揉めていた。それを取り囲む形で、数名の「艦」達が彼女達を見守っている。第六駆逐隊の面子もその中におり、進退窮まっている様子だった。それを見て飛鷹が、偶々傍にいた敷波に尋ねる。
「天龍と龍田はどうしたのよ。お使いだとあの子達がいつも引率してるのに」
「2人とも入渠してる。でも彼女達が1番だから入渠上がりを待ってたところだったんだけど……ねぇ、司令はどうしたの。司令なら舌先三寸で足柄を言いくるめる事だって出来るでしょうに」
「よくわからない。だけど、解決策を授けてくれたようです」
　敷波の中で司令官はどういう男なのか。飛鷹が密かに疑問に思っている横で、不知火が包みを広げる。藁半紙で包まれたそれは、よく見れば結構、長い。6つの目に見下ろされる中、それは広げられた。
　筒だった。
「何これ」
　飛鷹も敷波も首を傾げる。それはただの筒に見えた。但し、片端には管楽器の吸い口を大きくしたようなものがついていた。これがどうしてこの事態の収拾に役立つというのか。彼女達が揃って顔を見合わせる中、不知火だけはそれを具に点検していた。それを手早く終えると、藁半紙を丸めてポケットに押し込む。そしてその場に片膝を突いた。
「不知火、何を」
「飛鷹、敷波。危ないから退いて」

そういって、不知火は筒の片側を口に添えた。筒の、吸い口のようなものの方だ。その片端は、足柄に向けられていた。
息の吹く音。それと同時に、足柄の動きが止まった。
「うわぁ足柄?!」
誰かが叫ぶ。那智の腕から、ずるずるとその体が床にずり落ちていった。気を失ったようだ。その重量につられて那智もしゃがみ込んでしまう。そして羽黒や妙高と、足柄を気絶させた正体をその額に見つけて、叫ぶ。足柄の額。そこには小さな注射器が刺さっていた。
「おい誰だ麻酔を撃ったの?! これ獣医が吹き矢で使う奴じゃないか!!」
「不知火ですが」
「不知火!?」
妙高型三女の襲撃犯は、素直に白状した。飛鷹と敷波が顔を引き攣らせる、その間で、立ち上がった彼女は手袋を嵌めた手を上げていた。その右手には、筒――正体は吹き矢であるそれが持たれたままだ。不知火は唖然と見詰めてくる3人や他の者達の前で、淡々と告げる。
「足柄が起きたら、伝えておいてください。司令官が、あとで執務室に来るように、といっていたと」
「……それ、司令官お手製?」
「そのようですね。司令官が私物の工具箱から取り出してましたから」
普段は温和な司令官が怒ったのだろうか。青ざめる残り3人の妙高型姉妹と他の彼女達を余所に、敷波が問う。彼女は一見、落ち着いて見えた。だがその吹き矢の筒を手に取ると、頬を引き攣らせる。
「……これ、ひょっとして、基地の資材から使ったんじゃ」
「素材は聞いていませんが、十中八九そうでしょうね」
「2人とも、司令はどこ!?」
「しょ、消火ポンプ直してる」
問われるままに、飛鷹が答える。秘書艦の彼女はそれを聞くと、吹き矢を不知火の手に返した。そして走り出す。
……数秒後、敷波の怒鳴り声が轟いた。

「司令ー！　今ウチの資材はカツカツだっつってんでしょ変な装備を作るなー!!」
「うわあああ、ちょ、敷波?!　待っ……うわあああああ」
「……これ、妖精さん達じゃなくて、司令のお手製なんだ」
「偶に工廠に出入りしてるなーって思ってましたけど、こんなの作ってたんですね」
「ひょっとして1部の装備は司令が作ってるのかも」
「人手不足だしね」
　ひとまずは事態が収まったには収まったので、第六駆逐隊の４人が不知火の元へ集まってくる。そして彼女の手にする吹き矢を見て騒ぎはじめた。向こうでは取り敢えず、動かなくなった足柄を妙高型の３人がドッグに放り込んでいた。入れ替わりに天龍と龍田が上がってきて足柄の額に刺さったままの注射器を見て目を剥く。それらを見ながら、ひとり。飛鷹は言いたかった。さり気なく吹き矢を懐にしまう不知火の事で。
（……誰か、誰か、不知火が躊躇いもなく、しかもあんな暴れてる人の額に吹き矢を命中させた事につっこみなさいよ……！）
　その基地では、ツッコミも不足していた。

（その後、勝手に資材を使った罰として基地内中の整備に駆り出される司令官の姿が！）
「あれ、不知火。吹き矢は」
「何の事でしょう」
「……夜戦で使ってたっていう目撃情報が寄せられてるんだけど」
「不知火に何か落ち度でも？」
「……あげないとはいってないけどさあ。あ、飛鷹、それとって」
「つっこみなさいよ……司令……」
　Ｅｎｄ．

信じていないのは

漣の手から渡された通信文。至近の基地の司令官から出されたというそれに目を落とした彼は、最後まで読み終えると深々と溜息を吐いた。

「ウチの艦隊をひとつ貸してくれ、だそうだ」

「へぇ、いいじゃないですか御主人様。周りの基地の人達にウチの実力がやっと認められたって事でしょう」

「良くいえば、そうなんだろうけどね」

いって、手紙を置く。そして抽斗から便箋と封筒を取り出した。同時に漣に、彼の部下のある士官を呼ぶように命令する。飛鷹達の使う「艦載機」の整備班主任の、式神使いの老兵だ。整備班は彼ひとりである。2つの行動の意図が読めずに首を傾げる彼女に、万年筆の蓋を取った司令官は事もなげにいった。

「第3艦隊に行かせる。そんで、あの人を艦隊の管理官としてつける。ああ、上にもこの事を打診しておこうかな。あそこと敵対してそうな派閥に」

「え、そんなの1番艦で充分じゃないですか。向こうにも同じ『艦』がいる訳だし、話は通じるでしょう。それに上層部って」

「あのね、漣。俺は向こうを信用してないの」

手紙を書き付けるその手は淀みない。そしてその円らな目は胡乱そうに、司令官は出されてきた通信文を見遣った。それは、階級だけでいえば彼より上位の人物から出されたものだ。大きな目は、彼を幼く見せる最大のパーツ。だがその目が、今だけは少し研ぎ澄まされている。手紙の向こうの正体を見極めるように。

「ウチは戦果こそ、ゆっくりとしか上げてないよ。でも経験値を積んでるから全体的に皆、パラメータが高い。それは君達が負けてもいいから帰ってきてくれたのを繰り返した証だ。それを『お願い』なんていいながら上官である事を笠に着て、美味しいところどりをしてくるような奴は信用出来ないね。そもそも、あそこの基地は評判が悪いし」

「あぁ……物資の横流しとか癒着とか黒い噂を聞きますねー。まっくろくろすけですよ」
　漣も頷く。彼女が聞いたのは、演習相手の船艦の女性達からだ。普段は基地の外に出る事があまりない彼女達の情報源が演習だ。口伝えに噂で伝わってくるものばかりなので不正確ではあるものの、深海棲艦に関しての情報はそれなりに正確だ。中には上官にはいえないような事を愚痴り合う事もある。その中には「余所には内緒にして欲しいんだけど」という前置きで、とんでもない情報が潜んでいる事もあった。司令官はペン先を走らせながら、淡々と話す。
「そういう訳だ。手紙には大量にある資材を融通してくれるとかいってるけど、あそこの子達に何をさせてるのやら。上官である事を笠に着て、ウチの子達に無理をさせられたら困る。ついでだから彼に内情の偵察もさせる」
「そんな密偵みたいな真似をさせて大丈夫ですか、あの人お爺ちゃんだし」
「ご老人だから向こうも油断するよ。無理をして向こうを刺激するな、とはいっておくし。ひとまずは、ウチの子達に変な事をさせない為の抑止力だから」
「そーですか……何もないといいですけど」
　ひとまずは納得したように、手紙のインクを乾かすように扇ぐ漣は頷く。机の上で、漣の兎が耳を手入れしていた。それを尻目に、司令官は口に出さなかった事を思う。艦載機整備班の人間は皆、式神使いだ。多くが神道関係者で、その性質ゆえに人手は少ない。そして、艦載機として以外の形で式神を行使する事が出来ると知っているのは本人達ぐらいなものだ。たとえば式神に鳥や虫に扮させ、盗聴や盗撮を行う事も可能なのだ。今でさえ半ば強制的に軍に従事させられているのだ、この事を知られれば諜報員として更に危険な目に遭わさせられるのは目に見えていた。軽空母の彼女達――彼女達は兵器として特化しているゆえに、艦載機という形でしか行使出来ない――ですら知らない事実。それを彼が知っているのは、偏に彼の養父と、この基地の整備班主任が同期の友人だからだ。正確には、友人だった養父

は知らない。それを新しい司令官に教えてくれた整備班主任は、年輪の刻まれた目元。その眼差しで、孫のような年の彼にいった。
『司令。貴男のしでかそうとしている事は間違っているとは、私にはいえません。ただ、おひとりでなさろうとするのだけは、おやめなさい。失敗すれば貴男だけではない、多くの艦達を巻き込む。……いざという時は、私に押し付けなさい。老兵は去るのみですから』
『しかし』
『どうか、先行き短い年寄りに、後腐れなくあの世に逝けるように機会をください。私は、あの時。貴男のお養父上の力になれなかった。せめて、彼が守った、貴男の力になりたいのですよ。自己満足ですが、そうしないと死んでも死にきれない』
(「ついていけ」っていう指令を出せば、あの人は俺の意図をわかってくれるだろう。向こうに行って式神を行使した方が確実だ……予めいっておけば、無茶はしないだろうけど)
「まあ、何もなければ、単純に恩を売れるけどね。そもそも正規の話じゃないから、何があってもこっちに分があるよ。その辺のフォローは任せなさい。勝てば官軍っていう素晴らしい諺が、世の中にはあるからね」
　その事実は胸に秘め、司令官は不敵に笑む。幼顔の、普段は人の好い程に温和な彼が、那智などに「とんだ狸だ」と評される所以だ。漣は「さすが御主人様。口八丁手八丁、舌先三寸で白を黒と言いくるめられる人ですもんね！　頼もしい!!」と笑う。
「はははは、もっと褒めてくれてもいいんだよ。そういう訳だから、彼と第3艦隊に通達は宜しく」
「あれ、もう決定でいいんですか」
「第3艦隊を送りはするよ。管理官は、ウチの子達を向こうにとって運用しやすいようにする、飽くまで『厚意によるおまけ』だからね」
　眼を瞬く漣に、人の悪い笑みを浮かべる。しかし、それは次第に、労るような優しいものへと色を変えた。
「それに根回しもしておくから、もし向こうの黒い噂について不安を訴える子がいたら俺が必ず助ける、ってフォローしといて」

その変化があまりに急だったから、漣は戸惑う。駆け引きから、人情への移行。理性と感情の変遷。彼女は戸惑いながらも頷いて、そして、いう。苦笑しながら。
「それにしても、管理官をついていかせた本当の意図がばれたら、信用してないっていう事が丸わかりですね」
「いっそばらしてしまいたいところだ。仕事がやりづらくなるから、そういう訳にもいかないけどね。俺も、これから余所から人手を借りる事があるかも知れないし、その時の為にもコネは作っておかないといけないのが辛いところだ」
万年筆の蓋を閉める司令官はあっさりとしたものだ。そして溜息を吐く。
「本音をいえばね、どうせ俺は上から問題児扱いされてるんだ。貫いてやりたいよ。上に信用されたくて君達に無理をさせるのは嫌だしね。それに君達と信頼関係を築いてこそ軍に貢献出来るんだよ」
「……御主人様は、私達とは信じ合いたいのに、同じ軍の仲間の事は信じられないんですね」
「彼らに、信じて欲しいとも思ってないからね。それに、漣」
彼はいった。あまりに何気ないように。
「君達の事をそうだとは思っても、軍の皆を仲間だと思った事は、ないよ。友人はいたし、今はそれなりに信用出来る人達も出来たけどね」
嘲りも怒りも、そこにはなかった。無関心と呼ぶのが相応しい、それは無表情だった。
漣は、彼の中に根差している何かに気付いた。だが、それの正体を見極める事は、今の彼女にはまだ難しい。だから、代わりに、思った事をいう事にした。彼の、そのあまりに寂しい言葉に対して、感じた事を。封蝋の準備をする彼に、漣は兎を抱き上げながらいう。僅かに、労るように微笑んで。
「御主人様。私達を信じてください」
「……？」
顔を上げる、彼は不審そうだ。ワックスのケースを片手に見上げる。そんな彼に胸を張って、漣はいう。

「貴男が育てた艦隊ですよ。そんじょそこらの奴にどうにか出来るとお思いですか。貴男の小賢しさや小狡さを受け継いでるんです。ちょっとやそっとのトラブルだったら自分達で何とかしちゃえますよ」
「……うん、そうだね」
同意する、司令官の顔は、それでも苦渋が満ちていた。漣はそれを見て、少し、彼の蟠りの正体が見えた気がした。
不安なのだ。信じ切れない。どんな事が起きるかわからない。だから常に、この人は怯えている。誰より、自分の采配を信じていない。自分を信じていないのだ。原因はわからないが、この軍の中において、彼は常に不信を抱いていた。だから、漣はいった。
「私達は御主人様を信じてますよ、口では何といってても。だから、司令も信じてください。お互いに」
「……優しいね、漣は」
直ぐには頷かなかった、彼の微苦笑に、傷を感じた。それでもいつか通じると、漣は信じた。
信じたかったのかも知れない。

（信じて貰う為には、自分が信じる事。それがあまりに遠く）
「あの艦隊が来たら、入れ替われ。お前はここの生活から脱せられるんだ。良い取引だろう」
Ｎｅｘｔ……？

コーヒー・カンタータ

戦法の基本とは、相手の補給線を絶つ事だ。補給路を断つ事で極めて省コストに勝利を得られる。老教授はそう教えてくれた。

「歴史を繙けば、それがよくわかるよ。馬鹿正直に正面突破を図るものじゃない。……深海棲艦の正体の通説を考えると、あまり、低コストに勝つとか、そういう事はいいたくないんだがね。要は向こうに、こちらの分の犠牲を余計に強いる訳だから……」

後半の言葉は、レポートを提出した時に丁度ティーブレイク中だった教授の紅茶を分けて貰いながら漏らされた。受け取ったレポートをその場で採点していた教授は、皺の連なった手で、自分のカップにブランデーを注いだ。なみなみと。紅茶入りブランデーと化したそれを凝視しながら、彼は自分のカップを傾ける。少しばかり、渋かった。教授の表情が彼と似ていたのは、けれど紅茶の味と、自分の紅茶を淹れる技術の拙さだけではなかった。教授は、ずれた老眼鏡を直しながらレポートを折り畳んだ。

「君は恐らく、優秀な軍人になれる。今の軍人は、戦闘員ではなく、司令官か参謀である事を望まれるからね。体が弱くとも十分にやっていけるだろう。けれど、それは多くの『艦』を轟沈させる事と同義だ。敵味方を問わずね。その意味を、君は他の誰よりも罪深く受け止める事になるよ。だって君は」

鐘が鳴った。予鈴の音だ。それに重なって、続いた言葉は遮られる。けれど彼の耳には届いた。届いてしまった。教授は口を閉ざす。そして、採点済みのレポートを差し出した。

「内容はいいけど、次からはもう少しフォントを大きくしてくれ。最近、老眼が悪化してきてね」

「わかりました。それと教授、紅茶をご自分で淹れられるのは、もうやめた方がよろしいかと」

「コーヒーにはしないぞ」

「……紅茶、御馳走様でした」

レンズの奥に頑迷さを見出して、彼はそれ以上の追求はやめる事に

した。まだ艦娘の運用が一般化されておらず文字通りの艦船のみで深海棲艦に対抗していた彼の現役時代、希代の策士として鳴らした軍人を閉口させたのは、軍のまずいコーヒーだったそうだ。本人が元より無類の紅茶党だったゆえにコーヒーへの反発は根強いらしい。彼にも主張したい事はあるが、老教授が親紅茶派として譲らぬ事はわかりきっていた。

（コーヒーだってちゃんと淹れれば美味しいのに）

卒業後、早々に司令官として昇進という名の左遷をされた彼は、給湯室にひとり立つ。コーヒーミルから取り出された焦げ茶色の粉をドリッパーに流し込んだ。ガスレンジの上では、薬缶が不機嫌そうに湯気を盛んに立てていた。そこは辺境の鎮守府。執務室からも少し離れたそこで、肩書きの上ではこの基地の最高責任者の司令官は、コーヒーを入れるべくそこに立っていた。

（そういえば、昔はコーヒー豆に事欠いたんだっけ。紅茶は何とかなったらしいけど）

コーヒー粉の上に湯を注ぐ。それが濾過されるのを待ちながら、連想するように思い出したのは、軍事学校時代の戦争史学の老教授、それから日本におけるコーヒーの事。その昔、まだ深海棲艦の問題が露見していなかった頃は、国家同士の争いが盛んだった。日本ではコーヒー豆の栽培はほぼ不可能に近い。ゆえに今も昔も輸入一辺倒だ。だから戦争中、補給路が封鎖されていた時はコーヒー豆のコーヒーを飲む事が叶わなかったという。蒲公英や桜の根などを利用した代用品の研究はされてらしいし、彼も口にした事がある。結論としては、やはり豆のコーヒーが好きだった。それは今でも代わらない。

尤も、最近やってきた鳳翔が、忙しい彼を気遣って淹れてくれる茶は、決まって日本茶。同じくやってきた金剛は紅茶をプッシュしてくる。仕事の合間に飲もうとすると差し出される茶は親切そのものだから、拒絶するのも気まずい。ゆえに、このところはコーヒーを口にしていなかった。習慣のように飲んでいる風邪薬にはカフェインが入っている為にカフェイン中毒による頭痛は発症していないものの、精神的に飢えていた。その飢えを満たす為に手ずから豆から碾いた

コーヒー粉は、悪魔のように黒い液をドリッパーから滴らせていた。
「そうだ、牛乳」
黒いそれをみて、対照的な色を連想した。屈み、至近にあった冷蔵庫を開く。そこでは牛乳パックが鎮座していた。戸棚からミルクパンを取り出し、牛乳をそれに注ぐ。なみなみと注いだのは彼が特にカフェオレを好んでいた為もあったし、1杯のコーヒーで済ませるつもりもなかったからだ。
「あ、しれぇ、いた！」
けれど、給湯室の前を駆け抜けようとした舌足らずな声に、彼は口封じを決めた。駆け込んできた幼い彼女が秘書艦の名を声を張り上げて呼ぶ前に、彼は即座に微笑みかける。
「しれぇ、敷波が仕事しろって捜してましたよ！　鳳翔や金剛も！」
「やあ、雪風。カフェオレとホットミルクとココア、どれがいい」
「ココアがいいです！」
彼の片手には牛乳の注がれたミルクパン、片手にはいつの間にやら純ココアの容器。雪風は敷波に課せられた任務をあっさり放擲した。
「しれぇはコーヒーがお好きなんですね」
シンクの縁を両手でつかむ、少女の目は白いカップに注がれていた。少女の手には丁度よい小さめのものだ。それに熱々のココアが注がれていく。問われた彼は、頷いて手鍋を戻した。笑って見下ろす姿は、軍帽と軍服のジャケットを脱いでいる為にただの学生にしか見えない。事実、先程から給湯室の前を忙しく通り過ぎる軍人や艦娘は、彼の後ろ姿をみても司令官だと気づく様子はない。司令官が自ら給湯室で茶を淹れるとは考えにくい先入観もあるだろう。それをいい事に悠々とココアを淹れてやった彼は、「まだ熱いから座って待ってなさい」とパイプ椅子を引き出してくる。それに素直に座る雪風に、彼はそれから頷いた。シンクの上では、カップになみなみと注がれたココアが湯気を立てている。
「うん。特に好きなのはコーヒー牛乳かな」
「こーひーぎゅうにゅう」
「あれ、知らないかな。……ああ、君は『ブリーダー』の元を離れてあ

まり時間が経ってないか。駆逐艦だし」
　円らな目を瞬く雪風。鸚鵡返しにいう彼女に、司令官は首を傾げかけ、眉を顰めながらも納得したように頷いた。その表情の意味を雪風は理解していない。司令官は理解も納得もしていなかった。ただ、知っていた。
「陽炎型雪風血統」は希少価値がある。数は少ないが、その神に偏愛されたような運の良さは他の艦娘にはないものだ。だから他の艦娘よりも、「ブリーダー」――戸籍上は「養い親」――に大切に育てられる。それこそ、艦娘として鍛えられはしても、表社会に出られる機会は自然と限られる。だから、１００種を超える装備の名前を把握していても、こんな些細な常識を知らない事もよくあるのだ。それは他の艦娘にも共通した事だが。
　彼の実母もそういう傾向があった、そういう風に育ててしまった。「ブリーダー」も兼任していた養父は、彼にそう告白した。皺と共に苦渋も刻まれた顔だった。
「……コーヒー牛乳っていうのは、まあカフェオレみたいなもんかな。でもお店で売られてるコーヒー牛乳は味がちょっと違うんだ。配合は企業秘密らしくてね」
「へー、美味しいんですか」
「俺は好きだよ。そうだね、今度のお休みにでも足柄達辺りにでも銭湯に連れて行って貰いなさい。この辺りは日本人街だから銭湯もあったと思ったしね。そこでお風呂上がりに飲むコーヒー牛乳が格別なんだ」
「へー……」
　自分のカップにコーヒーを注ぐ司令官の言葉に、雪風の目は俄に輝いた。子供らしいそれに、彼は目を細める。その眉間に皺が寄ったのは、ほとんど無意識だ。それを自覚してかしないでか、彼は笑みを浮かべる。
「……小さい頃に家族で銭湯に行ってね。その時、美味しく感じたのは楽しかったからかな」
「銭湯って楽しいんですか？　それにあまり一気に基地を空けても」

「少しぐらいなら大丈夫だよ。それに、そうだね。でも、どちらかというと……」
「Ｏｈ！　司令！　こんなところで何してるんデース?!　しかもコーヒー飲んでますネー！」
「げっ」
　砂糖を入れていたところで、給湯室に飛び込んでくる影。雪風が目を見開いた。
「あ、金剛」
「Ｈｅｙ、雪風！　見つけたら教えてくださいっていいましたよネー！　……司令、雪風をココアで買収しましたネー!?」
　巫女服に似た衣装に身を包んだ金剛は、飛び込んだ勢いのままに給湯室を見渡して状況を把握した。そしてミルクパンを掴んだままの司令官に詰め寄った。彼はカップに牛乳を注ぎながら視線をさまよわせる。罪悪感の発露である。
「い、いいじゃん、偶にはコーヒーが飲みたかったんだよ。あと雪風は悪くないからね」
「そんなのわかってマース！　でもそれより、この忙しい時に執務室からいなくなるんならひと言ぐらい残してってくれって敷波が怒ってましたネー！」
「マジか……敷波、怒ると怖いんだよな……これ飲んだら行くっていっておいｔ」
「その前に司令には、今後こんな事がないように私がきっちり紅茶党にしてあげマース……美味しい紅茶を淹れてあげますから、雪風は司令を足止めしててくだサーイ！」
「了解しました！」
「あっちょ雪風、ココア作ってあげたでしょ！」
「まだ冷めてないですー」
　金剛に指示を出されて、本来の任務を思い出したように雪風がカップ片手の司令官の腰にしがみつく。そうなると女子供を邪険に出来ない彼は身動きがとれない。それが深海棲艦を相手取って戦える艦娘であってもだ。だからいそいそと準備をはじめる金剛に説得を試

みる。正直な話、紅茶には飽きていたのだ。
「ちょっと待っ、金剛！　俺だっていいたい事はあるぞ！　お前だってコーヒーの味わい深さをちゃんとは知らないだろ?!」
「コーヒーなんて泥水ネー」
「ええいあの教授みたいな台詞を！　……わかった、飲む、紅茶も飲むから雪風はとりあえず離れなさい、ココアはもう飲み時だ！」
「Ｏｈ，それは嬉しいですけど飲み過ぎると水腹になりますヨー」
「鴛鴦茶！　鴛鴦茶で手を打つから！」
「しれぇ、えんおうちゃって何ですかー？」
「金剛、雪風、何を騒いで……あ！　司令こんなところに……！」
「ちょ、待って敷波、俺が悪かったから機銃を構えないでええええ!!」
「し、敷波落ち着いてくだサーイ!!　ここは基地内だし雪風もイマーｓ」
　その時、基地の一角で銃撃音が響いた。
「……ご主人様、何でちょっと焦げてるんです」
　手紙を届けに来た漣は、執務室に戻ってきていた司令官を見た時、彼の頭からわずかに上る黒い煙に気づいた。執務室でカップを片手に、いつもの万年筆でサインをしている姿はごくいつも通りだ。ただ、直毛の髪がところどころ輪を描いており、顔には煤が残っている。まるで戦場で破損してきた自分達のようだ。実はジャケットと軍帽は無事だったものの、その白いスラックスも焦げているのだが、机に向かっているからその時の彼女には見えなかった。時々むせ込んで煙を吐く司令官は、カップをソーサーに置いて手紙を受け取る。そして彼女の疑問にも答えた。
「中波しかかってね。金剛は戦艦だし島風はさすがの幸運値で俺に当たったおかげで給湯室も被害なかったけど、７．７ｍｍ機銃って結構痛いね。敷波は本気で怒らせちゃいけないね、漣」
「今度は何をやらかしたんですか……ってそれ、コーヒーですか。珍しいですね」
　呆れて溜息を吐く、漣の視界にカップの中身が映る。茶色のそれは一見するとコーヒーに見えた。鳳翔や金剛が機会があれば彼に茶を

淹れていたが、決まって日本茶でなければ紅茶だったから、彼がコーヒーを飲んでいるのは久しぶりのように思えた。しかし司令官は頭を振る。
「半分はね。鴛鴦茶だよ」
「鴛鴦茶って何です」
「コーヒーと紅茶のブレンドティー。香港だったかな、その辺のお茶だよ」
「美味しいですか」
「飲めなくはないよ。ああ、給湯室に俺と金剛が淹れておいたコーヒーと紅茶にティーコゼー被せて置いてあるから好きに飲んでいいよ、ブレンドしてもいいし」
「ブレンドは遠慮しておきます。しかし、世の中には色んなお茶があるんですね」
　手紙をペーパーナイフで開く彼は、漣の言葉にただ頷くだけだ。彼がこの時開いていたのは、黒い縁取りの封筒。それが意味するところを、他の手紙に混ざっていて見えていなかった漣が気づいたのは、彼の表情が途端に拭い去られたからだ。思わず尋ねる。
「ご主人様、まさか身内の方が」
「ああ、そっちじゃないよ。……軍事学校時代の恩師の訃報だよ。あの人に教わった軍人には皆送られてるみたい。そうか、年だったからなあ……漣、最低、葬式には出席したいからちょっとこの日付までの予定を調整しといてくれるかな、敷波と一緒に」
「わかりました」
　珍しくおちゃらける事もなく、メモを書き付ける。そして頭を下げると、表情を消したままの司令の前から辞した。彼はそれをまともに見送る事なく、手紙を封筒にしまう。彼が思い出しているのは、学生時代。戦争史学の教授に、鳴り響く鐘の中、いわれた言葉だ。
『君は、同胞殺しの罪も背負う事になる』
「幸せだったから、家族が一緒だったから、あの時のコーヒー牛乳は美味しかった。だから、君達にはいえないんだよ」
　ひとりごちる、その言葉は雪風に告げられなかった言葉だ。執務室

に行きがけに足柄達に話をつけたところ快く銭湯へ連れて行く事を快く了承してくれた。その時、無邪気に笑う彼女を、同じようにどこかかなしそうに見ていた足柄達は、恐らく自分たちの運命を知っていた。

（「普通の人間」にとって幸せがどんなものかって、俺は教えられないんだ。だって俺は結局、君達を戦場に送り出す。同胞の君達を。今のところ、まだ誰も殺していないけれど、もし深海棲艦の正体が「そう」なら、俺はとっくに）

「……カフェオレかミルクティーか、区別がつかないな」

手紙を置き、カップを持つ。その水色は茶色かった。

一般人が本来の艦船を運用して深海棲艦に戦う術は、絶えてしまった。艦娘という強力な戦力がいるから無用の長物として埃を被っている。だから、今日も艦娘達に出撃をさせる。「相手より大きな兵力で戦いに臨む」、それが戦術の基本だから。それを彼は頭でわかっていても、一般人と「艦」とが綯い交ぜになった気持ちが心をきしませた。

Ｅｎｄ．

どうか私を信じないで

大浴場前。久方ぶりに顔を合わせた司令官を見て、天龍は鞄を片手に彼の頬を軽く抓った。
「どうしたんだよ司令、元気ねーぞ」
「え、ひょーかな。あといひゃいてんりゅー」
上背だけは天龍を上回る、司令官の声にも張りがない。幼顔に反して低い声だが、それにしたっていつもより沈んで聞こえた。上官の抗議の声に構わず丸い頬を摘んでいた天龍は、彼が落ち込んでいる理由を推測する。
士官学校時代の恩師の葬儀に出席する為に、ここ暫く鎮守府に不在だった。天龍が如月筆頭の駆逐艦を連れて遠征に赴く前に、この日の夜遅くに帰投するとは訊いていたものの、こんなに落ち込む程の相手だったのか。天龍はそう思いながら、既にシャツとジャージというラフな姿になっている司令官の手にする、洗面器の中に気付く。そしてその中のラインナップに、思わず手を放して声を上げた。
「……元気ねーのも気になるが、何だよこの女子力満載ラインナップ。トリートメントにコンディショナーにヘアパック、化粧水に乳液って」
「えーだって俺、髪が傷みやすくて」
「如月みたいな事いうな！　気を遣いすぎだろこれ!!」
「今時の男子はお手入れぐらいするよ～」
「私がどうしたのーってあら、司令官さん帰ってたのね」
会話に参入してきたのは、角を曲がってきた当の如月だ。天龍に問い詰められている司令官の姿を認めると、人なつっこく駆け寄ってくる。そして彼の手の中にある洗面器、その中にあるケアセットを見て、彼女は自分のビニルバックを示しながら微笑む。
「あら、私と同じシリーズのヘアパック使ってらっしゃるんですね司令官さん」
「ああ、ここのいいよねー。君もよく髪が傷むとかいってるけど、ここのは効くよねー。ただ5分待つのって結構辛いよね」

「わかります～」
「おいお前ら、俺を挟んで理解不能な会話をするな……！　おい行くぞ如月」
「あらーそれじゃ司令官、また明日から宜しくお願いしますねー」
「ああ、ゆっくり入ってきなよ」
　肌や髪の手入れなど、妹分の龍田にされるがままで天龍には今ひとつ理解が及ばないものだ。ましてや自分達艦娘は戦闘が本分で、彼女もそれを心から楽しんでいる。ゆえに、「自分磨き」などというものに彼女は苦手意識すら持っていた。だから如月と上官が交わしはじめた会話を打ち切らせ、如月を傍らに担いだ彼女は女子風呂に入っていった。見送る司令官の様子のおかしさを、一瞬だけ忘れてしまって。
「……風呂入ろ」
　ひとりごちる、彼の言葉を聞く者はいない。元より、最高司令官という立場ゆえに、部下を風呂場でまで萎縮させないように最後に入るように努めている彼だ。彼は「女子力満載」のケアセットの詰まった洗面器を片手に、青い暖簾を潜った。
　本国で参列した葬儀。そこで覚えた感情を洗い流し、また彼は司令官へと戻らなければならなかった。洗い流す為にも浮き上がらせた記憶はまだ新しい。曇天の秋の下、士官学校時代の先輩と再会した時、交わした会話を。先程、彼女達と交わした他愛ない会話、それを大切に思っていたから。
「艦娘が轟沈しても、葬儀をまともに行う事の方が珍しかったそうですね」
　弔砲が鳴る。式の終わりを告げる音だ。曇天の下、集っていた礼装の男達が徐々に散開しようとしていた。その礼装は、海軍のものがほとんど。陸軍や空軍、それに高価そうな喪服を着ている者まで見られたのは、今回の葬儀の主の嘗ての影響力を若手にも知らしめている。嘗て、深海棲艦を文字通りの艦船のみ、戦術で対抗していた先人の、死。それは、海軍の中で、深海棲艦への戦法への転換点を、誰にも予

感させていた。大方は、悪い方へ――そこに立っていた2人の軍人も、その中の1部だった。比較的見た目が若く、本来ならまだ軍事学校に通っていても可笑しくない年頃だ。実際、若いのだ。しかしその袖章が、彼が佐官以上の地位にある事を示しており、通り過ぎる人々の目を時々瞠らせていた。そんな「少年将校」といった方が適切の幼顔は、今は正帽を目深に被っていて半分程隠れている。冷える晩秋の空気。装飾用の短剣の束を手袋越しに握る、少年の手に力が籠もっていた。それを見て、相対する青年は顔を顰めながらも相槌を打つ。

「そうらしいな。今でいったら、彼女達のつけている装備のようなものだ。壊れたら、捨てる。それだけだ。今は、だいぶ、よくなった方のようだがな」

「馬鹿馬鹿しい」

吐き捨てる声は、幼い顔に反して低い。一瞬、それが自身へ向けられた言葉かと思ったが、次いで出された少年の言葉に、それが艦娘達への待遇についての批判だと知った。ともすれば彼女達に似て見える士官学校の後輩は、忌々しげにその顔を渋くしていた。その顔が、時に彼も目撃する事のあった深海棲艦のそれに似ていた。少年はいう。

「別に、この葬式みたいに派手にしろ、とか、そういうんじゃなくて。彼女達が今1番、戦線で命を張ってる。なのに、いまだに待遇は家畜のそれだ。……教授だっていってたじゃないですか。自分達司令官は1番安全なところにいる。それなのに軍の中で尊ばれるのは、危険に身をさらす彼女達じゃない、自分達だ。それがおかしいって、何で誰もいわないんだ」

後半は悔しさの滲むものだった。そこに、青年は彼の青さや若さを知る。彼もまだ20代で、地位も年齢に反して高い方だ。それでも少年のような情熱は既に失われていると自覚していた。青年は窘めるように、後輩に向けて頭を振る。

「僕達の通弊は確かにそこにある。だが、彼女達をあまりに奉っても、どちらにしろ今は彼女達に頼るしかない。下手をすると彼女達の轟沈を賛美して、更にそれを加速させるかも知れない。『お国の為に轟

沈する』事を強いる馬鹿どもの為にな。……正味な話、ある程度立場が低い方が守りやすい。■■、もっと戦況が落ち着いてから彼女達の立場向上に努めた方がいい。君のいいたい事はわかるが」
「いつ、落ち着きますか」
「……わかってるさ。寧ろ、悪化してきている。だからこその、昨今の急激な『鎮守府』の増設や、君程ではなくても若い軍人が司令官へ昇進される事例の多さだ」
　突きつけられる声。それは彼の帯びるサーベルよりも硬く鋭く、青年ののど元に突きつけられる。しかしそれは、彼にとって慣れきって、そしてわかりきった冷たい事実だ。喉をひやりとさせる感覚に、青年はずれてもいない正帽の鍔を下ろした。大尉を示す袖章と少年のそれとを見比べていく人物がいた。視線を構わず、見詰めてくる円らな目に、青年は溜息を吐く。
「教授もいっていたな。『軍がやたらと昇進を増やしたり英雄を作ったり功績を過度に褒め称えて喧伝しはじめたら、やばい』と」
「今将にそのやばい状況じゃないですか」
「困った事にな。……今回の教授の死、嘗て一般人のみ、艦船のみの戦術で深海棲艦を破っていた軍人の死を、軍はどういう風な宣伝材料にするかわかったものじゃない」
　鍔に手をかけたまま、青年は顔を向ける。少年も釣られてそちらを見た。葬儀会場となった教授の自宅。そこでは軍の広報部が、教授の夫人とその養子の長男に取材をしているようだった。煙たげに広報部を追い払う彼らを遠目に眺めながら、少年はいう。年にも顔にも見合わぬ、深刻さを刻んだ表情で。
「ただ、嘗ての英雄の死を伝えるだけならともかく、教授が死んだ事で『艦船のみの戦術で戦う時代は終わった。艦娘のみの戦法に一本化すべきだ』っていう風に軍が方針を固めなければいいんですが」
「それどころか艦娘にも司令官を任せるようになったりしてな。僕達司令官も第一線にいる、死なない可能性がゼロではないしな」
「笑えませんよ」
「冗談をいったつもりはないからな」

「……冗談じゃないですよ」
眉を顰める、後輩を見上げて青年は思い出す。士官学校生だった時点で、既にこの後輩は目的を見定めていた。それでも、遠方の僻地に飛ばされるまでは、こんな顔をしなかったと、彼は思う。実際に前線で彼女達と接したからだろう。まだ犠牲を出していないとは訊いているものの、その為に、糸が極限まで張り詰められているようだった。それに仄かな危機感を覚える。しかし、可愛い後輩のそれを解消してやるには、彼らは物理的に離れすぎていた。そしてこれからも近づく事はないだろう。将校同士はそんなものだ。だから今、出来るだけその糸を緩めてやる為に、密かに尽力する。彼の糸が切れれば、彼のみならず、彼の部下――艦娘達を巻き添えにする可能性がある。彼ら2人にとってそれはどちらも度し難い結果だった。だから青年は、少年を窘める。
「時代だ。わかっているだろう。君が最終的に目指している『艦船のみの戦術の復活』による艦娘達の解放は、本当に難しい。それこそ、ずいぶん前にはじまったこの戦争が、君ひとりの手で片付けられると考えるのは寧ろ傲慢だ。それこそ、教授のいっていた『ベストよりベター』だ。君はその段階を少しずつ踏み、次代に受け継がせる事の方が重要だ」
「わかっています、そんなの」
「そうだろうな。そもそも、果たして戦争が終わったあとの艦娘達が、今度は一般人から爪弾きにされる可能性も、君はわかっているだろうからな」
「……わかっています。結局、一般人からしてみれば、艦娘の強さもまた化け物、ですから」
唇を噛み締め、短剣を握りしめる手によりいっそう力がこもる。後輩の悔しさが伝わってきた。それを認めるのが悔しい、恨めしい、辛い。負の感情と言い切るには、あまりにかなしいそれ。
「人は理解出来ないものを恐れる。いわば深海棲艦は、一般人と艦娘にとっての共通の恐怖で、そして敵だ。……彼女達を駆逐してしまう前に一般人に艦娘を本当に受け入れて貰った方が、切り離せないぐら

い浸透していた方が、いい。俺にとってそれが理想なんですけどね」
「理想は理想だ。戦場も理想通りにはいかないだろう、いつだって」
自嘲する後輩に、先輩は肩を竦めた。少年のそれに比べれば厚い肩には、既に幾多もの命が重なっていた。生きている者と、死んでいる者と。それを少年は知っていた。青年は続ける。
「結局、今のところ艦娘の力を1番受け入れられるのは軍しかない。だから艦娘の存在を軍でアピールして、軍の中で彼女達を切り離せないものにする。それが結局、彼女達の為になるんじゃないか」
「たとえ、軍で生きたくなくてもですか」
「現実、他にないだろう」
「だから俺は、せめて選択肢を広げたいんです。平和になった時、彼女達の居場所を、出来るだけ速やかに広げる為にも、艦船のみでの戦術を復活させたい」
彼は笑った。苦しそうな笑みだった。
「何も、片方だけじゃなくてもいいんですよ。選択肢は多い方が、幅が広がる。軍は、だから艦船のみでの戦術を衰退させるべきじゃなかった。それが結局、自分達の為にもなったのに」
それに対する答えは、青年は持たなかった。

ヘアパックを塗りおえる。目を瞑り、３００秒のカウントダウンを脳の片隅ではじめた。そして彼は、いつもは下ろしている前髪を掻き上げる。その様を見る者は、この広い浴場で、今は誰もいなかった。
（先輩は、そういえばどこに行くんだったっけ）
結局、問答のあと直ぐに互いの迎えが来て、挨拶もそこそこに別れた。その先輩の口から、彼もまた昨今の流れに巻き込まれた事を知った。つい先日、ある深海棲艦の大襲撃の中、武勲を上げて中尉から大尉に昇進したばかりだった。それが「これ以上なく有能な指揮官」として一時期、軍に持て囃された挙げ句、新設の鎮守府に赴かされる事となったという。青年もまた、後輩と同じように上層部から「有能だが扱いにくい」人材と見なされていた事を、後輩の彼は思い出したのだった。事実上の2階級特進に近いので、後輩の彼としては不吉で仕

方がない。尤も、簡単に死ぬような人間でもないし、寧ろこれをチャンスと捉えるだろう。「類は友を呼ぶ」と彼らが呼ばれたゆえんだった。扉が開く音がする。こんな時間に誰だろう、そう思いながら彼は２５０秒のカウントを切った。

（そう、これはチャンスだ。俺が、真実を知って、そして、艦娘の立場向上をさせる。……その為にも、絶対死なせるものか。誰だって。結果として彼女達を利用するという事になるけど、それでも）

『――』

『――』

「……賑やかだな」

思考の螺旋に陥りかけた、彼の意識を取り戻したのは、浴場の奥。露天風呂へと続くガラス戸の向こう。正確には更に竹の柵を隔てた女子風呂からだった。先程は天龍と如月しかいなかったが、彼女達だけで遠征に行かせたという報告はなかった。他の艦娘達も追いついてきたのだろうか。そう思いながら、先程の浴場の出入り口。抓られた頬の痛みを思い出す。

『どうしたんだよ司令、元気ねーぞ』

「……君に心配される資格は、俺にはないよ」

呟く声は、口の中。先程入ってきたらしい者にも聞こえないぐらいの小ささだった。そして、それが彼にとっての真実である事を彼自身が知っていた。

結局、自分はここで接する彼女達を利用しているのだ。絶対に死なせるつもりはない。肉体的に彼女達に致命的な損害を与えはしない。

けれど、心はどうか。彼女達に信用される司令官でありたいとは願っている。けれども。

けれども、自分が信頼に能うかは、自信がなかった。彼女達全体の事は考えている。けれど、個人では、どうだろう。

（いっそ、信じてくれなければいい。そうやっていてくれれば、いっそ）

『ある程度立場が低い方が守りやすい』

「……やだなあ、もう」

「何がです。あ、司令官さん、このヘアパックお借りしていいですか」
「あーうんいいよ」
深刻な自己嫌悪に陥りかけていた司令官は、頷きかけた。頷きかけ、目を閉じたままヘアパックのボトルを手に取る。そして、声のした方へと渡そうとした。
思わず目をかっぴらいたのは、いうまでもない。そこに、緩やかに波打った長い髪を括った、紫色の目の少女がいたからだ。胸までバスタオルを巻き付けた彼女は、何でもない様子で彼からヘアパックのボトルを受け取る。思わず凝視する彼に、彼女はボトル片手に頬に手を添えた。
「あっすいません、私のヘアパック切れちゃってて。間宮さんはもう店じまいしちゃってるし。何なら貸してくれたお礼に、今、頭、すすいでさしあげましょうか。頭だけとはいわずにお背中も」
その時、天龍は露天風呂に入っていた。熱い湯、夜気の冷たさが心地よい。先程の司令官の様子はまだ頭に引っかかっていたが、あとから追いついてきた龍田の言葉で、再びそれは彼方に押しやられる。手拭いを片手にやって来た彼女は、きょとりと辺りを見渡した。
「あれ、天龍ちゃん。如月ちゃんは～」
「え？　そっちにいねーの」
「こっちに如月ちゃんの服とか洗面道具はあったんだけどね～」
いいながら、龍田は湯船から湯を掬う。そして体に引っかけていく妹分の姿を尻目に、天龍も辺りを見渡した。そして、ふと、ある事を思い出す。
「あ」
「どうしたの、天龍ちゃん」
「最近、あいつがいなかったから忘れてたけど、如月の奴、よく司令官が単独で風呂に入ってると突入しにいってたよな」
「……あっ」
龍田が声を上げた。刹那、水飛沫。
岩風呂の真ん中。そこに放り込まれた何かにより起きた飛沫が、天龍の頭をてっぺんからびしょ濡れにした。まだ湯船に入っておらず、

難を逃れた龍田でさえも目を瞬く。
「……もー、司令官さんってば過激なんだから！」
「如月⁉　おまっ何して」
　一瞬ののち、湯船からすぐさま飛び出てきたのは如月だった。天龍よりも頭からびしょ濡れになっている上にタオルを巻き付けたままだ。そのマナー違反を咎める事と、彼女が柵の向こう――男子風呂から放られたという事実に突っ込む事、どちらを優先すべきか迷っている時に、柵の向こうから再び何かが放られた。それを如才なく受け取ったのは龍田だ。呆然とする姉の前で、龍田は受け取ったそれをしげしげと眺める。
「……ヘアパック？　これ、如月ちゃんの使ってる奴じゃ」
「如月」
　怒鳴り声ではない。だが、確実に染み入ってくる、それは怒りの声だった。それが司令官が滅多に発さない類の声だと気付いて、天龍は思わず隻眼を瞬く。まだ、目の前の事態とその声の事実を結びつけられずにいた。
　柵の向こうで、司令官は淡々と、しかし確実に怒りながらいった。
「如月。ヘアパックならいくらでも貸すし、申請を通してくれればシャンプーセットを自販機にして置いてやる。だから、今後一切、男子風呂に突入してくるなよ」
「司令官さんったらこわーい☆」
「如月」
「はーいわかりましたー」
　如月の不真面目な返事でも、満足したらしい。やがて怒気は引っ込んだ。思わず事の成り行きを眺めていた天龍型姉妹は、「バスタオルが濡れちゃった」と岩風呂から上がってくる駆逐艦娘を見る。白いタオルを外してその場で水気を絞る彼女は、湯船に放られた衝撃などモノともしていないようだった。そういえばそろそろ改装が出来る程度のレベルには上がっていたような。龍田の手からヘアパックを受け取った如月が悪びれもせずに洗い場へと向かうのを見送りながら、天龍は呟く。

「……あんなに怒った司令官の声、はじめて訊いた」
「私もー。何か新鮮だよね。如月ちゃんへの対応は随分過激だったけど」
「怒るんだなーあの司令官も」
いいながら、彼女は自身の胸中に見出した感情に首を傾げた。それは日頃、微笑むばかりで、必要以上の労苦を決して艦娘に強いない彼が見せた、人間らしい一面のように思えたのだ。そしてはじめて、その時天龍は彼を信頼する気が起きたのかも知れない。のちに、彼女はそう述懐する事になる。

その後、間宮の発注により、浴場の前にシャンプーやリンスのみならずヘアパックやトリートメント、コンディショナーなども取り扱った自動販売機が置かれ、主に艦娘に人気を博す事になる。
Ｅｎｄ．

沈む

するする、解けていく。艤装が、解けていく。金色で、青い穏やかな光の中、ゆっくり、ゆっくり、沈んでいく。深く暗い、水の底へと。海の底へと。

（夏かな）

気泡が、口から滑っていく。皮膚を撫でる水流の冷たさは、心地よかった。あの光は、恐らく、月。満ち足りた月だ。夜を迎えても水温がさして冷たくないという事は、少なくとも冬ではない。遠退いていく光を眺めながら、重力に身を任せた。何の抵抗もなく、体は落ちていく。肢体に纏った装備が外れていき、軽くなった筈だ。それでも体は躊躇いもなく沈んでいく。それが、心地よかった。口の端を釣り上げる。否、今は釣り下げるといった方が的確だ。頭を下にして沈んでいるのだから。泡が、浮いていった。解けていく艤装と共に。見送りながら、笑った。口の中に流れ込む味が塩辛い。果たしてそれが水なのか、別の何かなのかは、わからなかった。

全てが奪われた。それでも尚、心は穏やかだ。自身を縛っていた責務をも、奪って貰えたから。

背中の砲身が砕け、指輪のように小さくなる。それがあの満月と重なった。

青に、沈む。

「ちょっと司令、起きなさい。もう朝食よ」

「えぶほっ」

顔面を叩かれる。突拍子もない声を上げたのは、その力が強かったからだ。

布団を剥がされ、洗面所に追いやられる。数分ののち、出てきた司令官は既に寝間着から軍服へと着替えていた。尤も、ジャケットは片手に引っ提げたまま、軍帽もずれていたが。顔を洗ってもまだ腫れぼったい目元を擦りながら、司令官は布団をたたみ終えたところの足柄に文句を垂れる。

「足柄ー、顔を叩くにしてももうちょい優しくしてよ」
「とっとと起きないからでしょ、声はかけたんだからね。寝癖が直ってないわよ、だらしない」
「マジか。……足柄、なんかご機嫌斜めだね。言い方が飛鷹みたいだよ」
ジャケットと軍帽を机に放ると、司令官は髪を整え直すべく洗面所へと出戻りする。鏡を覗き込むと、前から見るとわからなかったが、首を横に向けると確かに後頭部で髪が一房、反っくり返っていた。軍帽を被っても誤魔化しにくい位置の為、手近にあった整髪剤と櫛を手に取る。普段は寝癖のつきにくい上に、こだわりなく前髪も横髪も垂らしたままの彼だ。だが稀にこうして寝癖がついた時と、式典などの改まった場の為に、整髪料は常に洗面台に鎮座していた。最近それを使ったのは、士官学校時代の恩師の葬儀の時だ。蓋を開くと、無香料と謳われているものの、鼻につく匂いが僅かに上る。それに寝起きゆえに顰められたままの眉間に更に皺を刻みながら、心なしか足音も荒い足柄に不機嫌の理由を問う。天龍や川内のような戦闘狂のきらいはあるが、陽気さは彼女達と同等かそれ以上だ。しかし、今朝の彼女はいつもと違う。そうして不機嫌だとまるで軽空母の彼女のようだ。少しだけ整髪料を手にとって撫で付ける司令官に、布団をしまい終えたらしい足柄はふと、ぼつが悪そうにしている。鏡越しに見る彼女は、それでもはっきりと「生理中なの」といった。面食らう司令官にお構いなしに、足柄は溜息を吐いた。
「今回はなんか重くって。頭が痛いの」
「……ああ、月経が来るタイプのピルだっけ、今のメインは。でも、頭が痛いって事は体質に合ってないんじゃない」
「そうなの、私はあんまり合わないみたい、色々試してみてるんだけど……ちょっと、何でピルの事を知っているの」
それでも何とか手を動かしはじめた司令官の言葉に、足柄は頭を振る。そしてふと、その仕草を止めて鏡越しの上官を軽く睨んだ。そして問われた言葉に、彼は自身の失言に気付く。
ピルは、前線基地で異性の軍人と接する事も多い艦娘の身の安全を

図る為のものだ。他にも様々な思惑や意図があるのだが、少なくとも艦娘の不用意な妊娠を避けるという点では概ね支持されている上層部の方針だ。ただ、その性質上、一般の軍人にはあまり知られていない。服用しているという事を逆手にとって無体を図る者がいないとも限らないから、艦娘も自然と口を閉ざした。なので、いくら司令官という上の立場とはいえ、士官学校を卒業して間もないような彼が知っているのは、幾分かおかしい事だった。足柄が警戒するのも尤もだ。そして、彼は咄嗟に口を噤んでしまう。

知っているのは、彼が、そのピルを処方させる制度の切欠のひとつだから。

それをいえる筈がなく、彼は、まだ打ち明けられる事実を口にする。無表情のままで。

「……ウチは『ブリーダー』の家だから。養父がそうだったんだ」

「へぇ、そうだったの。でもあんまり余所でその事いわないでよ」

艦娘を「育成」する家の息子だという軍人は、さして珍しいものではない。足柄はやや目を瞠ったが、納得したように頷いたのち、釘を刺す事を忘れなかった。いわれるまでもない、口が滑ってしまったのだ。彼はそう思いつつも大人しく頷く。誤魔化せたのなら御の字だ。櫛を後ろ髪へと通していく。寝癖はそろそろ直りそうだ。有耶無耶にする為の追い打ちをかける。

「鎮痛剤は要るかな。色々たくさん持ってるけど」

「有難いけど、ややこしい副作用が起きそうだから遠慮するわ。というか司令も、鎮痛剤がたくさん必要なぐらい頭痛が起きるってまずくないかしら」

少しだけ笑う、それは苦笑いの部類だった。それでも彼女の機嫌が幾分かでも回復したのならばそれでよかった。彼の提案をやんわりと退け、そして彼を心配する言葉に、櫛を洗面台に戻した司令官は笑って振り返った。

「コーヒーを飲まないと直ぐ頭が痛くなるんだよね」

「立派なカフェイン中毒ね。体を悪くするわよ」

「はははは、お陰で仕事中にコーヒーを飲む平日はいいんだけど、非

番の時はかえって具合が悪いんだよねー飲まないから」
　洗面所をあとにする。そして机からジャケットと軍帽を手に取ると、それらを着ながら執務室を出る扉へと足柄と共に歩く。窓から差し込む、初冬の日差しは、まだ温かい。穏やかな波の音が届いてくる。それを尻目に扉を先立って開く足柄が、ふと思い出したように問うた。
「そういえば司令、変な夢でも見てたの」
「魘されていたかな」
「魘されていたというか、噎せてたというか、溺れてる風だったわね。司令って泳げないの」
「足柄さん。俺は海軍の軍人です」
　足柄の問いに、1度は緩めかけた眉間を再び顰める。以前にも、飛鷹に「剣道が出来るのか」と驚かれた事がある。自身はそれ程までに「それらしく」ないのだろうか、長めの方が寝癖もつきにくいのだがもっと短く刈り込むべきか。ショートボブの髪を摘んで半ば真剣に考え込みかけたが、名を呼ばれたので答える事にした。先程まで見ていた夢の事なら、まだ覚えている。とても鮮明に。
　ひどく、安らいだ夢だった。まるで、母の腹の中のような。
「ちょっと、自分が海に沈んだ夢を見てね」
「やだ、縁起でもない。司令官の貴男が沈むって事はこの鎮守府がどうなってるかわかったものじゃないじゃないの」
「それもそうだねえ。まあ、溺れてた訳じゃないし、悪いイメージじゃないから吉夢だと思うよ。水に関する夢ってそういうもんらしいから。まあでも」
　立ち止まって、出てくるのを待つ足柄も眉を顰めた。それに司令官は笑う。但し、彼も眉根を寄せたままで。短靴を廊下に踏み出した。
　月が満ち、要らないよと沈んだ誰か。
（あれは、誰だったんだろう）
「確かに、縁起でもない。……げほっ」
「風邪？」
「さあ……先行ってて」

廊下に踏み出した途端、冷えた空気が肺腑を刺激した。その為か、噎せ込む。足柄が振り返ったが、彼は咳を止めぬまま、彼女を見送った。病弱な上官を気にしつつも、向こうの角を曲がってきた姉妹達に気付いて駆け寄っていく。どうやら機嫌はだいぶん良くなったようだ、そう思いながらしつこい咳を追い払う。まだ手袋を嵌めていない手を当てて、大きく息を吐き出した。

途端、掌に何かが転がり出る。刹那に口の中に広がるのは、鉄の味だ。咳き込みすぎて喉が炎症を起こしたか。訝りながらも掌を見下ろす。

「……なんだこれ」

鉄の味がする訳だ。文字通りの鉄が、吐き出されたのだから。掌の上に転がる、黒い鉄の破片。指輪のような形をしているが、それにしては縁がいびつだった。まるで、無惨に砕かれたかのように。

Ｅｎｄ．

提督「もしかして豆ぶつけとけばいいと思ってない？」

最早、様式美だ。節分の日、豆撒きで戦場になるのは。

「けど何も、普段戦場に行っている私達の鎮守府でなる事はないんじゃないかしら!!」

「飛鷹、突っ込んでいる暇があったらバリケートの強化を手伝え」

叫ぶ飛鷹、場所は司令官執務室。横では日向が、扉の前に黙々と家具を積み立てていっていた。その腕力はさすが戦艦というべきだろう、中身の詰まった棚を軽々と担いだ。それに飛鷹は密かに感心したものの、直ぐに思い直す。このバリケートを隔てた扉の向こう、そこには日向と同じ戦艦の艦娘が跋扈しているのだ。駆逐艦や巡洋艦などと混じって――後者達が投げても相当な威力だ。だが前者達が投げると、ＳＥは機関銃である。彼女達に突撃された司令室は、現に壁も床も天井も穴ぼこだらけだった。後片付けを想うと頭が痛い。この日の豆撒きに参加するつもりのなかった日向と飛鷹は、「なんだよー入れれねーのかよー」「司令に合法的に豆をぶつけられる日と聞いて！」などという司令室の前を通り過ぎる艦娘達の声を耳にしていた。自然、溜息が漏れる。そして飛鷹は窓を見た。開いたままの大きな窓ガラス、温暖な地域といえど寒風が吹き込んでいた。バリケートを作るのに必死で忘れていたので慌てて駆け寄る。そこには鈎縄が下がっていた。風に揺れるそれを呆れながら巻き取って回収する。それなりに重みがある。飛鷹は再び息を漏らした。声はトーンダウンしていた。

「寧ろ日向は何でそんなに落ち着いていられる訳。司令もさっき、一緒に籠城しようとしたのに『良い事思いついた』なんていって、鈎縄で窓から降りていったし。ここ3階よ」

「今の海軍の士官学校はリペリング降下の訓練もやっているんだな。鈎縄とは古風だが」

「そういう問題じゃなくて」

「司令の頑丈さなら、比叡や長門が投げる豆でも平気だろう」
　言い募る飛鷹。彼女を宥めるように日向が相槌を打った時だ。向こうから長門の声がした刹那、扉の上方、バリケートの甘い部分を豆粒が貫通した。
　……フローリングに転がる、炒られた豆。それを凝視した。日向がいう。精悍な横顔が引きつっていた。
「……多分」
「し、司令ー！　今すぐ戻ってきなさーい!!」
　窓に駆け寄った飛鷹が叫ぶ。しかし返ってくるのは、風の音と、豆撒きならぬ豆撃ちの音だ。見えるのは冬の海と、港だ。向こうには工廠が見える。今日も通常運転で、槌の音が響いていた。それでも尚、上官の名を呼ぼうとする飛鷹に、改めてバリケートを固め直す日向は肩を竦める。飛鷹の日頃の司令官への態度を彼女も知っていたからだ。苦笑して日向はいう。半ばからかい混じりで。
「というか飛鷹。君は普段あれだけつんけんしている割には、司令の事を心配しているんだな」
　しかし返ってきたのは、存外に素直な即答だ。諦めた様子で窓を閉めた彼女は、それでも尚「当たり前でしょう」と怒鳴る。とても真剣な顔だ。
「心配せざるを得ないでしょうが。風吹けば倒れるぐらいの病弱男なのよ!?」
「病弱なのは事実だが、あいつはあれでも軍人だぞ……病弱イコールか弱い訳ではないし。ソフトは弱いがハードとメンタルは頑丈だぞあいつは。実際か弱かったらリペリング降下なんてしないし、今年の書き初め大会の時のような悪のりもする。この無法地帯を生み出した豆撒きだってあいつが提案した事だぞ。それにそもそも軍人になんて」
「書き初め大会の時の司令の悪のりに付き合ってたのはあんたじゃなかったっけ。あー司令その辺で穴空いて倒れてるんじゃ」
「人の話を最後まで聞け」
　回収した鈎縄を纏めながらも、飛鷹は落ち着かなそうに室内を歩き

回る。まるで檻の中の獣だ、とは彼女の幼顔の外見には相応しくない感想が生まれる。日向は嘆息した。なぜか1番艦、特に妹持ちの艦娘はここの司令官を過剰に心配し、過保護に走る気がある。確かに外見も幼いし実際に若い。普段の性格はどちらかといえば穏和だ。ぼんやりしてすら見える上にマイペースだ。そういったところが、しっかり者で人を引っ張っていくタイプの多い1番艦には、鈍く、保護を必要とする子供に見えてしまうのだろう。尤も、末妹の立ち位置にある艦娘は理解している。頼りなげなあの司令官も、放っておけばちゃんと自分で身の回りの事を済ませてしまう事を。何だかんだで〆切には間に合わせるし、何だかんだで最終的には帳尻を合わせる。ペース配分が非常にゆったりとしているのだ。基本的に姉に世話を焼かれる立場である妹達は、自分達の司令官が強かである事をわかっていた。妹のような性格の姉を持つ、日向でさえそうだ。

（弟持ちの長男の筈なんだがな、司令は。弟属性なんだろうか。もしくは伊勢と同じタイプか。……顔も知らない弟さんが気の毒になってきた）

「ちょ、ひゅ、日向」

考え事に没入しかけた日向を、飛鷹の声が引き戻す。日向はバリケートを背にしながら彼女を見た。

「何だ、心配はもういいのか」

「それより私達の身の危険を心配した方が良いみたい」

「……まずいな」

相対する彼女の顔色が悪い。その大きな目の先を見て、事情を悟った。

穴が大きくなっていた。

日向は飛鷹に向き直った。その顔は深刻だ。

「飛鷹。君、リペリング降下は」

「出来るわけないでしょ」

「だよな。仕方ない、私が抱えて脱出しよう」

「ちょっ」

そういって日向は飛鷹を抱える。左腕に座らせる形で。軽々と担

いだまま窓に歩み寄る日向は、机に置いていた鈎縄を手に取る。窓を開きながら、暴れる飛鷹を宥めた。
「落ち着け飛鷹。じっとしてくれていないと放り出してしまう」
「いやいやいや、何で抱えるの!? というか隠れてればいいんじゃ」
「私は戦艦だからそれでいいがな、飛鷹。君は軽空母だ。長門型の投げる豆に痛恨の一撃を食らわない自信はあるか」
「……」
「ないなら大人しくしててくれ。大丈夫だ、書き初め大会の時も司令を抱えてたんだ。遙かに軽いお前なら平気だ。だからしっかり捕まっていろ」
「男と比較されても嬉しくな……あれ司令じゃない」
それでも素直に日向の首にかじりつきかけた、飛鷹はふと気付いた。背後からは豆の放つ音とも思えぬ音と、扉が軋む音。窓の下では、工廠の方から歩いてきた2人の白い人影。伊勢と、司令官だ。日向が眉を顰める。
「伊勢の奴、いないと思えば……」
「……何を運んでるのかしら、司令はスピーカー片手だし」
飛鷹の言葉に日向は目をこらした。確かに、司令官と伊勢は2人がかりで何かを持っている――木箱のようだ。2人仲良く片端ずつ持って運んでいるのが、微笑ましいが悪寒を禁じ得ない。何せ伊勢は、隼鷹や北上と並び司令官と悪巧みをする仲だ。彼らと工廠という組み合わせは、燐とナフサの化合物に火種をぶち込むようなものである。焼夷弾レベルの被害だ。しかし思わず事態の推移を見守ってしまう。そうこうしているうちに2人は建物の前に木箱を置いた。そして司令官は頷くと、ホーンスピーカーの電源を入れる。そして、それをこちらに向けた。
『撃ち方やめ』
たったひと言だ。それだけで、背後からの音はやんだ。
それに思わず感心しかけたのもつかの間だった。日向の左腕から降りる飛鷹。彼女達の前で、司令官はいった。スピーカーで声を拡大しながら。伊勢が木箱の蓋を開いた。

『鎮守府の皆、盛り上がっているようで何よりだ。豆撒きは大事だからな。けどお前ら。福を寄せて鬼を祓うのに、手で撒くだけなんて心許ないと思わないか』
「えっ」
『どうせやるならもっと派手にだ。そういう訳で、今、急遽、伊勢と一緒に作ってきた。豆撒きの大豆を装填できる機銃だ。お前らー一旦鎮守府裏手まで集まれー持っていけー早い者勝ちだぞー』
　木箱の中は、黒光りする機銃が詰まっていた。
　沸き立つ鎮守府。飛鷹は怒鳴った。
「日向！　今すぐ私を馬鹿司令のところまで下ろして！」
「艦載機を飛ばしたらどうだ」
「直接殴らないと気が済まないの!!」
「了解した。掴まれ」
　既に扉の外には気配がない。しかし1分1秒と惜しかった。飛びついて首にかじりつく飛鷹を抱えた日向は、素早く窓に鈎縄を引っ掛け、片手で降下した。
　最短距離で司令官の下へ辿り着くと、飛鷹は小さく礼を言ってから、司令官の方へと走っていった。それは見事なドロップキックだったと、蹴られた司令官が冬の海へと落下していくのを目撃した伊勢型は語る。水しぶきが上がった。
　これがのち、「●●鎮守府司令官節分水没事件」といわれる事件の全容である。この事件に先立ち、この鎮守府では、まるで深海棲艦の襲撃にでも遭ったような弾痕が残り、改修を余儀なくされたという。
（手でぶつけるなんて生ぬるい!!　Ｂｙ　司令）
「……1番体の心配をしていたんだがな。その手で海に突き落とすとは」
「飛鷹も結構大胆ねー」
「それより伊勢。何を機銃を作るのを協力しているんだ」
「私まだ戦艦だしー。それに書き初め大会の時に、日向と司令が人間書道やってたじゃない。司令が筆役で、日向が抱えて書き初めしてさ。司令も頭を真っ黒にしてまで。私もこういう全力投球の悪い事

をしたくってー」
「被害は甚大だがな。飛鷹、そろそろ司令がチアノーゼ起こしそうだから海から引き上げてやれ」
Ｅｎｄ．

少女

第６駆逐隊の少女達が、執務室から飛び出していく。それを尻目に、加賀は入れ違いにそこへ入った。その手には書類が握られている。

「司令、次の演習についての書類が」

「ああ、今これを見たらね」

部屋の主は、顔も上げずに応えた。それに僅かに眉を顰めた加賀は、彼の手に握られているそれを見て更に渋面になる。後ろ手に扉を閉めながら彼女は溜息を吐いた。

「……司令。お菓子を食べながら書類仕事をしないでください」

「だってこうでもしないと食べきれないし」

目は書類に落としたまま。司令官の右手には万年筆。左手には囓りかけの菓子が握られていた。それは桜色をしていた。そんな彼の向かう机の傍らには、段ボール箱。そこには艦娘達が差し入れたのだろう、様々な包装のプレゼント達が積まれていた。それを見て、加賀は再び息を吐く。――ここは戦場なのだ。浮かれすぎではないだろうか。

加賀とてわからない訳ではない。今日はバレンタインデー。本国ではマスコミュニケーションが挙って囃し立てる日だ。他の艦娘と同様、世俗から半ば隔離されて育った彼女も、だからこそ、そういった行事に憧れがなくもなかった。ただ、彼女のアイデンティティは、飽くまで兵器である事にある。だから、飽くまで上官でしかない司令官に、好意の象徴である菓子を贈るなど、彼女の理解の範囲外だ。だから加賀は、冷めた目で机を見下ろす。彼女の目の先。司令官の左側の手元には、ラッピングの解かれた箱が置いてあった。その中には赤、青、橙色、緑、黒などの様々な色をした菓子が入っている。長方体に近い正方体のそれは、彼が囓ると軽い音を立てた。ラスクの食感に似ているようだった。加賀は淡々という。

「貴男がとてもご飯を食べるのは知っているし、甘いものも好む事は知っているけれど、それでも無理に食べる必要はないと思うわ。今は

まだ寒いし、お菓子は日持ちするもの」
「そうなんだけどね、でも食べ物は出来るだけ早く食べた方がいいじゃない。特に手作りは保存料が入ってないしさ。傷むのもそうだけど、早いうちに食べた方が美味しいでしょ」
「……それも手作りなの。それに、私にはそれは保存食に見えるけど」
「ん、今食べてるこれの事かな」
「そう、それ」
　司令官が手を見せる。いつもは手袋を嵌めているその手には、橙色の菓子が乗っていた。加賀の記憶では、確かそれは洋菓子ではなく和菓子の部類。それも地域限定の品だった。この「加賀」を育てたブリーダーは東北の出身だった。その為、ブリーダーの実家から送られてくるそれに、物心ついた頃から馴染みがあった。加賀はいう。
「それ、干し餅でしょう。そんな色とりどりで、さくさくしているような軽い食感といったら。干し餅は保存食じゃ」
「チョコだよ」
「えっ」
　思わず目を瞠る。今、彼はなんといったか。改めて加賀は見る。
　……色とりどり。赤、青、橙色、緑、黒。白地に斑点模様の色がついた、四角い、軽い食感の菓子。加賀の記憶では、それはどう見ても干し餅だ。こんな模様のチョコレートは、彼女は見た事がない。しかも、今この司令官は、「手作りの菓子」がどうたらといっていなかったか。加賀の脳裏に閃くのは、先程、執務室に入る前に見かけた少女達だ。第６駆逐隊の少女達――彼女達は、そういえば昨日、他の艦娘に混じって厨房にいなかったか。
　しかし加賀は慎重だった。慎重に、最後の可能性に賭けた。
「……そういうデザインのチョコレートですか。食紅とか」
「第６駆逐隊の子達は、湯煎で溶かして固めただけっていってたよ。比叡の指示で」
　指示を仰ぐ相手が間違っている。咄嗟に、加賀の頭に浮かんだのはそんな言葉だった。だがそれは表に出さない。代わりに、司令官を強く見詰める。幼顔をいつもより固くした司令官は、書類のチェックを

しながら、干し餅のような姿をしたチョコレートを頬張り続ける。まるで一心不乱に祈りを捧げる殉教者だ。加賀は思わず呟いた。
「……何も律儀に食べなくても」
「本命だろうと義理だろうと友チョコだろうと、くれたものは有難く食べるよ。こんなに女の子からチョコを貰う日が来るとは思わなかったしね」
「……女の子、ですか」
戯けたように笑う彼の言葉で、加賀は目を僅かに伏せる。ただの湯煎でどんな化学反応を示したのか、不気味な程カラフルに変色したそれをチョコレートと断言する司令官の肝にも感心した。だがそちらよりも、彼女に皮肉な気分にさせたのは、「女の子」という司令官の言い回しだ。段ボール箱に積まれたプレゼントが視界に入る。
俗に艦娘と呼ばれる、艦船血統の女性達。それは男性より女性の方が兵器としての耐久が高いゆえに、後者が兵器となり、水平線で戦う。しかし、それは女性として扱われているからではない。いわば「そういったもの」として扱われており、本来は性別は二の次なのだ。それでも姿形は一般の女性と変わらない。ゆえに時として、事件に巻き込まれる事がある。２０年程前、奇しくもこの鎮守府で起きたという軽巡洋艦への集団暴行事件がその最たる例だ。それらの事実を総合すると、加賀の精神には暗澹たる靄がかかる。
いっそ、同じ人間の姿をしていなければ、期待しないで済むのに。元が同じ人だといわれても、都合良く扱われてきたその事実は、加賀にとって説得力に欠けた。
（この人は、出来るだけ公平たろうとしているようだけど。そうして公平であろうと努めなければ、保障されない立場なのよね。私達は）
そんな思いを持たれていると知ってか知らずか、彼は苦笑して青いチョコレートを食べた。
「まあ、そんな日が、同時に胃腸を丈夫に生んでくれた親に感謝する日になるとは思わなかったけどね。比叡のカレーの時はさすがに死ぬかと思ったけど、今日はそれ程でもないし」
「あの時は司令、インフルエンザに罹っていたでしょう。胃腸の動き

が停滞してたんでしょうね」
「健康は大事だよねー軍人は身体が資本だよ本当。それより加賀、次の演習相手は誰だって」
「●●●●●少佐のところです」
「あーあいつかあ。懐かしいな。そういえばあいつも海軍に入ってたんだっけ」
　書類に記載された士官の名を読み上げると、彼は頷きながら緑色のチョコレートを頬張った。それに加賀は眉間に皺を寄せる。
「司令、貰ったものを全部食べるという貴男の誠意は伝わりました。けれどせめて喋る時ぐらいは食べるのをやめてください」
「うん、そうだね御免。失礼だったね」
「……それに、やっぱり片手に食べながら、というのはどうかと」
　素直に箱にチョコレートを戻す上官に、彼女が悪い訳でもないのに少しだけ胸が痛む。素直すぎる相手というのも面倒なものだ。赤城を相手にしている時のような感慨を抱きつつ進言する。司令官は困ったように笑った。
「書類は汚れないように気をつけてるよ。食べかすを溢しそうなクッキーはあとで食べるつもりだし」
「それ自体がクッキーのようになっていますが……手を汚すでしょう。……」
　不意に。加賀の頭に差したのは、魔。口を閉ざした彼女は、書類を机に置くと、目を瞬く司令官の机の前を回り込んだ。そして、チョコレートだという、食べかけの緑色の菓子を摘んだ。
　司令官は書類仕事だ。手を止めさせるぐらいなら、こうすればいいではないか。加賀は、こちらに顔を向けた司令に、菓子を差し出した。無表情のまま、口を開けて、いう。
「はい、あーん」
「あーん」
　司令官は素直な男だった。促されるがままに、それを口にした。
　……執務室に咀嚼音。加賀の脳は一時停止していた。再生されたのは、彼が彼女を見上げながら、小首を傾げた時だ。

「加賀。食べさせてくれるのは楽でいいんだけど、君も仕事があるでしょ」
「……それもそうね」
加賀の手が引っ込む。赤城なら、彼女を見て直ぐにわかっただろう。加賀の顔が硬直している事に。しかしまだ付き合いの浅い彼にはわからない。覚えた違和感に内心で疑問を持っただけだった。それでも彼は気のせいだと判断する。その手は再び書類整理を再開していた。
「気遣いは嬉しいけど、そんなに心配ならあとで食べる事にするから」
「そうね。そうしてくれると嬉しいわ。……ところで、さっきまで鳳翔さんがいたと思ったんだけど」
「ああ、鳳翔なら今は俺にくれるっていってた生チョコを作ってるよ。みんなの分もあるって。酒入りのとそうじゃないの作るってさ。生チョコっていいよね、美味しい上に作るのも簡単だし」
「……美味しいのには同意するけど、作った事があるの」
「士官学校時代は男だらけだったからねえ」
「……よくわからないけど、わかったわ。それじゃ、あとで演習に行かせる面子をこちらに向かわせるから。指示をお願いね」
「ほいほーい」
加賀が見ると、彼女が提出した書類には、いつの間にか演習に向かわせる面子の編成・装備・陣形の指示が記してあった。仕事の早さに舌を巻きながら、加賀は見送る司令官の前で執務室を辞す。
執務室の外、廊下は寒い。入る前はその温度差に気付かなかった。執務室は病弱な司令官の為に、常に快適な温度と湿度設定にされている。ゆえに、その温度差は中々に堪えた。彼女の前に執務室を訪ねた筈の少女達は、それをものともしていなかったようだけれども。息が白い。比較的温暖な気候に属するこの地域でも、寒さが沁みてくる。書類を持っていない手に息を吐きかけた。右手だ。それを眺めながら、加賀は表情のないままに思う。
それ程年を重ねているつもりもない。だが、恋に恋する年でもない。駆逐艦の少女達程に実年齢も幼い訳ではない。だから前線を退

けば、兵器を生み出す機械となってしまう艦娘の現実も知りつつある。異性に対して期待も出来ない。夢を見る事は、もう出来ない。
「優しいお兄さん」を偶像とし、甘ったるい恋愛ごっこもできやしない。それをなんなんと受け入れる彼の態度も、加賀には甘ったるくて仕方がない。歯痒かった。
いまだ青い部分を残す、自分の制御できない部分が、１番甘くて仕方なかった。
「夢見る少女じゃあるまいし」
吐息混じりの声は白い。向こうから駆けてくる賑やかな足音に顔を上げるまで、彼女の表情はそれでも幼いままだった。
期待しないよう、心身共に傷付かないように、気付かないように。情緒を育てようとしない、幼い少女のままだった。

「Ｈｅｙ、カガ！　ホーショーに基礎を教えて貰って紅茶チョコレートを作ったんデース！　司令に食べさせる前に味見してくれませんカー?!」
「……貴女の料理の腕前だし、これなら大丈夫だと思うけど。喜ぶわよ、司令。ただ、紅茶チョコに紅茶はどうかと」
「有り難う御座いマース!!」
「……聴いてないわね」
Ｅｎｄ．

幸せを知っている

子どもだった頃もあった。けれど、まだ、大人でもない。それでもあの日、自分は自分の意志で子どもである事を、やめた。

深海棲艦との戦いを日夜繰り広げる日本海軍。しかし、土日祝日は全軍が休む。だから日本ではゴールデンウィークの一日に当たる今日も、艦娘達は思い思いに過ごしていた――但しこの日に限っては、間宮と鳳翔の柏餅と粽に舌鼓を打つが大半だった。５月５日、子どもの日である。

「柏餅も粽もうめぇ！」

「ふふ、よかったわ。よく噛んで食べるのよ」

深雪もまた、そのひとりだった。食堂の一角。朝食と共に饗されたそれをデザートに頬張る駆逐艦娘達の姿は、艦娘の他の軍人達にも微笑ましく映った。この朝、深雪が鳳翔の隣に座ったのは偶々だった。駆逐艦の中でも、あどけなさの残る深雪である。母性溢れる鳳翔との対比は、まるで本当の母娘のようだ。そう評されているとはつゆ知らず、彼女達は微笑みあう。心地よい喧噪の中、鳳翔は自分の朝食を摂りながらいう。箸が、おみおつけを摘んだ。

「司令にも好評だったから嬉しいわ。美味しかったって、間宮にもあとで伝えておくわね」

「あれ、そういえば司令官は」

粽の葉を捲る深雪は、鳳翔の言葉に左右を見渡す。右方には、数席を空けて雷と電、斜め向かいには川内型姉妹。鳳翔の向こうの左方には、レーベとマックスが並んで座っていた。海老ぞりに後方を見遣れば、丁度通り過ぎた霞が「行儀が悪いわよ」と咎めてくる。同じ事を鳳翔に窘められながらも、深雪は首を傾げる。

いつもならば、休日のこの時間。寝ぼけ眼で遅めの朝食を摂っているところだ。白い飯の詰まった櫃の上に、漬け物やおかずを乗せてもりもりと頬張っている姿は、既にこの鎮守府の名物だ。本人は「１０代男子で軍人だから燃費が悪いんだよ」と訴えているが、その横で、彼の同年代の下士官がその半分にも満たない量の食事を終えて立ち上

がったので、その言葉は空を回った。司令官のその様は、まるで「艦娘」になる前の艦娘の燃費の悪さにも似ていた――深雪は幼いなりにも、そんな印象を抱いていた。

艦娘の戦闘の為のエネルギーは、通常の食事だけではまかなえない。まとめて資材と呼ばれる燃料や弾薬、鋼材やボーキサイトでエネルギーを摂取するのだ。但し、これは艤装をつけられるように改造したあとの話だ。艦娘になる前、「素体」の時点では、個体差はあれど、軒並みフードファイターになれる程の大食漢ばかりだ。駆逐艦も同様である。この為、艦船血統を取り扱う「ブリーダー」達に支給される予算は、主に食費に消えるのだった。艦娘になってからの彼女達の摂る食事は、どちらかといえば嗜好品に近い。勿論、食事を摂れば、微々たるものでもエネルギー摂取になるので、推奨はされている。通常の軍人が酒・煙草を嗜むようなものだった。それよりは遙かに健康的、ましてや薬物に手を出されるよりはずっとましなので、こういった年中行事も行われるのだった。特に、今の司令官が着任してからは、そういった事は積極的に行われるようになった。基地周辺に広がる日本人街の者達や、地元の住民も交えたイベントも盛んに行われるようになった。もみじ祭やハロウィン、クリスマスや忘年会に新年会。節分からバレンタインデー、ひな祭りやホワイトデーに花見――日本ならではの無節操さだが、地元の経済活性化に貢献しているので、上層部から一定の評価は得ているという。但し、「かなり捻くれた表現だったわね」とは、その通信を受けた敷波の言だ。

『昇進という名の左遷だったらしいから。上も、そう素直に褒める訳がないけどね』

漣とぼやいていた彼女の言葉を、執務室の前を通り過ぎていた深雪は聴いていた。どうやら相当に深い事情があるらしい事は、１８歳でひとつの鎮守府を任されているという時点で察せざるを得なかったが――以上の連想を打ち切ったのは、鳳翔の「司令なら、もう朝食は食べ終えたわ」という言葉と、丁度やって来た吹雪の返事だった。

「司令？　司令ならさっき、輸送の人から荷物を受け取ってたよ。個人が受け取るにしては、結構な量だった」

「荷物」
「やっぱり間に合わなかった、ってしょぼくれてたけど」
「あぁ、あれかしら」
「あれって」
　深雪と吹雪が鳳翔を見遣る。彼女は顎に手を添えながら、天井を仰いでいた。
「子どもの日に、駆逐艦の子ども達だけで野球大会がしたいなー、って、春の選抜を観ながら呟いてらしたから。多分、野球道具一式じゃないかしら。さすがに、急には無理だろうとはわかってらしたようだけど。あの人、野球が好きだから」
「へぇ、はじめて知りました」
「でも観る専じゃないの。あの人、病弱じゃん。その割にはよく食うけど」
　駆逐艦の中では、比較的遅くにやって来た吹雪と深雪がいう。駆逐艦の中で、主に司令官のサポートをこなしているのは敷波と漣だ。現在はまだ前線に出ず、主に演習と遠征任務をこなしている深雪達は、あまり司令官と接さない。温和で優しい、且つ慎重派の司令官。頻繁に風邪をひいては、布団のローテーブルの上で書類決裁を行っている様の印象が強かった。とてもではないが、スポーツとは結びつかない。けれど鳳翔はいった。
「司令は結構、頑丈だけどね。だからこそ、らしいわ。親御さんが、病弱な彼を心配して、体力をつけさせようとしたらしいの。小学校から、ボーイズリーグで捕手をしてたって。公式試合には『事情』があって出られなかったらしいけど」
「へぇー」
「それも、士官学校に入るまでの話らしいけどね」
　声を揃えて驚く2人。彼女達の前で、鳳翔は最後に付け加えた。その声音の色に、深雪は首を傾げつつも、最後の粽を口に放った。
　さて、今日は、どうしようか。考えていなかった空白の予定に、ある項目を書き加えた。深雪は席を立った。
　青い空、白い雲。赤く広がる地面に点在する雑草。風で舞い上が

る、乾いた土。照りつける、春の陽光。倉庫の向こうのそれは、嘗て彼の親しんだものとよく似ていた。違うのは、ここが日本から遠く離れた土地である事。そして自身が所属するのは、故郷の学校と野球チームではなく、日本海軍であるという事だ。木箱をバールで開ける作業を淡々と繰り返していると、開け放たれた扉の向こう。そこにシルエットが躍り出てくる。

「しーれいっ、何してんのー」

「おや、深雪。おはよう。ちょっと荷ほどきをね」

「やっぱ野球道具？」

「おやおや、ばれていたか。鳳翔かな」

プリーツスカートを揺らしながら、真っ直ぐに駆け寄ってくる。子犬を連想しつつも、司令は木箱の中身を彼女と共に改めた。木箱の中には、緩衝材などと共にボールが詰まっていた。深雪が手に取ったそれは、彼女が実家にいた頃に手にした事のあるそれより重かった。深雪には丁度良い重さだったが。それに首を傾げる彼女に、ボールをいくつか改めながら司令は笑っていう。

「駆逐艦級ぐらいの腕力仕様のボールだよ。ちなみにバットも似たようなの。ヘルメットやユニフォームもボールに対応して頑丈なのだから」

「なんで」

「君達に一般の野球道具を使わせたら、うっかり気を抜くと、ボールが海まで飛んでいっちゃうからね。とりあえず少しだけ作って貰ったんだ。ウチがモニターになって試してみて丁度良かったら、他の鎮守府でも艦娘向けのスポーツ道具を配給するってさ。まあ、どちらにしろ、艦娘の野球の試合は、一般の軍人に直接観戦はさせられないけど」

後半の言葉には、今度は深雪は理由を尋ねなかった。艤装の機銃や砲弾を軽々と使いこなす艦娘の膂力だ。観客席に飛んでいったファールボールやホームランで、死人が出るかも知れない。観戦できるのは艦娘のみになるだろう。あとは鎮主府内に限ってのテレビ中継ぐらいか。青葉にやらせたら面白いかも知れない、そう思いつつ深雪はボールを掌で弄んだ。丁度良い重さのそれは、ちょっとやそっと

では飛ばなそうだった。「試合場にする場所に軍用ネットを張らないと、近所に飛んだら危ないな」とひとりごちる司令官の横顔を、深雪は見る。日焼けしていない、餅のように生白い顔色のせいもあって、野球坊主というよりも、文学少年といわれた方がしっくり来る外見だ。ギムナジウムの木陰で本を読み解いていなければ、山奥のサナトリウムで療養していそうだ。そもそも、軍服が似合わないのだ。尤も、普段から工廠に頻繁に出入りしているので、作業着の上に軍服の上衣を羽織っているという、ミスマッチにも程があるファッションを見せているが。今日は祝日なので、ただの作業着のみだ。それも実のところ、あまり似合っていない。

深雪は、司令官にボールを手渡した。彼女は再び問う。

「要は、今日はスポーツ大会をやるつもりだったって事か」

「正確には運動会かな。……運動会、わかるかな」

「一般の人達がガッコーでやるのだろ、知ってるよ。やった事はないけど。ガッコーの生徒でスポーツやるのを保護者が見に来るんだろ」

「一般人」からは隔離されて育つ艦娘。それでも学習はする。世間一般の常識もその覚えさせられる知識のひとつだった。深雪の返答に僅かに顔をしかめたのを、司令官は顔を拭うふりをして隠しながら答える。

「まあ、合ってるけど。そんな感じで、まあ、いつものお祭り騒ぎをね。一般の軍人メインでやるつもりだったけど、どうせなら艦娘の皆にもやって貰いたくてさ。でも、スポーツ道具の開発の限界的に、駆逐艦級対応が精いっぱいぽくて。どうせなら子どもの日にちなんで、駆逐艦の子達限定でやらせようかなって。今年は間に合わなかったし、やっぱり実際に持ってみると、一般公開なんて遠い話になりそうだなー」

「ふーん。……何で一般の軍人メインなんだ。割といつもそうだけど」

これは、深雪も以前から疑問に思っていた事だ。幼さゆえに、あまり難しい事はわからない。しかし、どうやら、この司令官が色々と難しい事を考えているらしい事は、彼女にもわかった。それを、決して

口にせず、ただ微笑むのがこの司令官なのだが。この時も、彼は笑うだけだった。小脇に置いていた箱を引き寄せると、その中から茶色いものを取り出す。よく見ると、それはグローブだった。正確にはミットだという事は、野球の知識のない彼女には判断出来なかった。真新しいそれも発注品らしい。それを手に嵌めた司令は、口元を覆いながら肩を竦める。

「どちらかというと、一般の軍人のフラストレーションの発散かな。ストレスのはけ口は、弱い者に向けられるから」

「ふぅん……」

フラストレーション、ストレス。カタカナのそれが示す意味を、彼女は正確には察し得なかった。深雪は、子どもだった。ただ、彼女にもわかっている事がある。ここは以前、もっと閉鎖的な鎮守府だったという。今の司令官が着任してから、地元民と交流するようになったし、軍内外での暴力沙汰も減った。少なくとも、以前は、駆逐艦娘がこうしてひとりで彷徨くのは、艦娘の間で暗黙のうちに危険とされていたという。それが、この幼顔の司令官の功績のひとつなのだろうと。

しかし、子どもだったから、彼女はそれ以上に詳しくは考えられなかった。渋面を作る深雪に気付いて、司令はミットを口から外した。いつもの柔らかい笑みが、そこにあった。

「御免ね、君にはまだ難しいか。そうだね、まずはキャッチボールでもしようか。やり方、わかる」

「取り敢えず投げればいいんだろ。で、相手が投げれば受け止める。それでいいんだろ。っていうか、司令、大丈夫なのかよ」

「何が」

傍らの木箱にミットを戻し、グローブを2つ取り出す。片方を深雪に渡すと、尋ねられた司令官は首を傾げた。そうしていると、ただの少年だった。丁度、軽巡洋艦娘ぐらいの年頃の。体格はそこそこに厚いようだが、それでも線の細さは否めない司令に、彼女はグローブを不器用に嵌めながらいう。

「私らの投げる球、間違ってぶつかったりしたらまずいんじゃねーの。

司令も一般人だろ、病弱だし」
「いつも川内や天龍の武闘派艦娘に艤装ごとどつかれてる俺に、その心配があると思う」
「……ねぇな」
「わかればよろしい。グローブの付け方は外で教えるよ。これでも一応野球チームにいたからね」
　頷く司令官に、深雪は考えを改めた。そういえば、そうだった。鳳翔の「司令官は頑丈」という言葉に偽りはない。繊弱そうな見た目と病弱な気管支に対して、異様な程の頑丈さは、駆逐艦がボールをぶつけたぐらいでは平気だろう。出口へと向かって歩く深雪に、司令官は安心させるように笑った。風が吹き込んだ。
「大丈夫だよ。俺は、一般人よりは頑丈だから。艦娘には、劣るけどね」
　彼女は幼かった。その言葉の意味を、まだ知らなかった。口の中で、朝に食べた柏餅と粽の味が、まだ残っていた。甘かった。倉庫の外は、明るい世界だった。世界は、単純で、優しいもののように思えたのだ。

　ボーイズリーグチームを辞したのは、あの日。養父に、真相を知らされた日だった。その日、彼は幸せを知った。幸せとは「知らない事」だと、知った。
　だから彼は、艦娘達には、幸せを知らないでいて欲しかった。
Ｅｎｄ．

目的のための手段、手段のための目的

湯飲みが４つ、茶菓子が４つ。盆を片手に扉を叩く直前、そのバリトンボイスは響いてきた。
「そりゃアタシだって嫌だったわよ。カッコカリとはいっても、結婚だもの。アタシは格好いい男の人と一緒にタキシードを着てヴァージンロードを歩くのが夢だったし」
「失礼します、お茶をお持ちしました」
「ああ、有り難う。明石」
ノックののち、応接室に入る。テーブルを挟んだソファには、４人の男女が向かい合っていた。片や、隆々とした体を窮屈そうに軍服――肩には大将を示す星――におさめた、坊主頭の男。それに五月雨。片や、この鎮守府の司令官と敷波だ。明石自身を除くと、ここの男女比は２：２だ。精神的には１：３のようだが。明石がそんな事を思いながらも湯飲みを並べていくと、五月雨が擽り笑う。ここの五月雨ではない彼女は、隣の彼を示していう。
「そうなんですよ。ウチの提督、本当に嫌がって。私があの頃１番レベルが高かったから、ケッコンカッコカリの相手に選ばれたんですよ。私はそんなに嫌われてるのかと思って泣いちゃったくらいです」
「あの時は悪かったって！　でも今はちゃんとかわいいわよ。いつか貴女が退役したら養子縁組しましょーねー」
「ねー。提督も、いつか格好いいお父さんを連れてきてくれるんですよねー」
「いい男捕まえてくるからねー。期待しててねー」
「……芽生えたのは、恋愛感情じゃなくて親子愛でしたか」
「ちょっとこの２人は特殊だと思うよ、司令官」
顔を並べて頷き合う、厳つい高官と駆逐艦の少女。そんな２人と向き合う形のこちらの司令官は、敷波と共に頭を振った。明石は芋羊羹を並べながら、密かに状況を察する。その司令官の手に握られた封筒に首を傾げつつ。
大本営から高官がやって来る。辺境にあるこの鎮守府に訪れたそ

の突然の報せに、動揺が走った。汚職や収賄などを防ぐ為に、末端の施設へ定期的に視察が入るのはよくある事だ。しかし、今回の訪問は予定されていなかったものだ。この鎮守府に、見られて疚しいものはない。しかし、質の悪い軍人であればどんな難癖をつけてくるかわかったものではない。へたをすれば賄賂を要求される可能性もある。そもそも、ここの司令官は問題を起こして昇進という名の左遷をされたのだ。どんな事をされるやら――その心配は、訪れてくる士官が、ここの司令官の知人であった事から杞憂となったものの、司令官自身はうんざりとした顔をし続けていた。工廠で装備を作りながら溜息を吐く司令官に、明石は問うたものだった。

『変な事をいわれる心配はないんでしょう。何でそんなに憂鬱そうなんです』

『どんな顔に見える、明石』

『たとえていえば、三十路前後のバリバリ仕事をこなすキャリアウーマンが、親戚のおばさんから見合い話をしつこく持ちかけられている時の顔ですかね』

『正解』

『えっ』

『正解なんだ』

スパナを動かしながら深々と嘆息する司令官の言葉の意味を、その時の明石は理解できなかった。だが今、こうして漣の代わりに茶を持ってきて理由を察した。文字通りだったのだ。つい最近に実装されたケッコンカッコカリを、当時はまだ後方支援担当だった明石も、話には訊いていた。

どちらかといえば、艦娘のメンタルケアの側面が強いというその機能。カッコカリの名の通り、実際に籍を入れる訳ではない。具体的なメカニズムは前線の士官や艦娘自身ですら知らないが、この機能を実施された艦娘は、コストパフォーマンスや戦闘能力の向上の箍が外れるという。ただ、その性質上、艦娘ひとりとしかそれは出来ない。中には大本営に贈賄を行ってまでジュウコンを行う司令官もいるらしいので、仕組みの上では艦娘全員と行う事も可能らしい。だが繰り返

すが、これは常に前線に身を晒す艦娘の為の機能である。ジュウコンを行う事で修羅場を演じた鎮守府があったという報告もあるので、建前としては飽くまで相手はひとりというのが推奨されている。そしてそもそも、ケッコンカッコカリを行えるのは、カンストした艦娘とのみだ。そこまで練度の高い艦娘を従えている士官に下手な真似をして欲しくないというのが大本営の本音だ――とは、こちらの司令官の推測だ。そもそもなぜケッコンカッコカリなどという名を冠したのか、彼の質問状への返答はいまだない。

　それはともかく、と前置いた大将はいう。顔を引き締めると、威厳のある偉丈夫だった。茶菓子を並べ終えた明石も、思わず立ち去らずに盆を両手に立ちつくす。

「貴男のところの扶桑ちゃん、もうカンストしたんでしょう。貴男のところの初の戦艦だった子。確か沖ノ島で回収したんだったかしら。彼女は戦艦だし、そこそこ燃費も悪いから相手には丁度良いんじゃなくて」

「燃費云々に関しては、何とかやりくりをしているので問題ありません。それに、まだこの鎮守府で練度の低い艦娘は多いんです。ケッコンカッコカリを決めるのは早計ですよ」

「またそんな事をいって。ちょっと、そっちの敷波ちゃん。貴女のところの提督、ちょっと頑固すぎない。この子にいい人はいないの」

　淡々と言葉を返す、部下に大将は呆れて尋ねる。五月雨と向かい合って芋羊羹を頬張っていた敷波は、慌てて茶で飲み干した。そして答える。渋面を作る、口元には食べ滓が残っていた。

「この人、そういう話をしたがらないんですよ。一応、レベル９０以上に達している艦娘は他にもいるんですよ。金剛や赤城、山城や比叡なんかがそうですね。改二という点では、霧島と比叡も行われてますよ」

「あらー、金剛ちゃんもなの。改二にまで改造しておいて、金剛ちゃんっていえば懐こい子じゃない。あの子とケッコンカッコカリをする士官も多いっていうし、貴男のところの子も例に漏れないでしょ。したら」

「ウチの金剛、どっちかっていうと司令のお姉ちゃんみたいですよ。余所の金剛さんとは違うみたいです」
「あらそーなの、敷波ちゃん。確かに金剛ちゃんは長女だけど……この子ったら甲斐性ないわね～。提督ＬＯＶＥとかいわせてなんぼでしょうが」
「……いわれたい放題ですね、司令」
「いいんだよ、明石。言論の自由は保障されて然るべきだって、ウチの教授もいってたし」
　彼を肴にして盛り上がる彼……女達の声は無慈悲だ。耳打ちする明石に、微笑む司令の目は暗い。
　不意に、大将はそんな彼らを見ていう。
「そういえば、そっちの明石ちゃん。貴女はレベルは今、いくつなの」
「えっと、４７です」
　素直に答える、明石の背中で鉢巻きが揺れる。それは明石が既に１回目の改造を終えている証だった。大将も五月雨も、意外そうに目を瞠った。
「あら、それなりに高いのね。春に着任したばかりだし、レベル１のままっていうところも珍しくないのに。実戦に出されてるのかしら」
「演習に優先的に組ませてるんですよ」
　割って入ったのは、こちらの司令官だ。彼は僅かに眉を顰めながら、大将に向き直っている。目を瞬く明石の前で、彼はいう。
「彼女の本業は泊地修理です。下手に出撃させる訳にはいきません。かといって全くレベリングしないのも、有事の際に困りますからね」
「ふぅん、大事にしてるのね」
　意味深長に微笑む大将を、五月雨も明石も不思議そうに見遣る。敷波は複雑そうだ。その中で、彼はいう。
「艦娘は艦種によって相応しい接し方というものがあるでしょう。駆逐艦や巡洋艦は夜戦、戦艦は火力と耐久、空母は空爆。工作艦の彼女に対して扱いが違うのは、ただそれだけの話ですよ」
「まぁ、そういう事にしておいていいけどね」
　明石は、大将の視線につられてそれを見る。司令官が、封筒を握る

手の力を強くしたのは気のせいか。大将は、隣で芋羊羹を食べ終えた五月雨を見ると、「そろそろお暇するわ」と立ち上がる。それに倣う司令官に、大将は逞しい顎に人差し指を添えた。割れた顎を黒く彩る髭が豊かだ。

「今日のところは、これで引き上げてあげるわ。上にはアタシから言い訳しておくわね。これからもこの件についてはアタシが中継しておくわ。これは貸しにしておくわね」

「わかりました。返済期限は１００年後の今日にしましょう」

「書面にしてやろうかクソガキ。……ま、その図々しさで、精々頑張りなさい」

敬礼しながらも答える彼に大将は悪態を吐きながらも、その片手を、連れ立つ五月雨の頭に乗せた。その顔には、苦みが濃い。その表情の意味を、明石も敷波も察し得なかった。

「貴男に捜しものがあるのは、わかってるからね。それが終わったら、取り立てに来るわ。それじゃ、敷波ちゃんも明石ちゃんも。この子をよろしくね」

そういって、大将は五月雨と共に去っていった。

「提督は、なんでここの司令官さんとお知り合いなんですか」

そう問うてくる、五月雨の疑問は尤もだった。見送られ、帰りの船に乗り込もうとする上官に、五月雨は艤装を点検しながらも首を傾げる。清楚でかわいらしい容姿の彼女が、駆逐艦といえど、一般軍人のそれと比にならない戦力を持つ事を、大将はよく知っていた。

そんな彼女を見下ろしながら、大将は思い出す。幼少の砌、まだ、自身の精神的性別を理解していなかった頃。家族で乗っていた客船が、深海棲艦に襲われた。その時に通っていたのが、この鎮守府の近辺だった。

その時に救助に当たったのが、当時の艦娘達だった。拉げた船体に巻き込まれそうになっていた自身を引っ張り出した艦娘の顔を、今でも覚えている。

それが、今のこの鎮守府。現在の司令官と同じ顔をしていた。

……彼女の辿った運命を知ったのは、家の方針で軍に入隊してから

だった。
「……五月雨。ここの司令官を見て、どう思った」
「どう、といいますと」
　質問を質問で返され、戸惑いながらも、五月雨は更に問い返す。大将はいった。
「あの子を見て、誰に似ていると思った」
「……うーん、よくわかりませんが……何となく、艦娘っぽいな、とは思いましたね。女顔、という訳ではないですが。軍人さんにしては線が細いからですかね」
「そう。そういう事よ」
「へ」
「わからなければいいわ。五月雨。……貴女には、アタシがついてるからね」
　この少女は、まだ、艦娘の引退後に待ち受ける、「兵器の生産」を知らない。科学技術の発達、そして権利団体の力が強まった現在、「それ」への負担は激減した。それでも、艦船血統の子供を産むのは、艦船血統の女性の方が流産や死産率がずっと低い。だから、徐々に実年齢に見合った年頃へと体が成長しつつある彼女も、いずれはそれに携わる。可能な限り、生ませ続けられるだろう。1番の回避方法は結婚だ。それでも最低ひとり、事実上2人は、甲種の男性との子供を産まなければならない。深海棲艦との戦いが続く限りは。それをわかっているから、大将は五月雨の頭を撫でる。いい人を見つけてやらねば、もしくは、彼女自身にそういう出会いがあれば。それを願っている。そして、同時に、大将は、今自身が出てきた建物を見上げた。先程話してきた司令官がいる鎮守府だ。
　相手としては、艦船血統であり、軍人でもあるここの司令官のような男が、艦娘の結婚相手として、軍としては最も望ましい相手だ。実のところ、他のところの司令官には、ここまでケッコンカッコカリをせっつかない。勝手にするからだ。ここの司令官には、是非とも、艦娘と結婚して欲しい。大本営はそう考えているから、少しでも縁を持たせようとしている。それを内心でひどく疎ましく思いながらも、大

将は考えるのだ。
（どうやら、あの子に気があるんでしょうに。はっきりいわないと、傍にいる子がかわいそうよ）
敷波の表情の意味を、大将はわかっていた。思考に没頭しそうになる大将を気遣ってか、五月雨は話題を逸らすように尋ねた。
「有り難う御座います……？　それは置いておいて、そういえば、あのお手紙は何だったんですか。ここの司令官さんに渡してましたけど」
「あぁ、ついでに頼まれてね。なんて事はない、ただのお手紙よ。出欠確認のね。ま、内容なんて、封筒とあの子の反応を見れば直ぐにわかったけどね」
大将は思い出す。最初に手紙を渡した時。それの差出人の名を見て、彼は、敷波と同じ表情を浮かべた。
「それ、結婚式の招待状じゃないの」
見送りののち、執務室へと戻る。現在、泊地修理の必要な艦娘はいないので、手持ち無沙汰の明石は、司令官と敷波のあとをついてきていた。玄関から鎮守府へと入る時、司令官の軍服のポケットからはみ出たそれを、隣についていた敷波が見咎めた。明石も思わず、それを見る。
はみ出て、そして落ちそうになったそれ。そこには、「Ｗｅｄｄｉｎｇ　Ｉｎｖｉｔａｔｉｏｎ」の文字が読み取れる。シンプルなデザインだが、しかし、普通の封筒よりも装飾性の強い封筒だ。落ちきる前に敷波が掴んだので、それを受け取った彼は、帽子の下で苦笑いする。苦しそうな、笑みだった。
「あー、うん。ついでに持ってきてくれたって。幼馴染みが結婚するってさ」
「……早くない。だって司令だって１８歳だし、幼馴染みだったら大して年の差ないんじゃ」
「６歳上のお姉さんだったから、早すぎるって事はないんじゃないかな。返事を出さないとなー」
封筒を手にする彼の背中は、ごくいつも通りに見えた。司令官と明石は、前線で戦う仲間としては付き合いが浅い。だが、明石は元々後

方支援担当として当初から鎮守府にいたのだ。最初につく秘書艦以外でいえば、大本営から課せられる任務を管理する艦娘と同じぐらい付き合いが長い。時に風邪をひき、時に悪ふざけをし、時に笑っている彼の姿は、日常の1部を切り取って集めたように覚えていた。それは、漣と共に、ほとんど初期から秘書艦として寄り添っている敷波ともまた違う接し方だった。そんな彼女は、何の気なしに問いかける。敷波がその横顔を見上げたまま、黙っていたので。

「式はいつ頃なんです、行くなら予定の調整とか必要でしょう」

「え」

「え」

敷波が振り向く。明石も声を上げた。司令官は一瞬、立ち止まっていた。

しかし、直ぐに短靴を前に出す。振り向かなかったが。

「あーうん、そうだね。うん、出席に、するか。●月だってさ」

「随分と日が遠いわね」

「俺に気を遣ってくれたってさ。添えられた手紙に『感謝しろ！』って恩着せがましく書いてるよ。あの人はそういう人だからね。こうして海外勤務してるからってさ。俺が出席するに決まってるって、端から疑ってないんだろうな、屹度」

その声音があまりにいつもと同じで、寧ろ楽しそうですらあったので、明石は敷波が返答しない事に違和感を覚えなかった。時にひどいブラックジョークを放って呆れて言葉を失わせる姿は、よく見ていたからだ。だから、明石は笑って歩を進める。少し、距離が縮んだ。

「じゃあ、その時はお祝いを考えなくちゃですね。司令、新年会の時なんかも体を張って芸をなさってたりしてたじゃないですか。屹度、そういうのを見せたら、とても喜んで貰えますよ」

「そうだね。祝って、喜んで貰えるのが何よりだ」

そう答えて振り返った司令官は、確かに笑っていた。それを見上げて、敷波はいう。

「男の恋は名前をつけて保存、か。司令、そろそろ演習の時間でしょ。明石もだよ」

「あ、そうだったそうだった。明石、艤装つけてきて」
「了解です！」
最初の言葉は彼女の口の中で消えた。あとの言葉に、司令官も明石も、二手に分かれて慌てて早足で歩き出す。敷波は司令官の方へとついていく。その背中に、声をかけた。
「司令官」
「何、敷波」
「泣いたっていいんだよ」
一瞬、一瞬だけ間が空いた。しかし、答えは直ぐに返ってきた。
「俺は、目的を優先させる事にしたから。何もしなかった奴に、悔しがる資格なんてないよ」
「あっそ。ま、明石に関しては、逃がさないように気を付けなよ」
「そうする。ケッコンカッコカリなんて、体の良い言い訳もあるし。じわじわ距離を詰めていく事にするよ」
淀みなく返ってきた答えは明快だった。それに敷波は、笑みさえ浮かべてしまった。

Ｅｎｄ．

コンプレックス【※派生オメガバースパロ】

そろそろだ。寮の自室。ひとり部屋として宛がわれたそこで、カレンダーを睨む。3ヶ月に1度、尤も疎ましい時期だ。加賀は、悩ましげに溜息を吐いた。

その背後。扉を叩く音が響く。落ち着いた声が扉の向こうから響いた。

『加賀さーん。そろそろ朝ご飯の時間よー。早く食堂に行きましょー』

「……今、行くわ」

平静を取り繕って、立ち上がる。着替えは既に済ませていた。今日はまず、特別休暇申請を作らなくてはいけない。朝食を終えたあとの仕事を考えながら、彼女は自身を落ち着けようとしていた。

そうでないと、扉の向こう。心から朝食を楽しみにした様子で輝く、赤城の顔を落ち着いて直視出来そうになかった。特に、今の加賀にとっては。

＊＊＊

クシャミ。続いて、ティッシュを取り出す音。それから、鼻をかむ豪快な音。そして、溜息。僅かな紙擦れ、抽斗を閉める音。それらを聞き届けたのち、敷波は扉を開いた。新たなティッシュを取り出す司令官に、彼女は書類を片手に息を吐いた。

「司令官、また風邪なの。年に何回ひく気なんだよ」

「いや～これぱっかりはね～。体質だから勘弁して」

ローションティッシュで再び鼻をかむ、彼の鼻の頭は赤くなっていた。その声は鼻声である。敷波がその目が潤んでいるのを確認した時、執務室にクシャミと敷波の悲鳴が響いた。

使い捨てマスクを耳にかける。怒る敷波を宥めながら、司令官は苦笑して書類を受け取る。

「御免って。それでこれは何の書類」

「加賀がヒートの時期に入るから、明日から1週間出撃を控えたいっ

て。だから他の正規空母から編成を組んで欲しいんだよ」
「ああ、いつものか。じゃあ、明日は赤城と瑞鶴と蒼龍に出て貰おうか。いつも通りに明日から1週間は、秘書艦は加賀にやって貰うから、敷波と漣は支援艦隊に入って」
「それはいいんだけどさ、司令官。ひとつ聞きたい事があるんだけど」
「何」
　咳き込みながらも万年筆を走らせる。その上官に、敷波は不思議そうに問いかけた。
「前から思ってたんだけど、『ヒート』って何。加賀がオメガだから、っていうのに由来しているのは知っているけどさ。出撃に問題が出る程なの」
「ヒートは生理現象だよ。セクハラになるから、オメガの人にあまり深く突っ込まないようにね」
「……御免。わかった」
　素直に頭を下げる敷波に、司令官はマスク越しに微笑んだ。その表情は優しい。
「いいよ。駆逐艦ぐらいの年頃には、まだちゃんと説明されてないみたいだね。場合によってはアルファとかオメガとか、まだわかってないか」
　敷波が頷く。それを見て、手を止めず、司令官は説明する。
　ヒトの性別は、男女の他にアルファ・ベータ・オメガと呼ばれる性別がある。日本では甲種・乙種・丙種といわれた。大体、１０代前半でその性別は判明する。アルファは自他共に男女問わず、ベータとオメガの全てのヒトを妊娠させられる。オメガはその逆だ。ベータは人類の大多数を占め、アルファとオメガは少数だ。但し、その立場は真逆。アルファは社会的にも優位に立つ。オメガは「ヒート」と呼ばれる生理現象が3ヶ月に1度発生する。この時期は、何の対策も打たなければ、1週間は身動きが出来なくなるのだ。１０代後半から発生するこの現象は、社会で働くには非常に不利だ。加え、その性質上、繁殖のみがその仕事とされる。近年は改善されてきているものの、社会的に蔑視される立場にあった。

「加賀は、そのオメガの女性という訳。しかも普通よりモテモテだよ」
「……司令官、詳しいんだね」
敷波は胡乱そうに、上官を見詰める。ずれたマスクを直した司令官は、淡々と書類を見ていた。
「俺は士官だよ、敷波。上に立つものとして、そういう事は士官学校時代にきちんと教えられてるよ。いつ、部下にそういう子が来るかわからないもの。士官学校っていうのは、部下にとってより良い上官を育成する機関だからね」
「……それも、そっか。でも、何の対策も打たなければ、って事は、何か対策があるんじゃないの」
頷きながらも更に問う。提督は不意にティッシュを引き抜いた。マスクを取って鼻をかむ。それに眉を顰める部下に構わず、彼は何事もなかったように答えた。
「あるよ。その生理現象自体は、投薬で抑えられる。偶に体質に合わなくて抑制剤が飲めないっていう人もいるし、フェロモンは垂れ流しだけどね。問題は、加賀が艦娘だっていう事だ」
「問題」
「敷波。ウチの鎮守府だと、赤城や日向とかがアルファだ。で、彼女達が偶に、偏って攻撃しているところを見た事がないかな。相手が特別な艦種でもないのに、そちらに攻撃が吸い寄せられたりとか」
「……心当たりがなくもないけど」
いわれて、思い出す。基本的に、戦艦や正規空母など、高火力艦が出撃するような戦域に駆逐艦が出る事は少ない。しかし、その条件の都合上、駆逐艦のように足が速く、夜戦に強い戦力が必要な場合もある。その時に、他の艦娘が攻撃するところを見る。軽空母や航空戦艦の艦娘が、潜水艦へ攻撃が吸い寄せられる事はままある事だ。敷波自身も駆逐艦の為、撃沈させるまでは、潜水艦への攻撃をやめられないのだ。その中で、時に攻撃が偏っている赤城や日向を見る事がある。それをあとで他の艦娘から理由を問われても、彼女達自身も首を傾げている事がほとんどだ。尤も、今までは偶々だと思っていたのだが。司令官はマスクを耳にかけ直す。

「あれは、敵の中にオメガがいるからだ、っていわれてる。向こうにオメガがいて、『彼女』を艦娘にして、自分達の手元に寄せる為に攻撃してるんだ、っていわれてる」
「……えっ」
「これは俗説だけどね。ただ、逆の現象はよくある」
ペンを持ちながら、彼は事もなげにいった。
「オメガの艦娘は、被弾率が高いんだ。その上、特にヒートの時期に出撃させると、被弾率がダントツになるんだってさ。たとえ潜水艦を編成に組んでても、それを無視して対象の艦娘を攻撃してくる。これは正式に習う訳じゃないけど、士官学校時代に教官が雑談で教えてくれたよ。新任時代も、職場のオメガの艦娘は、ヒートの時期になると出撃控えさせられてたよ。場合によっては、オメガの艦娘を旗艦に据えてデコイにするっていう作戦もあるけど、ウチでそういうのを取るつもりは今のところないからね。だから、この時期は加賀には休んで貰うんだ」
「……あのさ、それって」
「つまり、深海棲艦にもアルファがいるんだろうね。それで、オメガを『そちら側』に引き寄せたがる訳だ。ま、これも俗説だけどね。真剣に考えなくていいよ」
冗談を語る顔にしては、彼の表情は真剣だった。敷波の頭に浮かんだのは、「轟沈した艦娘は、深海棲艦になる。また、ドロップする艦娘は元は深海棲艦だ」という説だ。マスクの下、鼻を啜る司令官の表情は、よくわからない。書類を決裁する司令官は、淡々と言葉を続ける。
「ヒート中のオメガ艦娘の被弾率は統計上無視し得ない数に上ってるし、ヒート中は体調不良に陥り易いから」
「なんか、本当に生理みたいだね」
「要は発情期だから」
それでも何とか返答した、敷波の言葉は斜め上に打ち返された。ライトスタンドへと向かう言葉に、敷波は思わず顔を上げた。視線を戻した先で、司令官は、肩を竦めるだけだ。苦笑を浮かべて。
「だから、セクハラになるっていったでしょ。『ヒート』は、英語で発

情期って意味も含むんだよ。フェロモンっていうのも、そういう事」
「……よく、わかったよ」
「あとは資料室に本があるから、そういうので勉強してね。男で上官の俺からあまり説明するとセクハラ扱いされちゃうかもだし」
　項垂れた敷波は、疲れたように肩を落とした。自身はまだ、アルファかベータかオメガの何れの性別か、まだ判断がついていない。ただ、出来れば、大多数のベータがいい。生々しい話に肩を重くした敷波は、「加賀に、明日は抑制薬をちゃんと持ってくるように伝えておいて」という言葉に頷きながら、執務室を辞した。
　……執務室を辞した、敷波。彼女が立ち去ったのち、マスクを外した司令官は、ティッシュを取り出す。
「……薬以外にも、ヒートを抑えて、且つアルファを寄せ付けなくなる方法はあるんだけどね」
　そのひとり言が消えきらぬうちに、鼻をかむ音が響いた。そして、抽斗を開く。大本営からの手紙だった。
　それを開きながら、司令官は、深く嘆息した。

　夕方の食堂。艦娘や一般軍人達が思い思いに食事を摂る。正規空母のグループで、それをいったのは赤城だった。口元には飯粒がついている。
「加賀さん、明日から出撃はお休みなんだ」
「えぇ、ご免なさいね。1週間は、貴女達に迷惑をかけるわ」
「いーのいーの。加賀はウチじゃ主力のひとりなんだから、復帰するの待ってるよ」
「いつもの事だし今更よ、水くさい」
　静かに謝る加賀に、他の空母娘達は口々に答える。それに、ほんの僅かにだけ口元を緩める加賀だ。その表情の変化はわかりづらい。だが内心では、安堵に包まれている。
　――一航戦の「加賀」の血統として生まれ、教育されてきた。それで10代前半。検査でオメガと知った時の、養い親という名のブリーダーの嘆きようを、彼女は覚えている。半ば、心の傷にすらなってい

た。ただでさえ、艦娘は、一応は人間とはいえ、種全体がオメガと同様に社会的地位が低いのだ。一線を退けば、待っているのは「兵器の生産」という名の出産義務だ。特に、オメガである彼女は、アルファやベータよりも「生む」という行為に長じている。ブリーダーの悲嘆は、我が子のようにかわいがっていた娘の行く末と、それに自身の作り上げた「兵器」の完成度が低くなる事へのものだった。
(好きで、オメガに生まれた訳じゃないのに)
「加賀さん、先生からお薬は貰ったの。昼間に敷波さんにいわれてたでしょう。何だかあの子、元気がなかったけど」
「……そういえば、忘れてたわ。有り難う。取りに行くわ。敷波さんは、提督のいつものブラックジョークにでも付き合わされたんじゃない」
翔鶴に問われて我に返る。加賀は、自身の自室の抽斗に残っていた抑制薬の残りの数を思い出した。1日3回の服薬を義務づけられるそれは、1週間分には到底足りない。今日の当番の軍医は誰だったかと思い出しながら、加賀は急いで食事を掻き込んだ。
気のせいだろうか。先程から、赤城がこちらを見てやまない気がした。一刻も早く離れたくて、急いで味噌汁を飲み終える。
同じアルファでも、日向とはこうはならない。その意味を、加賀は考えたくなかった。
箸を置く。立ち上がった。
「それじゃ、御馳走様。お先に失礼」
「んー、それじゃまた明日ー」
飛龍が手を振る。盆を持って席を去る加賀。間もなく、赤城も立ち上がった。口元には飯粒がついたままだ。
「御馳走様!」
「赤城、ご飯全然お代わりしてないじゃん」
「いいの、それじゃみんな。また明日!」
慌ただしく盆を持つ。そして、食堂を出て行った加賀の軌跡を追うように、足早に立ち去っていった。
……残された空母達は、耳打ちをしあう。彼女達の視界の隅。一列

の並べられたテーブルを挟んだ向こうの席。隣同士に座り合った大井と北上が映っていた。仲睦まじい彼女達がオメガとアルファである事を、彼女達も知っていた。瑞鶴が、囁く。
「……加賀、赤城とマッチングする気はないのかな。大井と北上は、もうしちゃったのに。戦力に響くから出産は禁止されてるけど」
「それは皆が思ってる事だろうけど、こればっかりは本人達の問題だしね」
「多分、相性的にも間違いなくつがい、なのにね」
　大井が北上の口におかずを運んでやっているのが、見える。彼女達の後ろを、また体調を崩したのか、マスクをつけて箱ティッシュを小脇に抱えた提督が通り過ぎた。彼は、その目を、食堂を出て行く赤城に向けていた。

　軍医が、薬を渡してくる。両手で紙袋を受け取る彼女に、彼は苦笑を浮かべていた。
「はい、1週間分。次はもっと早めに取りに来てくださいね」
「ご免なさい。忘れていました」
　素直に頭を下げる彼女に、軍医は頭を振る。オールバックの前髪が、僅かに乱れた。
「艦娘さんは、とっても忙しいのはわかっているけどね。ヒートの時期の飲み忘れは命取りだから……それじゃ、そろそろ私は次の人に交代するので」
「遅くにすいません、有り難う御座いました」
　立ち上がった医師につられ、彼女も立ち上がる。彼は、心配そうに加賀を見下ろした。
「……それと、余計なお世話でしょうが。もう、ヒートの時期に出撃しないようにしてくださいね。提督も、そういう運用は避けたいようですし。貴女は、ベータですら引き寄せるようですから」
「そうします。ご心配おかけしました」
　そして加賀は、医務室を辞した。紙袋を片手に寮へと足を向ける、彼女の脳裏に浮かんだのは、この鎮守府に来て日の浅い頃。彼女の育

成を兼ねての出撃。
伊５８が驚いていた。
『何で、何でゴーヤを狙わないんでち!?』
いずれも、対潜能力の高い筈の深海棲艦。それらが、旗艦に据えられた伊５８を無視した攻撃をしてくる。正確には、隊列の最後方、加賀へ。加賀は表情の変化に乏しい顔に、恐怖の色を刻んでいた。
渦巻く深海棲艦。大して級の高い敵ではない。しかし、それでも加賀は、確かに恐怖を覚えていた。
「それ」を搾取される恐怖。既に大破して、艦載機は飛ばせない。無力なまま、ただ、的になる。色を失った「艦」達。それらが、自分を狙っていた。このまま夜戦に突入すれば、確実に自身は引きずり込まれるだろう。あちらへ。
あの、冷たい海の底へ。
『加賀さん、下がってて』
落ち着いた声が、降ってきた。いつの間にか俯いていた自身。前方に、白と赤。靡く黒髪の背中が見えた。
――伊５８の、「テートクから追撃せず、帰投の指示でち!」という声が届くまで、加賀の視界は、それらで占められていた。
（あのあと、皆から叱られたわね。本当に申し訳ない事をしたわ）
紙袋を携えてゆったりと歩く加賀を見咎める物はいない。人気がなかった。ぼんやりと回想に耽る、彼女が思い出したのは、加賀がヒートの時期だと知った時の提督の表情だった。
『あのね、加賀。誰しもが、足りないものがあるんだよ。足りないものを足りているふりをされるよりは、〝ないから貸して〟といってくれた方が、周りにとっては楽なんだ。君が、周りの子達を気遣ってくれたのはよくわかった。だから、今度は皆に、君を気遣わせてね』
親のように労る声が、周りの優しい声が、身に沁みた。そして、尚のこと、申し訳なかった。オメガに生まれついた事実が。
そして何より、気付いてしまった。
「加賀さん、薬は無事に貰えたの」
振り返る。息を切らした赤城が、そこにいた。紙袋を、握りしめた。

「……ええ、貰えたわ。ちょっとギリギリだったけれど」
「それならよかった。加賀さん、自分の事に無頓着な時があるから」
「……口元にご飯粒をつけたままの赤城さんには、あまりいわれたくないわね」
「あ、有り難う」
無邪気に笑い、歩み寄ってくる赤城。彼女の口元についた夕食の名残を取り去ると、それを無意識に口にしながら歩き出す。赤城は当然のようについてきた。それを拒めず、加賀は黙り込む。
寮へと向かう廊下。人気はない。どこか遠くから、艦娘達の笑い声が聞こえる。頭声気味のそれは、恐らく駆逐艦達のものだろう。まだ、自身がそんな幼い声をしていた頃の事を思い出す。あの頃は、まだ。自分の事など、何もわかっていなかった。
自分が、艦娘で。オメガの女性で。艦娘として就任したのち、自分に背を向けて庇ってくれる人がいて。中破し、ドックでの修理を終えたその人が、無茶をするなと自分に泣きついてきて。そして、気付いてしまうなんて。
「加賀さん、このまま寮に戻るの。一緒にゲームしない」
「嬉しいけど、遠慮しておくわ。それに、赤城さんの部屋は遠いじゃない」
「1番離されてるもんね。もう少し、加賀さんと一緒にいたいのに」
「……アルファとオメガだから、仕方ないわ」
半歩遅れて、ついてくる赤城。かけられる言葉に、加賀は頭を振る。サイドテールが揺れた。赤城は、彼女の揺れる髪を見た。そして、思い切ったように、いう。
「いっそ、私と貴女でつがいになっちゃったら、遠慮なんてなくなるのにね」
「ふざけないで頂戴」
明るい口調のその言葉。返ってきたのは、突き放す言葉。静かだが、確かな拒絶があった。振り返らない、加賀の背中を、細く、白い項を、赤城は見詰める。予想の範囲だった。最初に断られるのは。それでも、赤城に譲る気はない。割れないように補強された窓。夜の空

と海が、遠くに見えた。
マッチング。アルファとオメガでのみ結ばれる、本能的なもの。生涯でただひとりだけを選ぶそれは、つがいと呼ばれる。1度つがいを選べば、ヒートは起きない。他のアルファを惑わせるフェロモンも出なくなる。勿論、世界は広い。生涯、自身のつがいと会う事のない者もいる。
ただ、赤城はわかっていた。立ち止まった加賀の背中を見詰める。
「ふざけてなんか、ない。私は本気でいっているの。加賀さん」
「なら、尚のこと、質が悪いわ。……私は、要らない。つがいなんて。本能の結びつきなんて。……理性がない関係なんて、まっぴら」
「加賀さん。なら、こっちを見て」
「……」
黙り込む、加賀の手首を掴む。すると、ゆるゆると、加賀がこちらを向いた。端正な顔に、困惑したような、かなしそうな。そんな表情が浮かんでいた。……泣いているように見えたのは、赤城の錯覚か。彼女は真っ直ぐに、加賀を見る。
手の中の体温を、逃す気は毛頭なかった。あの日、艦載機を必死に飛ばした。絶対に退く気はなかった。加賀を、海の底へやる気など、なかった。
怯んだ目。赤城は半ば睨め付けた。手首を握る手を、強くする。
「理由はなんだっていい。とにかく私は、貴女が欲しいの。加賀さんは、本当に私が要らないの」
「……」
加賀は、答えられない。答えようがなかった。だから、口を噤む。目を、逸らした。自分の中で出ている答えなど、疾うにわかっていたから。
「加賀ー、こっちだって聞いたけど、お薬はちゃんと貰ってきたのー」
——だから、提督の、いっそ脳天気な程の場違いな声が聞こえてきた時。それは天佑に等しかった。赤城が我に返った様子で手の力を緩めた、その隙に振り払う。赤城が惜しそうに声を上げた。途端、角

から男性の顔が見える。やはりそれは、提督の顔だった。マスク越しでもわかる程に朗らかに笑う彼は、暢気に歩み寄ってくる。
「いたいた。何だ、赤城と一緒にいたの」
「……提督」
「ちょっと赤城、何でそんな怖い声してんの。まさか加賀にカツアゲでもしてたの」
　地を這う赤城の声。振り返った彼女に睨み上げられ、提督は戯けたように諸手を挙げる。赤城はそれに煽られ声を荒げる。
「違います！　今は加賀さんと大事な話を」
「提督。薬はちゃんと貰ってきました。提督の分の風邪薬その他も貰ってきましたから、明日、出勤したらお持ちします。それでは」
「あ、加賀さん！」
「まーま、赤城。落ち着いて」
　それを好機と見たか。加賀は一気にまくし立てると、そのまま足早に立ち去っていった。最早あれは駆け足だ。追いかけようとした赤城を、提督が服を引っ張って止める。赤城は激高して、その手を振り払った。先程の加賀のように。加賀の足音は、既に聞こえなくなっていた。赤城は長い髪を振り乱し、提督を睨む。形を取ったら、提督の目を貫くだろう。肩を竦めている提督に、赤城は訴える。
「……提督、何で邪魔をしたんですか」
「さて、何の話かな」
「今のタイミングなら、いつもの提督なら、立ち去る上にその場一帯の職員を待避させる勢いで空気を読むじゃないですか。人の恋路を邪魔する奴は戦車に轢かれてしまってください！」
「物騒な事を……さすがに俺も、戦車に轢かれたら無事でいられる自信はないから、それは遠慮願いたいね。まあ、勿論邪魔はしたんだけど」
「提督……！」
　歯噛みする、その赤城の姿は、いつもの落ち着いた彼女ではなかった。アルファの本能を剥き出しにした、それなりに胆力のあるつもりの提督にすら恐ろしさを覚えさせるものだった。

「君が、そんな様子だったから。加賀が怯えていたよ。だから止めたんだよ」
「……」
「君の本意ではないでしょ、加賀を怯えさせるのは。あの子は普通のオメガよりモテるから、怖いアルファに危ない目に遭わされた事は何度もあるだろうし。そもそも、君達がお互いに『つがい』だと確信した時、あの子は深海棲艦のアルファ、あるいはベータにすら引き寄せられそうになっていた。それは、君も覚えてるでしょ」
「……提督。貴男、本当に食えない人ですね」
　それは、事実上の肯定だった。悔しそうに睨む彼女は、しかし、気迫が欠けていっていた。理性が戻ってきてくれたらしい。それに内心で安堵していると、赤城は、いう。意趣返しのように。
「提督。それでも、貴男が1番わかっているでしょう」
「何をかな」
「とぼけないでください。加賀さんの味わっている苦しみは、提督。貴男と同じでしょう。貴男は、オメガなんですから」
　提督は、微笑んだままだった。直接は、答えない。
「さすが、アルファ。やっぱ、ばれてたか。同じアルファの日向にばれていたから、君も気付いているだろうとは思っていたけど」
「においでわかりますよ。……加賀さんの方が、ずっと良いにおいがしますけど。加賀さんが貰ってた提督の分の薬って、貴男の分の抑制薬も入ってるでしょう」
「それがつがい、らしいからね。薬はそれで正解。ヒートの時期がいつもかぶるから、1週間秘書艦になって貰う加賀に貰ってきて貰った方が効率がいいし」
　提督はいう。
「ま、確かにわかるよ。ヒートの時期は『他人』を受け入れやすくする為に免疫系統が弱るから、ただでさえ病弱なのに、余計に風邪をひきやすくなるし。士官学校は、いわばエリートばっかだ。そのせいでアルファの男が多かったから、よく掘られそうになったし。加賀程じゃなくても、色々面倒臭い事はあるけどね」

それまで堪えていたらしい、クシャミを放つ。片手に持っていた箱ティッシュで鼻をかむと、その辺りにあったゴミ箱にそれを放りながら、彼は言葉を続ける。
「つがいを見つけてマッチングしちゃえば、ヒートはなくなる。生きやすくはなるよ。ぶっちゃけ、今日も大本営から、主力の加賀をもっと出撃させる為にもとっととつがいを見つけさせろって手紙も来たから、俺としては加賀にはさっさと君とくっついて欲しいよ」
「だったら」
「でもね、赤城。俺は『君達』に幸せになって欲しいんだ」
言い募る赤城に、提督は言葉を被せた。真剣な顔。それを直ぐに崩し、彼はいう。
「お互いに、もう少し落ち着いた時期に、納得ずくで話し合いなさい。加賀は、多分、自分に自信がない。コンプレックスを持っているよ。ヒートなのを隠してまで出撃を請け負った時に、そういう印象を受けた。オメガにはよくある事だ。だから、そういう不安を解かしてやらないと。本能で結びついてるつがいでも、心が通じてないという場合は往々にしてよくあるからね。彼女は、自分が欲しいという理由を、明確に言葉で欲しいんだろうから」
「……はい」
赤城は、頷いた。提督にいわれるまでもない。彼女もわかっていた事だった。
だから、好きになった。――オメガのフェロモンで、つい、我を失ってしまったが。
すっかり落ち着きを取り戻した赤城は、壁に凭れる。窓の向こうでは、相変わらず夜空と海が広がっていた。息を漏らした赤城は、同様に息を吐く提督に苦笑する。提督は、よく見れば肩で息をしている。そういえば、食堂に来ていた。慌てて追ってきたのだろう。風邪気味なのに申し訳ない事をした、そう思いながら彼女はいう。
「貴男が、ウチの提督でよかったですよ。加賀さんがここに配属になったのは、屹度、貴男がオメガだったからでしょうね」
「それは俺も思ったよ。多分、そこだけは大本営の温情だろうね。士

官学校にアルファの男が多いんだ。鎮守府の司令官になるようなのはいわんや、って事だ。だから、赤城。加賀を大事にしてやんなさい。大井と北上みたいにスムーズにくっつけとはいわないよ。君達につがいを失わせるような真似も、させないから」
「期待してますよ、提督。……あとで、ＬＩＮＥで加賀さんに謝ってもいいですかね」
「そうしなさい。いっておくけど、くれぐれも加賀に無理をさせるんじゃないよ」
「はい。ところで提督」
　早速、懐からスマートフォンを取り出す。その赤城を見届けたのち、元来た道を戻ろうとする提督に、赤城はいった。人の悪そうな笑みで。
「人の恋路に首を突っ込むのはいいんですけど、ご自分のはどうされたんですか。日向さんとは違うんでしょう、どうなさるんです」
「口を慎もうか」
　先程の加賀よりも、その声に拒絶の意志が固かった事は――記すまでもない。マスク越しの顔が嘗てない程恐ろしかった、とは、のちに加賀とめでたく同室になった赤城の語るところである。

　本当は、為人にも惹かれていた。彼女の剥き出しの本能にすら、怯えつつも、恍惚とした。ただ、それを認めたくなかっただけだった。
（恥ずかしい……）
　自室で、ヒートの時期特有のほてりのはじまりを自覚しながら、加賀はまだ薬を飲む気になれずに膝に顔を埋めた。
　Ｅｎｄ．

夏の執務室

書類を決裁する、司令官はいう。
「夏だねえ」
「そうだなー」
団扇を扇ぐのは、窓辺に腰を掛ける天龍だ。襟元を緩めた彼女は、風鈴の鳴るそこで外の景色を眺めている。工廠の音と、波の音。今のところは何の異状もない。その隻眼が遠く、水平線。漸く日が傾きつつある空に注がれているのを見もせず、司令官は隣の電にサインを終えた書類を渡す。電は袖を捲っていた。額には薄らと汗の玉が浮いている。いつも大人しい表情だが、今日は一段と力ない。それでも努めて笑おうとしているようだった。
「夏といえば、司令官さんは何を思い出します」
「夏ねえ、甲子園かな」
「さすが野球馬鹿」
笑う天龍の顔は、暑気を吹き飛ばそうと躍起になっているように見えた。それに、手を止め、側に置いていた手拭いで額を拭いながら司令は唇を尖らせる。
「いいじゃん。それとスイカでしょ、アイスでしょ、素麺でしょ、それに野菜カレー」
「食べ物ばっかりですね……電は花火です、線香花火とか」
「おーいいな。今度やろうぜ、司令。線香花火もそうだけど、ロケット花火とか蛇玉とか」
「おっけー。じゃあこの書類のついでに今から上に花火代の予算をもぎとり、もとい申請してくるよ。そろそろ敷波も戻ってくるだろうし、ファミリーサイズじゃ間に合わないしね」
電の言葉に、天龍は団扇を叩く。司令官も笑いながら、横に積み上げた書類に新たに目を通した。
はた、と。その手が止まったのはその時だ。再び動き出した時、司令官の口も開く。
「夏……花火といえば、花火大会……お祭りかなあ」

「あぁ、宵宮とかいいですよね。綿飴とか、らくがきせんべいとか」
「ここでもやるんだろ」
「やるよー」
　２人の言葉に頷いた。その拍子に、首筋から垂れた汗が、タンクトップの下の胸へと垂れていった。それを煩わしげに拭き取りながら司令官は笑う。暑さに茹だった様子で、喉が少し嗄れていた。
「日本人街の人達に出店して貰ったり、艦娘や一般軍人が出したりね。その時も最後に花火で締め括るのが定番らしいよ。俺は去年の今頃はまだいなかったから、古株の人達に聞いたんだけどね。基本的に実年齢が成人してる艦娘にお知らせがあるけど、大人と一緒に出店すれば未成年でも大丈夫だよ。来年からはやるかい」
「やってみたいのです！　林檎飴とか売りたいのです」
「おー、いいな。ならオレは来年、焼きそばでも売ろうかな」
「ははは。……そういえば、海軍以外の祭りって中学以来行ってないなあ」
　意気込む２人に笑う司令官は、ふと、思い出したようにいう。半ばひとり言だったが、どこか寂しそうな様子に、天龍も電もそちらを向く。先に尋ねたのは電だ。
「司令官さん、お祭り好きだったんですか」
「好きだよー。射的も輪投げも花火も籤引きも。チームの皆で練習帰りに寄ったりとか。特に、養母の里帰りで行った先の地元の祭りは盛り上がってて面白かったな。大きい武者絵が描かれた山車を引き回して、心臓に響くぐらいの大きい太鼓の音が響いてさ。まあ、地元の人曰く『混むし交通規制かかるから面倒臭い』らしいけど」
「祭りって地元民にとってはそんなもんだおなー。オレも、あれは５月にやるのだけど、地元ででっかい祭りがあるんだけどさ。でっかくなりすぎて大変だって聞いたぜ。まぁすげー盛り上がりはするんだけどよ」
「お祭りって大変なのですね……」
「まあ、何にせよ、皆で楽しく盛り上がれるのがベターだね。お、そろそろ敷波来たかな」

万年筆の柄を手拭いで拭く。汗で滑るのだ。サインを終えた書類を重ねていく、電の耳にも、近付いてくる小気味良い足音は届いていた。

電は、辺りを見渡した。

「……この光景見たら、敷波ちゃん、怒りそうなのです」

「怒るだろうな」

天龍が相槌を打った時、扉が叩かれた。司令官が返事をすると、少しばかり勢いよく扉が開いた。盆にグラスを乗せた敷波がそこに立っていた。

「司令官。冷たいの持ってきたよー。ご所望の人参と林檎とカルピスのジュース、……」

途端、敷波は黙り込む。代わりに声を上げたのは天龍だ。

「お、うまそーじゃん。何か女子力高いもん頼んだんだな、司令」

「いいじゃん、暑いから甘いのが欲しいんだよ。あとあげないから。給湯室に材料はある筈だから自分で作ってきなさい。敷波は御苦労様」

「ちぇー。おい敷波、どうしたんだよ。暑くてばててんのか」

ぼやいてから、扉で突っ立つ敷波の顔を覗き込む。盆を取り上げた天龍は、執務室を見渡した敷波の目線を追った。

床一面を見渡していた。先程の電のように。

……床に広がるのは、言葉もなく突っ伏している、艦娘達だ。艦種問わぬ彼女達は、それぞれだらしのない格好で、冷たい床の上に転がっていた。

筆頭が、机の前でタンクトップ姿で転がっている司令官である。傍らに書類、傍らに軍帽。きょとりとした顔で頬杖を突いていた。

はたと視線を上げる。所定の位置に、エアコンはない。明日にならなければ、それは帰ってこなかった。鎮守府のほとんどのエアコンがそうなっている事を、彼女は知っていた。

けれども。敷波は声を張り上げた。

「あんたら、いくらエアコンが壊れて暑いからって、床で寝そべるな!!しかもここ執務室!!」

「怒ると余計に暑くなるよ、敷波。床で冷をとるのも夏の風物詩だよ」
「汚いだけだよ!!　天龍も電も止めなさいよ!!」
「えーだって、事実暑いだろ。ここ、広いからたくさん艦娘が横たわれるしよ」
「司令官さん、下手すると熱中症で倒れられそうだったので……私達ならまだ頑丈ですけど、司令官さんはそうもいきませんし」
「甘い！　あんたら司令官にも仲間にも甘い!!　そこになおれーっ!!」
打ち上げ花火のように大きな声が、鎮守府の執務室から響いた。夏のある日の事である。

Ｅｎｄ．

ストーブ出すのしんどい

今月、秋の合同殲滅作戦が行われる。それに先だっての事だった。執務室の扉を叩き、入って来た彼女は敬礼する。長い袖が揺れた。

「扶桑、改装終了しました」

「ん。御苦労様。……こういうのも、何だかおかしいけど。大きくなったねえ」

「ええ、色々と」

顔を上げる司令官に、彼女は楚々と笑んだ。大きく作られた、観音開きの執務室の扉。そこから入ってきた扶桑が背負う艤装は、以前の倍程にも大きくなっていた。

「扶桑型1番艦扶桑」血統の改二の実装である。同時に、伊勢型の補正も行われた。大本営が航空戦艦の強化に乗り出したのだ。

机に肘を突きながら、渡された報告書に目を通す。工廠から帰ってきたばかりの彼女を見上げる司令官の目は感慨深げだ。交互に見遣るは、その日付である。

「君がウチの鎮守府に来て1年近くになるけど、正直、改二が実装されると思わなかったよ」

「それは私もですわ。山城も途惑っていますし……それにしても、合同作戦の前に資材を大量消費する改造によく許可を下ろしてくれましたね」

「そりゃね。君は夏の作戦の時点で練度が限度まで達していたし、その時にも活躍して貰ったしね。君が更に強くなってくれるなら、悔いのない投資だよ」

頬に手を添える扶桑に、判を捺した書類を渡す。それを受け取る彼女の仕種は、変わらず軽やかだ。背中に背負う艤装の重さなど、微塵も感じさせない。それに改めて、一般人と艦娘の差異を覚える。艦船血統丙種――艦娘と一般人男性との雑種1代目の男性――の自身は、一般人の男性に比べれば膂力は強い。軍人として訓練したから尚更だ。しかし「母」が軽巡洋艦だった為、戦艦娘の力には到底及ばない。扶桑の艤装を背負った瞬間に、自身は引っ繰り返ってしまうだろう。

それが容易に想像できたので、つい口元が緩む。怪訝そうにした扶桑に頭を振れば、不思議そうにしながらも、ふと、彼女はいう。まるで、思いついたように。
「そもそも、航空戦艦に改装して下さった時点で、私にとっては驚きでした」
判を仕舞う手を止め、司令官は顔を上げる。実年齢に見合わぬ幼顔は、先程の扶桑よりもより怪訝そうだ。
「……確かに君を航空戦艦化すると、火力が下がった。でも、そんなのは司令官の運用次第だ。そもそも、航空戦艦は扶桑型と伊勢型しかいないんだよ。貴重な人材を成長させない手はないでしょ」
「司令は、そういってくださるんですね」
報告書を両手に持つ、その手は白く、小さく、たおやかだ。その手と、背中に背負う物々しい艤装があまりに不釣り合いだった。そんな彼女は、さらり。長い黒髪と共に、鉢巻きを揺らした。
「『以前』の『提督』は、火力が足りなくなるからと、戦艦のまま運用してましたから」
「……」
楚々とした笑み。それから放たれた言葉の意味。それを、咀嚼した。
「――」
刹那に閃いたのは、彼女との出会い。着任して日の浅かった頃。
南西諸島海域の最奥、沖ノ島海域。攻略の最中、彼女はやって来た。この鎮守府初の戦艦娘、扶桑型1番艦・扶桑。建造ではなく、サルベージだった。
彼女は、海からやって来たのだ。
その意味を、軍人達の間で限りなく真実に近い噂として流れている俗説を、――そして、自身の血脈に流れる「記憶」を加味した。微笑んだままの彼女に、最初に問うたのは、「何年前の話かな」という、一見脈絡のない問いかけだった。それに、扶桑は頭を振る。
「全てを覚えている訳ではありません。ただ、恐らく、２０年ぐらい前の話です」

「そんなに……その間、サルベージされなかったの」
「あそこには、多くの『艦』がいますから」
その答えで、司令官は悟る。眉を顰めた。難関海域だ。深海棲艦との戦いがはじまって１００年が経つ。そこでサルベージされる事の多いという「扶桑型」が、それだけあそこで轟沈した事を示していた。同じ姿形をしているように見えても、ひとりひとりが異なる艦娘。下手をすれば、それこそ１００年前に生を受けた艦娘がサルベージされている事もあるのだろう。司令官は改めて眉間を引き締める。
艦娘のシステムは、近年、ベニクラゲの不老不死に近似しているとまことしやかに唱えられるようになった。ベニクラゲはある程度年を取ると、「若返り」を起こす。赤ん坊にまで戻り、そして再び成長する――「艦」に一般人の死は該当しない。1度轟沈した艦娘が、深海棲艦となり、再び艦娘としてサルベージされる。これは「艦」が人間側に戻る為に必要な過程なのではないか――艦娘と深海棲艦が同一の存在であると主張する者達が唱えている説だ。この説を信じ、轟沈する程のダメージが与えられた艦娘をなるべく回収し、地上でとどめを刺す事で「深海棲艦に勢力を増やさないようにしよう」と声高に主張する者までいる始末だ。
流れる風聞に関して、大本営は一貫として主張している。「艦娘は人間だ」と。
（人間ではない、といわれた方が余程楽だ）
自身の半分に流れる「艦」の血。人生の岐路でそれに振り回される度、司令官は強く思った。そして、今。海軍士官となった司令官の前に立つ艦娘は、優しい瞳で彼を見下ろす。
それは、まるで母のように。
「それに、屹度、貴男のお陰です。私が『こちら』に戻ってこられたのは。貴男がここの司令官になったから、縁が生じたんでしょう」
「縁」
「司令。貴男のお母様も、ここの鎮守府の所属でしたね」
「――」
それは、核心。

ここまで言い当ててきた艦娘は、彼女がはじめてだった。
無言で、肯定を返す。半ば睨め付けるように見上げた。扶桑は、ただただかなしげに笑んでいた。彼女は尋ねてくる。ただ、心配そうに。彼女が知らない筈の事を。
「……弟さんは、お元気ですか。あなた方が生まれた時、私達は無力でした。特に、兄の貴男は、お母さんのお腹の中にいた時に、戦場の深海棲艦の影響をまともに受けてしまったと聞いています。丁度、弟さんを庇う形でお腹の中にいたから。胎児は、母体よりも影響を受けやすいのに……。……貴男の容姿や、虚弱体質はその為でしょう」
憂いを帯びた声で告げられるのは、２０年前のこの鎮守府の惨状だ。近年は、世間からの影響もあり「ブラック鎮守府」などという冗談めかした言葉がある。しかし、昔は違った。それが間違っていると、誰も指摘できなかった。
間違っていると、理解できなかった。艦娘への扱いの劣悪さ、それが顕著に出た事件が２０年前に起きる前までは。
空白の２０年。艦娘への扱いは劇的に変わった。その過程を知らぬ扶桑は、戻ってきた今、その恩恵に与っている。自身の極地にまで達した今の彼女は、嘗ての赤子に向けていう。
「サルベージされてここに来た時、正直にいえば驚きました。貴男が、成長できていた事に」
「多分それは、俺を育ててくれた周りも驚いてるよ。……弟は大丈夫。人よりちょっと頑丈で、俺よりずっと健康だよ。金にも汚いし命根性も汚い。屹度長生きする。俺も、まあ、それなりには生きられるんじゃないかな。丙種だから」
「丙種だから……」
途惑う扶桑。彼女にとって、一般人よりも艦娘の方が頑丈だという考えの方が強いのだろう。それがわかっていたから、司令官は言葉を重ねる。指を組んで。
「轟沈した艦娘のなれの果て、深海棲艦は幽霊のようなもの。今の俺は、胎児だった頃にその幽霊から受けた影響で、半分……とまではいかなくても、１／４ぐらいはお化けみたいなもんだ。ゾンビといった

方が近いかな。だから、偶に身体のどこかが生きる事を忘れるんだと思う」
「……そんな」
「でもね。そんな俺の身体を何とか保たせてるのは、『人間』の部分だ」
知らず、指に力がこもる。
「艦娘ではない、『一般人』の父親の部分。それが、俺を生かしてる。俺をこの世に留め置いているのは、『艦娘への集団暴行事件』の犯人のひとりとして軍法会議で処刑された、父親の血なんだ」
「――」
その目に、怒りとも憎しみともつかぬ激情が覗いた。しかし、それも刹那。司令は瞼を降ろす。
「……人間、助け合って生きるもの。俺は他の人より助けて貰わないと生きていられない。とっくにこの世にいない人間にすらね。そうやって開き直ったから楽になったよ。理不尽を許す気はないけどね」
「……司令、貴男は」
「ねえ、扶桑。その様子だと、俺の母親の『最後』を知ってるんだよね」
改めて顔を上げる。司令官は、真摯に見詰めてくる彼女に問うた。
彼が軍人になった、本当の目的の為に。
「知りたいんだ、扶桑。まだ『彼女』がサルベージされてない事はわかっている。俺の生みの母は、一体、どの海域で轟沈『させられた』んだ」
扶桑の赤い目に、苦渋が滲んだ。
その口が開かれたのは、数秒の躊躇いののち。
「……私が覚えているのは、彼女が南方海域に出撃させられたところまでです」
「南方海域」
「そこの最奥に」
「……あそこか」
「ええ。何の装備も持たされず」
「……なるほど。そこまで攻略が進んでいたのに、君が沖ノ島海域に沈んだのは、差し詰めS勝利によるサルベージ目当てだろうな。

俺の母親の方は、『軍法会議を起こす一因となった邪魔者』としてついでに片付けたかったからかな。記録も改竄されてる、これじゃ行方不明扱いにもなる訳だ。……ああ、御免」
「いえ」
顔を顰めた扶桑に、ふと、司令官は同じような表情をする。それを見て、扶桑は気付かされる。
頭も身体も大人になりつつあるのに、幼さが残る。それは、この人がいまだアイデンティティを得られずにいる為だ。それを得る為に、この人はここにいるのだと。
何者かになる為に。
――ノイズの走る、嘗ての記憶。そこで、彼によく似た少女の姿が映る。声は聞こえない。あちこちに怪我の跡が残っていた。彼女は、空虚に笑っていた。こちらに手を振って。装備は、何も持たずに進水していった。
それが、最後の彼女の記憶。自身もその後の記憶がない。自身がこの事を思い出したのは、この司令官と顔を合わせてからだ。
「司令」
長くなっちゃったね、もう退室していいよ。辞去を促す彼に、扶桑は問う。
「秋の作戦が終わったら、あそこに行きますか」
「うん。行くよ。その時は君にも手伝って貰う」
他の書類の決裁を再開した彼は、顔を上げずに答えた。
「２０年ぐらい、待たせちゃってるからね。その時は、ちょっとした不正行為をするけど……出来れば見ないふりをして欲しいな。大丈夫、君達に害のあるものではないから」
堂々とした宣言だ。肩を竦めて告げる彼の顔は、いっそ悪戯っぽくすらある。それに思わず口の端を緩めた。
「貴男が私達に害のある真似をする事は決してないでしょう。わかってますよ」
「……君にそういって貰えるのは、嬉しいな」
その言葉が、彼女が「昔」を覚えているからこそ発せられたものだ。

それを扶桑は理解した。そして思い出したように続けられた言葉に、彼女は直ぐに頷く。
「そうだ、あのさ。……嫌な思い出ならいいけど、出来たら、『昔』の話、教えて欲しいな」
「ええ」
「……有り難う」
司令官は、安堵したように微笑んだ。その笑みも、母親を思い出させた。
「君がそういう顔をしてくれる程度には、うちの母と仲は良かったんだろうから。君から聞けたら、少しは俺の頭の中にある『記憶』が、良いものと思えそうだよ」
そう答える司令官は、西日を浴びていた。その肩と膝にブランケット（所謂膝掛けサイズ。艦娘向けのかわいらしい色柄とデザイン）がなかったら格好良く見えた事だろう。「そろそろ暖炉の準備かストーブを用意しましょう」と忠告すれば、彼は途端に「面倒臭い」と煩わしそうに顔を顰めた。自身より遙かに膂力の強い艦娘に準備させるという発想はないらしい事に、扶桑は嬉しさがこみ上げた。
だが部屋を辞して、気付く。
『俺の頭の中にある〝記憶〟が、良いものと思えそうだよ』
（私達は「艦」の記憶を血で受け継ぐ、強力な記録媒体のようなもの。戦いに纏わる記憶を受け継いでいく。稀に、「艦」としての情報以外。特に鎮守府に纏わる事――それをどんな姿形になっても覚えている事があるのは、偏にあそこも戦場の1部だから。私が覚えているのも鎮守府での事……）
そこまで考え、扶桑は振り返る。
今し方出てきた扉の向こう。そこにいる、時に艦娘に間違われる、若すぎる司令官。彼は嘗て、艦娘の待遇を一変させた事件の被害者の子どもだという。彼は、一般人との雑種1代目の男性。艦船血統丙種と分類される人間だ。
そして、雑種1代目までは、記憶がまともに継承される。
（司令は、母親の記憶を「どこからどこまで」受け継いだのですか）

本来は昔から禁止されていた「現役中の妊娠」。それは流産などの危険は勿論、戦場による胎児への悪影響が計り知れないからだ。息子の彼にその影響がどこまで及んでいるのか。年不相応な落ち着きと、先程僅かに覗かせた激情。それらが示している可能性に、扶桑はいつもより一層表情を暗くした。扉の向こうの彼の事を考え。

もし、自身の考えている通りならば、彼を「良き司令官」たらしめているものは――

「……『反面教師』、かしら」

ひとりごちる。扶桑は歩きはじめた。暖炉の準備を大淀や間宮に手配してやろうと頭の隅で考えながら。

彼もまた、歩いているのだ。そう思うと、扶桑は再び足を付ける事の叶ったこの鎮守府の床を踏みしめる力が強くなった。

Ｅｎｄ．

ついでだから。

「ん」

どこぞのジ●リアニメか。それを彷彿とさせる仕種で、司令官はそれを差し出してきた。作業服姿の明石はきょとり、目を瞬いた。冬服の軍服、それに袖を通したここの司令官は、こちらを見ずに書類にサインを続けていた。

小さな箱に、赤味の強い橙色の包装紙。淡い緑色のリボンが飾られている。既製品かと思ったが、よく見ればそれは手製による包装のようだ。なぜなら、鎮守府敷地内の雑貨屋で、同様の包装紙やリボンを見かけたからだ。尤も、自身は他の艦娘の買い物に付き合っただけだったが。差し出されたそれは、どうやら自身に受け取れといっているらしい。戸惑いながらも、受け取る。工廠に関する報告書の提出に来たのだが、手を洗ってきておいてよかった。それでも落としきれぬ油汚れには不釣り合いな程に、丁寧なラッピング。詳細を問う前に、書類を片付ける司令官は、こちらを見もせずに早口にいう。

「他の艦娘がチョコを作ってたから、手伝ったついで。中に黒文字代わりの小さいフォークも入れておいたから、作業しながらでも食べられるよ」

「和菓子ですか」

「生チョコ。作るの簡単だからね。それじゃ、戻って良いよ」

そういって、サインを終えた別件の書類を差し出してくる。それをもう片方の手で受け取りながらも、明石は小首を傾げた。常ならば、急かしはしないのに。そう思いつつも、何もいわずに書類仕事を続ける司令官は、もう何も答える気はなさそうだ。小さく肩を竦めて、執務室を出る。書類と、赤い包みを手にしながら。

幸か不幸か。明石には見えなかった。軍人にしては長めに切り揃えられた司令官の髪と、常ならば屋内では外している、軍帽の下の顔色に。

首を傾げている同僚を見咎めて、声を掛ける。

「あら、明石。それ、どうしたの」

「うん、司令から貰って」
「へぇー……」
大本営から下される任務の整理中の事。工廠へと戻ろうとするところだったらしい。作業着姿の彼女は、常ならば持たぬようなかわいらしい品を手にしている。てっきり明石から誰かへ贈る品かと思ったが、そもそもワーカホリック気味の彼女はバレンタインデーというものを把握しているかすら怪しい節がある。他の艦娘達が14日という日付が近付くにつれ色めき立つ中、彼女はいつも通りに機械油に塗れて仕事に打ち込んでいた。
それにひっそりと落ち込んでいた司令官を見たのも、一再ではない。少々気の毒だったものの、こればかりは馬に蹴られたくはないので口出しはしなかった。その結果が、今日という日の、彼女が手に持つこれらしい。駆逐艦達に配る為、と鳳翔や間宮らと厨房に立つ姿を見かけたが、この為だったようだ。廊下で立ち話をする彼女達の横を、駆逐艦達が駆けていく。その手には、どれも同じ大きさで同じ彩りの紙袋が握られていた。実のところ、大淀も貰っている。但し、これはどちらかというと司令官達からの配給品に近いと、大淀は認識していた。駆けていく駆逐艦達の姿を見送った明石は、きょとりと目を瞬いていた。
「もしかして、艦種毎とかに違うラッピングでチョコを配布してくれたの、司令は」
「中身は同じかも知れないけどね。司令は、何かいってた？」
「生チョコだって。作るの簡単だからって。あ、あと作業しながらでも食べられるように小さいフォークも入れてくれたとかどうとか。皆も同じようにしてくれたのかな、司令は優しいし」
「……」
大淀は、眼鏡の下。笑みを強張らせる。
（司令。普段から誰にでも優しいからこんな事になるんですよ）
ワーカホリックの明石が、果たして他の艦娘が貰ったプレゼントの中身の違いに気付けるか。思わず心配する。
――さすがに違うチョコ菓子を作り分ける余裕はなかったらしい。

だが、わざわざ、手作業の多い明石の為に、フォークも入れて丁寧にラッピングした。しかも、オレンジ色の包装紙とオリーブグリーンのリボンという配色。それは付き合いの長い同僚の配色によく似ていた。しかし、肝心の明石は、それに気付いている様子はない。しげしげと自身の貰ったプレゼントを眺めているだけだった。それに、眼鏡越しにうろんに見ながら、唸るように呟いた。

「……ホワイトデー、ちゃんとお礼してあげなさいね」

「え、でも司令がいくら大食らいだからって、他の艦娘からもお返し貰うだろうし」

「いいから。何なら私も買い物に付き合うから」

思わず語気を強める。その程度には、今の大淀は司令官に同情していた。

司令。この子を落とすのは回りくどい方法じゃ駄目ですよ。内心でつぶやきながら。

（司令。そんなツンデレは明石に通じません）

（マジか）

尚、ホワイトデー当日。お返しに「司令はコーヒーを飲む事が多いから、溶かして飲めるマシュマロをあげよう」と呟いた明石の頭を大淀が思わず引っぱたいたという光景が見られた。

Ｅｎｄ．

塞翁が馬

いつも落ち着き払った彼に、少しぐらい動揺させてみたかったというのもある。秘書艦に任命されたその日、済ました顔で、「軍令部よりお叱りのご連絡ですわ」といったのだ。すると彼は、このところは大人びてきた顔で目を瞬いた。

「えー、今更どれの事だろう」

「……心当たりがどれほどおありなんですの」

受け取る書類を捲る司令官は、ただ笑うだけで肩を竦めた。その肩章は「中佐」を示していた。

この辺境の鎮守府。彼が異例の若さで司令官に着任して2年以上が経つ。熊野がやって来たのは1年程前の事だった。

「提督がやらかした事、ですか」

「大淀なら元々、この鎮守府で事務処理をしていたでしょう。何が御存知ないかしら」

昼食時。書類を片手に蕎麦を啜っていた大淀の向かいに座った熊野は、ごく真剣な顔で箸を持つ。注文した鯖味噌煮定食はとても旨そうだったが、今の熊野は、午前中に司令官が放った言葉で頭がいっぱいだ。茶碗を手にする彼女は、鯖を箸で解きながら、目の前の「先輩」に尋ねる。

僅差ではある。大淀と熊野は同じ年にこの鎮守府に着任した。とはいっても大淀は元々、大本営から出された任務の整理を行う事務を担当していた。ゆえに間宮・明石・初期艦の漣らと同様、ここの司令官とは最も長い付き合いのひとりだ。だから、その中で1番司令官の事を知っていそうな大淀をこうして訪ねたのだ。白い飯の上に鯖を載せながら、熊野は胡乱に目を伏せる。

「……提督、大らかなようで腹が読めない方なんですもの。1年以上経ちますけど、いまだに慣れませんの。先程だって何をやらかしたのかわからないような事を仰有っていたし」

「提督のブラックジョークがきついのは今にはじまった事じゃないですよ。気にしていたらきりがありません。スルーしましょう」

「助言有り難う御座います。それはともかく……実際、どうなんですの。あの方、１８才でここの鎮守府に着任したと聞きましたけど」
口に放った飯と魚を咀嚼し飲み込んでから、改めて尋ねる。自身がこの鎮守府に着任した時、見た目の若さに「極端な童顔なんだろうか」と思った。その時点で中佐の肩章がかかっていたからだ。まさか成人すらしていなかったなど、誰が想像しようか――それでも艦娘達の士気や練度は高く、戦略・戦術指揮も非凡さを感じた。ただ、時折見せる横顔が、どこか敵対する深海棲艦を思わせるところがあったのが気がかりだったけれど――女顔でもないのに、どこか艦娘とも間違える。不可思議な空気を漂わせていた。
明らかに尋常ではない何かがあった。しかしそれをうまく言葉に出来ないまま、自身は重巡洋艦から航空巡洋艦に改装され、最上や鈴谷と共に戦績を上げながら今に至る。最近やって来た三隈や、改二になった利根型姉妹に水上爆撃機の使い方の指導を任されたこの頃は、漣や敷波に代わり秘書艦を務める事もある。そうして司令官に接していて、今まで沈めていた疑問が再び持ち上がってきたのだった。そんな自身を一瞥すると、書類を一旦傍らに置いた大淀は、蕎麦を啜る。それをかみ切ると、飲み込みながら「昇進という名の左遷ですよ」という。
「あの提督の性格を見ればわかるでしょう。あの人は非常に優秀です。しかも目的の為なら手段を選ばないところもある――私達の事はとても気に掛けてくれますが、被害が自分にしか及ばないなら何だってする人ですよ」
「自分にしか」
「自分で責任を取れる事なら何でもやっちゃうんですよ。ひいては、その場の咎を全て自分一身に集める事も得意。まぁ、だからこそここに『昇進という名の左遷』で済んだ訳ですが」
「……」
大淀の言葉に、その裏に隠されたものを推察する。味噌汁を啜った。
咎を全て一身に引き受ける。それは出世に関わる事だろう。たと

えば上官が失態を演じても、それを押しつけられる前に自らその失敗を自分のものにすれば恩を売れる。
逆にいえば、そんな風に自由に立ち回れるのならば。咎を回りに押しつける事も可能な訳だ。一体、前任地ではどんな咎を受けたのか。あるいは咎を「引き受けた」のか。こんな遠くに昇進という形で島流しをされたのも、ひょっとしてこの能力を買われてほとぼりを冷まさせる為だろうか。士官学校を卒業したと聞いたし、いずれは大本営に戻るのか――考え込む熊野に、大淀は蕎麦を啜る。彼女にいわなかった事がある。
そも、あの若き士官がここに飛ばされてきたのは、偏に「この鎮守府に来たかった」からだ。それを知ったのは、1年と少し前のあの日。密やかな「不正」に彼女も関わった事からはじまる。
「そういえば、今度、提督は大佐に昇進されるそうですよ。この間の合同作戦の成果を受けて」
「私が来た時点で中佐に昇進したばかりでしたのに?!」
「多分、そろそろ大本営も彼を召還したいんじゃないでしょうかね」
話題を逸らす為に、先程から目を通していた書類の内容について口にする。熊野の驚きも当然だろう。成人して間もない彼が、士官学校を卒業して3年と経たないうちに2階級も昇進するのだ。そして大本営のその意図を予想しながら、苦笑する。
その視界の隅では、立ち上がる同僚の長い赤毛が揺れた。彼女の左手の薬指を見て、大淀はいう。
「提督は『色々と』貴重な人材ですから。まぁ、暫くは離れないでしょうけどね。ところで、提督は予定通り、酒保商人の人と面談をしてるんですか」
「えぇ、盛り上がっているようですわ。漣が同席しています」
いつもならば、「司令官専用」の巨大な丼飯を何杯もお代わりしている時間帯だ。しかし姿が見えない。辺りを見回す大淀に、熊野は漬け物を頬張ったのちに驚いたような表情を見せる。
「本当にそっくりですのね。提督のご実家は酒保を営んでいるとは聴いていましたけど、今日いらしたのは提督の双子の弟さんと、『お姉さ

ん』かしら。ショートカットの……久し振りにお会いすると聞いてましたけど、本当にご家族とそっくりですのね。……」
「どうしました」
はた、と。熊野は箸を止める。それに、レンゲで蕎麦の汁を啜っていた大淀は顔を上げた。熊野はしげしげと、目の前の軽巡洋艦娘の顔を見ている。
「……こうしてみると、大淀。貴女って提督に似てますのね。提督はあの『お姉さん』や弟さんに似てて、貴女は彼らと似ていますから、顔立ちだけで見ると……髪や目の色が違うから気付きませんでしたわ。ちょっと眼鏡を外してくださらない」
「ご飯が見えなくなるのでまた今度にしましょう」
蕎麦の椀を掴み、豪快に直接汁を啜る事で熊野の手を妨害する。顔を隠したかった。
似ているのは当たり前だ。そしてそれを認める訳にはいかなかった。「彼女」の安寧の為にも。
最大の「やらかした事」を隠蔽する為にも。

食堂を出る。腹ごしらえは済んだ。午後の工廠の業務に戻らねば。そう思っていた矢先、不意に視界にその姿を見て顔を上げる。
「提督。弟さん達はお帰りになったんですか」
「あぁ、明石。うん、話は終わったよ」
昼食を摂りに来たのだろうか。二種軍装に中佐の肩章をつけた少年が、ゆったりとした足取りで歩いてきていた。否、既に青年といっていいだろう。彼女が、漣と共にこの鎮守府にやって来た彼、司令官とはじめて会った時よりも、彼の幼さは抜けていた。心なしか背も伸びた気がする。男性は２５才まで身長が伸びるという。「１８０ｃｍは目指したいなあ」とは、それを指摘した際の、心から嬉しそうな彼の言葉だ。軍人としては小柄な背丈を気にしていたらしい。この年にしてもうすぐ大佐になるという人物とは思えないかわいらしい悩みだ。そんな事を思いながら、ふと、傍らに随伴していた筈の少女の姿がない事に気付く。

「漣はどうしたんです」
「途中で敷波とどこかに行っちゃった。なんか敷波、最近、近所の日本人街の店で働いてる男の子と好い感じだとかで。ランチについてってあげてるって」
「あらあら」
　どこか拗ねたようにいう、司令官の心情を察して思わず微笑む。この艦隊の駆逐艦で最も練度の高い敷波は、その分、司令官とは漣に次いで長い付き合いだ。傍から見ると兄妹のようにも見えた。妹を取られた気分なのだろう。おまけに初期艦の漣さえ妹分の恋を応援しているときた。それゆえに最近は他の艦娘を秘書艦にする事が多い。彼女達の予定に合わせてやっているのだ。それでも面白くなさそうな彼に、明石は微笑む。廊下の窓際。司令官と自分の左手に光る薬指が、少しだけ眩しい。
　あれから1年以上経つ。「あの1件」の直後、前触れもなくケッコンカッコカリを申し込まれた。否、他の艦娘、特に大淀や漣・敷波などからすれば、大分前から司令官からの態度はあからさまだったという。断る理由もなく、また、普段は飄々とした司令官が耳まで真っ赤になっているのを見て「絆された」のが最初だった。受け入れれば「断られると思った」と、帽子の鐔をおさえて心から安堵した様子の顔に新鮮さを見出したせいもあったかも知れない。
　1年前、海から取り戻したある軽巡洋艦娘を、速やかに引退させた。その時の素早さとはあまりに裏腹だった。
『明石、すまない。君も巻き込む』
　そういって、自身に次々と作らせたのは、軽巡洋艦向きの艤装――その実、火力は戦艦でないと到底扱えない代物。見た目は15．5cm三連装砲でありながら、41cm連装砲並の威力を持つ主砲。それを、最奥の難所で「拾ってきた」彼女に次々と試し打ちさせた。結果は、どれもその艦娘が吹っ飛んだ――当たり前である。その様子を大淀が撮影し、そしてその動画を観た艦娘専門の医師に診断書を書かせた。
『この度サルベージした軽巡洋艦娘は艤装に著しい不適正を示す。

よって、引退させるべし』
　そして「引き取り手」として声を上げたのが、この鎮守府に酒保をしている商人の家だった。彼の家は艦娘を育成する「ブリーダー」のひとつであり、以前にも艦娘を育て、その子供を育ててる。大本営はあっさりとその許可を下ろした。その艦娘の個体番号が２０年前に行方不明になっていた艦娘だとは判明したが、以前は戦えた艦娘が再び戻ってきた時に性能を落としている事は「よくある」事だ。そして彼女は、一般人として社会に戻る事になった。３日とかからぬ仕事だった。
　どうやら社会に馴染んでいるらしい。あれから髪を切ったらしい彼女は、今日、自身の引き取り手となった酒保商人の青年に伴われてやって来ていた。その明るい笑顔を昼前に見て、自身は安堵した。
　あの日、頭を下げる司令官に応えて良かったと。
『大淀、明石、扶桑。これは完全に、俺の私情だ。これから先は、２度と公私を混同しないと誓おう。俺は、この日の為に海軍に入ったんだ』
『……それは、貴男にどんな利益があるんですか』
『身内の彼女だけを脱出させて、君達他の艦娘を戦線離脱させないという点においては、これは俺の完全なエゴだ。ただ、これは』
　扶桑は何もいわなかった。ただ、傍らにいる、訳のわかっていない様子の「彼女」に、儚い微笑みで寄り添っていた。まるで旧友のようだ、そんな印象をなぜか抱いた。ただ、ただごとではない事だけは理解できた。尋ねる大淀に、司令官は顔を上げた。
　それは、着任して２年。はじめて見る、司令官の「本音」の顔だった。
『〝艦〟にも種馬にも軍人にも、人間にもなれずにいた俺が何者かになる為の儀式だ。俺の、母を海軍から逃す事は』
　刹那の「彼女」の驚愕と、その肩を抱きしめる扶桑の顔。自身も「彼女」と同じ顔をしていただろう。口をへの字にする大淀の隣で、自身ははじめて彼の出自の一端を知った。
　その１年。自身は何も知らなかったのだ。その後にケッコンカッ

コカリを申し込まれた時に受諾したのは、彼をもっと知りたいという気持ちもあったかも知れない。
「それで、提督。『彼女』は、提督と弟さんの事。思い出したんですか」
「いいや、何にも」
声を潜める。三人称で通じたようだ。実母であるという彼女は、しかし見た目は恐ろしく若い。１０代でも通じるだろう。そういうものだと、自分達艦娘は知っている。ベニクラゲに似た構造を持っているという。不老不死に近い若返りの機能を有しているのだ。
１度轟沈すれば、自分達艦娘は海底で「本来の姿」になる。そして受けたダメージをリセットし、艦娘として再び拾われた時には以前の記憶も経験も全て失っている。だが、代わりに新たにまた生きられる。一種の若返りだ。扶桑があの場にいたのは、嘗て「彼女」の同僚だった時の記憶が僅かに残っていたからだ。それはごく稀なパターンだからこそ、目立つエピソードだ。
２０年前、この鎮守府が所謂「ブラック」といわれていた頃。そも、ブラックという認識がなかった時代。無理で不正な作戦で、あの海で轟沈したという「彼女」。その直前に双子を産み落としていた。２０年を経て、その兄は司令官として、この鎮守府に着任した。母の事を知る為に。
腰に手を当てる。司令官は目を伏せた。口元には笑みを刷いて。
「いいんだ。寧ろ、忘れるべき事なんだよ。君達艦娘が有している特権だ。いわば、君達はかなり早いスパンで生まれ変わりをしているようなものだ。あの人が俺と弟を生んだのは前世の出来事。俺と弟は偶々それを知っていて、前世の恩に報いた。ただそれだけだ。ただそれだけだ。あの人は前世で受けるべき賠償を、轟沈してしまった事で失ってしまった。それを今、代わりに受けているだけの話だよ」
「……『恩』と感じてるんですね」
「ん？」
「生んでくれた事を」
「そりゃね。実際に俺達息子をどう思っていたにせよ、劣悪な環境下で俺達を生んでくれた肝っ玉はただ者じゃないよ。……それが原因

で轟沈してしまったのかも知れないけど、なら尚更、恩に思うべきだ。悔いれば、それこそ彼女に対する侮辱だ」
　そっと目を開く。司令官の目は赤い。白い髪といい皮膚といい、その姿は艦娘の息子というよりも深海棲艦に近い。それは、前線で妊娠した母が受けたダメージから弟を庇い続けた結果、腹の中で生き延びる為に本来の姿から歪んだ為だという。本来の姿は先程訪れてきたあの酒保商人の青年の姿なのだろう。黒い髪に青い目。まるで「彼女」そっくりだ。これも、「不正」を共有し、更にケッコンカッコカリして教えて貰った事だった。
　この1年以上。ずっと、この司令官の事を知るのに勤しんできた。なぜ自分を選んだのか、なぜ軍人になったのか、なぜ「彼女」を逃がしたのか。何を考え、何を思ったのか。
　結局は案外普通の青年で、あの日、指輪を持ってきた時は「人生で1番緊張した日」で、そして「彼女」を拾った日。あの日が彼が漸くヒトになれた日だった。あの日から、司令官は以前よりも親しみやすくなったといわれている。以前は頑なに「将官じゃないから提督と呼ばれたくない」と司令呼びを徹底させていたが、今は口にしなくなった。「司令官らしさ」を敢えて振る舞う事もなくなった彼は、笑う事が増えた気がする。それを間近で見詰めてきた。
　見ている事を許されていた。それが、このところは嬉しい。
　そろそろ食堂に、と足を踏み出そうとした。その彼の手を小さく握る。途端にぎしりと固まった。みるみる間に首まで真っ赤になるのだから、本当にただの青年なのだと――否、アイデンティティが成立したばかりの子供なのだと思い知る。笑みを堪えて言葉を継いだ。
「ねぇ提督。私も、彼女に感謝しているんですよ。貴男というヒトを生んでくれて」
「……」
「生まれてきてくれて、ここに来てくれて。有り難う御座います、提督。私に指輪を贈ってくれたヒトが、貴男で良かった」
「……」
「でも、提督。何で私を選んだんですか。振り向かなくていいから、そ

れだけでも聴かせてください」
うっかりすると湯気が出そうだ。耳まで真っ赤になった司令官は、彫像のように固まっている。握った手には全く力をこめていないのに、一寸たりとも動けないようだ。
それでも口は辛うじて動くらしい。少しだけ掠れた声で、提督はいう。
「君が」
「うん」
「君が、自分を、自分がすべき事をわかっているヒトだったから、憧れたんだ。それが、最初。そこから、全部」
すきになった。蚊の鳴くような声は、しかし明石の耳に届く。それに、思わず苦笑した。
自分が艦娘としては弱い事。専門特化である事。それなりに悩んだ。もっと強くなりたい、けれどそれは出来ない。自分に出来るのは「工作艦」としての機能――その苦労を、この人は愛してくれているという。
なんだ。自分と一緒じゃないか。手を強く握った。
「困ったな。私も貴男の頑張ってる姿が好きになったんですよ。お揃いですね」
「……アリガトウ」
強張った声。童顔に見合わなかった低音のそれは、このところは外見に相応しくなっていた。
色々な経験を経て、提督は、大人になろうとしていた。
「私達は、艦娘として色んな苦労をこれからもするでしょう。それでも、同じように提督として苦労するだろう貴男についていきますから」
「どうでもいいけど、早くあの2人どいてくださらないかしら」
「食堂から出られませんね……」
嘗て、自分は艦娘だったという。実際、艦娘としての「記録」はあ

る。艦娘として改造を受ける前の記憶もある。けれどそれには２０年以上のブランクがあると、「実家」に帰ってきてから知った。この１年間はそれを取り戻す為の日々だった。
　以前の自分は双子の息子を生んだという。下の息子だという青年は事情を濁されていたから、恐らくあまり良い妊娠をしなかったのだろう。そして、その後失踪した。恐らく轟沈したのだろう。戻ってきた自分は、よくはわからないが、必死な様子の司令官に海軍から出された。彼がもうひとりの息子だと知ったのは、彼の口から聞いた事だ。
　空白の２０年。育ててあげられなかった事を悔やんだ。それでもいい、とあの司令官だという若い青年は笑った。
『貴女が幸せになってくれる事が、俺達を生んでくれた貴女への最大の恩返しなんです』
　そういっていた彼と1年ぶりに会った。彼の左手の薬指には、銀色の指輪が嵌っていた。
「どうしたんだ、●●」
　一般人として暮らしていた頃の名を呼ばれる。帰りの車中。空港へ向かうタクシーの中、隣で「次男」が怪訝そうにしていた。自身は左手の薬指を見上げていた。自身は答える。
「ケッコンカッコカリなんて、昔はなかった気がするんだよね」
「最近実装されたものらしい。実際の性能は艦娘の更なる強化だが、大本営の悪趣味と兄さんはいっていたな。……その悪趣味に便乗したようだが」
「でも、今はそんな事が司令官と出来るぐらい良好な関係を築けるんでしょ。私の頃は、多分そんなものなかったと思うんだよね。私の『記録』は古いから」
「……」
　彼はどの艦娘としたのだろうか。ついぞ聞きそびれてしまった。ただ、1年前に自身を海軍から逃がした時よりも、彼はずっと穏やかな顔をしていた。
　自分の為に、海軍に入ったという。優しい、ごく普通の人だと、こ

の「次男」は兄を語っていた。手段を選ばず、目的の鎮守府に着任し、そしてとうとう「母」の自分を引き当てた――恐るべき執念だ。それ程までに、彼は自身のアイデンティティに悩んでいたのだろう。悩ませていたのが、産み落としたという自分なのだから、当初はそれに悩んだりもした。けれど、それは杞憂だったようだ。

少なくとも、今の「息子」は、生まれてきた事を悔いている様子はなかった。穏やかさを纏った彼に、自身は安堵した。彼は少なくとも答えは得たようだった。自分達を苦しみの底に落とした筈の海軍で。

「人生万事塞翁が馬。何がどう転ぶか、わかったもんじゃないね」

「そうだな」

「私もいつか指輪を嵌める日が来るのかな」

「好きなように生きればいい。僕達が、貴女をサポートする」

見ると、彼の兄のように穏やかに微笑んだ次男はいった。

「２０年もいたんだ。もう、暗い海底に沈む事はないんだ」

空港が近付く。飛行機に乗れば、潮騒は遠退くだろう。「次男」の言葉に、目を瞑る。

思い出すのは、誰かの手。眠っていた、心地よい水底。そこから浮上していき、引っ張ってきた人々の手。彼女達に曳航されながらやって来た鎮守府。既視感のあるそこで、二種軍装の少年が駆け寄ってきた。今にも泣きそうな顔で。

２０年、記憶はない。それでもその時、確かに「帰ってきた」と、自身は思ったのだ。

（自分が何者か。やっとわかった気がした）

Ｅｎｄ．

「母」

腹から、血が流れた。穴が空いている。しかし貫通せずに体内に留まっている。それで、よかった。自身は両手を広げ、目の前の艦娘達や司令官を見る。特に、指示を下され、震える手で赤子に向かって12cm単装砲を握った駆逐艦娘を。

笑ってみせた。背後からはなき声がする。2人分の声だ。片方は人の赤子。ごく健やかな泣き声だ。片方は――まるでガラスを引っ掻いたような、奇声。奇妙な程に白い体に、頭は怪物の口に覆われていた。

どう見ても、それは深海棲艦。しかし、自身は屈するつもりはなかった。明らかに動揺している司令官に、自身はいう。

「どちらも、子供だ。人間の子供だ。歪めたのは、この戦場で母親の艦娘が負わされたダメージだ。そして私達艦娘は、人間だ。人間の赤子は弱者だ。弱者を守る為に存在する私達が、弱者を殺すのか！」

腹が熱い。貫通しなかった銃弾が痛い。歪みそうになる顔。それでも、膝を屈するつもりはなかった。この背後の子供達を守る為には。

紺色のフロックコート。大佐の階級を示す腕章。雪の降りしきる中、子供を連れた自身の前に、その青年は帽子を脱いで微笑んだ。どうやらずっと待っていたらしい。肩には、雪が積もっていた。

「お久しぶりです」

はじめて見る顔の筈だ。しかし、奇妙に白い顔と白い髪に、ぽつりと落ちた血の赤い眼。そしてその潮の匂いは、懐かしさを感じさせた。

それは、あの戦場の水平線。彼は自身が打ち倒し続けた深海棲艦の色をしていた。

おとぎ話だ。あれから20年。あの時に庇った化けものの赤ん坊が、人間の青年となり、「長門」だった自分に会いに来た。

外科手術で深海棲艦から人間へとなった希有な例。
そんな彼が軍のモルモットにならずに済んだのは、偏に当時軍の高官だった人物が兄弟共々引き取ったからだ。それ以降、彼らの母親が行方不明になったあとも、その兄弟の音沙汰は聴いていなかった。自身が艦娘を引退した今は、知る由もないと思っていた。出会った街角、座るベンチで横の青年を見遣り笑う。
「よもや、あの時の赤ん坊と再会するとはな。財前……大佐でいいのか」
「俺も、貴女にお会いできて本当に嬉しいです。貴女には、養父から話を聞いていましたから」
公園のベンチ。珍しい大雪で、我が子は雪だるまを作ってはしゃいでいる。時折こちらを見遣る息子が手を振ると、隣の青年が優しく微笑んで手を振り返す。その横顔が、嘗ての戦友によく似ていた。あの、行方不明になった戦友に。どうやら、この青年は軍籍に身を置いている上に随分と早い出世をしているらしい事といい、自分の出生を知っているようだ。それに、複雑な気持ちで腹を押さえる。あの時の傷は、決して後悔したものではない。
不気味な笑い声。隣の健やかな赤子と比べると、頭を覆う顎と相俟ってあまりに人間には見えない。それでも元気に動く手足が、「守るべき者」に見えたのだ。
あの姿に比べれば随分と人間に近くなったものだ。自身が産み落とした子供達に比べてもあの時のこの青年は、ヒトの姿をしていなかった。
「養父に、教えて貰ったんです。生まれたばかりの俺を庇ってくれたのは、当時あの鎮守府にいた『長門』さんだと」
「それで、わざわざこちらに」
「大本営に用があったのもありますけどね。久し振りに日本に戻ってきたので、帰省するついでに寄らせて貰ったんです。案外近所だったので驚きました」
「夫の勤務先がこの近くでな。家族寮で暮らしているんだ。……海外の泊地で働いているのか、貴男は」

言葉の中に混じった情報に、眉を顰める。今なお、前線は激しいと聴く。２０年前のこの青年に絡んだ事件で「ガサ入れ」を食らった自身の鎮守府から波及し、艦娘の待遇は格段に良くなった。それでも引退後の「出産」の義務は今なお続いているし、死者は跡を絶たない。そして皮肉な事に、艦娘へ減らされた負担は、若い軍人に向くようになった。１００年に上る深海棲艦との戦争は、人間の最大の死因を「戦死」にした。特に補給線の途絶えがちな海外はその傾向が顕著だ。それに、青年は微笑んだ。

「今は昔より後方支援の環境が整っていますから。今日大本営に来たのも、更に補給を増やすように要求に来たんです」

「要求」

「若輩ながら、司令官を勤めさせて貰っているので。……貴女も御存知の、あの鎮守府で」

「――提督なのか。しかもあそこで」

目を瞠る。蘇るのは、あの劣悪な環境の仕官先。今思い出しても、戦場に出ていた方が楽だったという場所だ。

地獄の入り口。暴力は当たり前。杜撰な資材や運用、全ての責は弱者に課せられる。辛うじてあの鎮守府が鎮守府たりえたのは、掲げる大義の為だ。「人類を守る為に存続した日本海軍」。

よく流れなかったと、堕胎も出来ない年月を妊娠した戦友の子を思った。流れてくれた方がよかったとすら、戦友の為には思った。けれど彼女は望まない妊娠でありながら、戦線に駆り出されても、腹を守り続けた。

そして生まれた子は、自分達を二極化した姿をしていた。

嘗て「敵」の姿をしていた赤ん坊は、目の前でヒトの姿をして軍服に身を包んでいる。青年は苦笑していた。

「佐官で提督、と呼ばれるのも変な感じですけどね。一応皆にはそう呼ばれています。……環境は改善されました。そしてこれからも改善していくつもりです。俺が海軍に入ったのは、その為もあります。だから」

彼はこちらを向いた。紙のように白い顔、鼻の頭が赤くなってい

る。冬場の海上での戦いの為に寒さにも耐性のある艦船血統甲種の自身に対し、丙種の彼はやはり一般人寄りなのだ。それを視覚で改めて確認する自分に、彼は頭を下げた。
「改めて、有り難う御座います。俺達を、俺を守ってくれて。……撃たれた傷のせいで早々に引退を余儀なくされたと聞きました。それでも、貴女には謝罪よりも感謝をしたいと思い、今日、来ました」
「……そうだな。私の誇りとしては、感謝された方がいい。身を挺した甲斐があった」
　いいながら、無意識に腹の傷を抑える。通常の弾丸よりも、艦娘が使う艤装の弾丸は同じ「艦」にダメージを負わせる。ましてや貫通せずに体内に留まったそれを摘出するまでに時間を要した。――この青年の母親が行方不明になった。そう聴いたのは病院での事だ。悔いがあるとすれば、彼女を守りきれなかった事だ。彼らの、母親を。青年は顔を伏せる。複雑そうに瞼を伏せ気味に。
「選択肢を与えてくれた人達に、心から感謝しているんです。実母は、どんな気持ちがあったにせよ、俺達を生んでくれた。生きるという選択肢を与えてくれた。俺達を引き取ってくれた養父母は、生き方を選ばせてくれた。俺は自分の意志で軍人になりました。そして、『長門』さん。貴女は生かしてくれた。ひょっとしたら化けもののまま生きる事になるかも知れなかった俺に、『ヒト』の部分を見出してくれたと聞いています」
　そういう、彼は再び軍帽を外す。彼の髪は直毛のショートボブだ。耳も隠れている。その髪の束を寄せた。そして、長門は見た。
　耳の前、頬骨の間。両側に走る、引き攣った僅かな手術痕。
『この子の見た目が恐ろしいというのなら、どこまで人間なのかを調べたらどうだ。殺すのはそれからでいいだろう』
　……髪を下ろし、再び軍帽を被る。男性にしては少々長めの髪はこの為だったようだ。固い帽子からはみ出す髪の毛。それを眺めて、自分達の戦っている相手の正体に思いを馳せる。
　彼らの面の下も、屹度ヒトの顔をしているのだろう。この子がそうだったのだから。

「変な事をいいますけど、俺には3人の母がいるんです」
「うん」
「実母、養母、それに、貴女だ。……話の経緯を聴いた時は、どちらかというと父かな、という気もしましたけど」
「褒められたととっておこう。私達の存在意義を考えれば当然の行動だったんだ、あれは。……そうだな。母と呼んでくれるなら、貴男は誇らしい息子だ」
微苦笑する青年に、自身も笑い返す。
自身に出来た事など、ただ赤子だった彼らを、彼を守る事だけだ。その結果が、今日の「提督」と呼ばれるまでの身分に至った彼ならば、これ程に誇らしい事はない。
自分自身を否定せず、守られた事を誇りに思うような青年になる切欠を与えられたのならば。「母」としてはこれ以上なく誇らしかった。
不意に、向こうで我が子が手を振る。いつの間にか大きな雪玉を2つ作っていた。隣の青年に「頭を持ち上げて欲しい」と強請っているようだ。それを了承した青年は、立ち上がりざま、ふと自身を振り返る。コートのポケットに手を突っ込んだ。
「そうだ、これ。ここが俺の実家の住所です」
「え」
「ね、すぐそこでしょう。俺は普段は海外にいるからお会いできませんけど、貴女なら弟達が歓迎します」
それは四角い紙切れに見えた。ボールペンで書き付けられた住所は確かにこの近所だ。しかし、なぜこのタイミングで――手に触れた時、その裏面が妙につるりとしている事に気付いた。引っ繰り返す。
それは写真だった。日本家屋だろうか。和室で、2人の人物が卓袱台を囲んで座っていた。年頃は彼と同じに見える。まるで双子、否、彼を加えれば三つ子だ。但し、写真の中の2人は男女だ。そして、女性の方には、とても見覚えがあった。黒い直毛に青い目の女性だ。髪を伸ばし、眼鏡をかけて、カチューシャをつければ、記憶の中の「戦友」に結びついた。
「『実母』は、何も覚えていませんでした」

写真を握り、手を震わせる。そんな自身に背を向けながら、彼はいう。
「艦娘としてのプリセットの記録と、艦娘になる前に『ブリーダー』の元で育った記憶。彼女の記録は２０年のタイムラグがありました。そして、今はまた『実家』で、過ごしています。『俺達の身内』として」
「……会いに、行ってもいいのか」
「何も覚えていませんから、貴女と思い出話は出来ません。でも、これはお願いです」
顔だけ振り返った彼は、少しだけかなしそうに見えた。それは、嘗ての「戦友」が妊娠を知った時の顔に、とても似ていた。
「友達、作ってあげてください」
「ねー、おにいちゃーん！　雪だるま完成させてよー！」
「うん、わかったよ。今行く」
焦れた我が子に声をかけられ、今度こそ彼は駆けていった。そして雪に足を取られて前のめりの転ぶ。普段は恐らくは温暖な地域で働いている為だろう。落ちた軍帽を拾った我が子に礼をいう、その姿に視界が歪む。手元の写真を握り潰さないように苦心した。俯く。
かえってきた。彼女は、あの日の戦友は、「還って」来たのだ。「彼の為に腹を痛めた」青年に、声なき感謝の声をあげる。
その日、「母」はないた。

頬に走る引き攣った傷。双子なのに、弟とはあまりに違う色合い。赤子の時に自身の頭を覆っていたという怪物の上顎。なぜ生んだ。なぜこんな化けものを生かした。それを悩んだ事もある。
けれど「母」の話を聞いた時に、自身は知ったのだ。何をするにも、自分は「母」に恩を返さなければならない。全ては、それからだった。自分を知るには。

End.

【派生オメガバースパロ】体温【大和×アイオワ（＋提督）】

日本から離れたこの地、鎮守府を取り巻く日本人街。日本人は地元に馴染む傾向があり、所謂中華街のように独自の文化を発展させる事はほとんどない。なので、この土地でも、住民の多くが仕事でやって来た日本人が多いというだけで、人種の様々な人々が日々、昼夜問わず賑わっているのだ。それが良くも悪くも。

（地獄だ）

私服で、それもひとりで出歩いていたのが悪かったらしい。誰もまさか、噂には聞いていても自分のような青二才が、あの海軍基地の司令官だとは思わないだろう――。地元住民と思しき男性達に絡まれながら、提督は端的にそう思った。白人、黒人、あるいは彼らとの日系人か。軍人としては小柄な自身より筋骨隆々とした彼らは、にやにやと笑いながら自分を取り巻いている。彼らから漂うのは、汗や香水などの体臭だけではない。Ωの自分にはわかってしまう「α」のフェロモンも強烈に混じっていた。自分の肩に手を置いている男がそうだ。他の男達はβのようだけれど、どちらにせよ、危機的状況には変わらない。肩を掴む手に全筋力で抵抗しながら、彼らが話している言葉を聞く。

『おいおい兄ちゃん、あんたオメガだろ。アルファの言う事は聴いておこうぜ』

『そうそう、別にこいつはあんたとつがいになりたいって訳じゃねーよ。ただこの辺じゃ日本人の美人の女は艦娘だらけで安心してナンパができねぇ。だがあんたはどう見ても男だし、匂いでオメガだってわかるんだってよ。男でもオメガならあちらの具合がいいんだってな。なぁ、ちょっと遊ぶだけだって。明日の朝にはおうちに帰してやるよ坊や』

（地獄だ）

大事な事だから2回思った。現地訛りの英語の言葉は、出来るだけ

上品に訳したものが先述だ。こういった事ははじめてでないから、内心で溜息を吐く。３年前に着任して、幼い見てくれから、ひとりで歩いている時にカツアゲや暴力の対象になる事は屡々あった。以前はもっと狭い街だったから、その度に艦娘が通りがかって助けてくれたし、以前は艦娘が美しい見目の下にとんでもない馬力を秘めている事など知られていなかった。しかし、街が広まっていくうちに、この町の事実上の統治者である自身の眼の届かない部分も大きくなっているようだ。艦娘には反撃して相手に致命傷を与えても許される特殊な法律がある。しかし、自分を含めて「一般」の軍人や住民などが心配になってきた。反応の薄い彼に焦れてきたらしい男達が手を伸ばしてくるのを避けながら、提督は考える。

（帰ったら、憲兵の方に街の治安について聞いておくか。見回りの強化も頼んでおこう）

『おい聴いてんのか?!』

「ああ、聴いてなかった。それでなんだっけ、遊びに行くって話だっけ。悪いけど俺はこれから予定がだね」

「Ｈｅｙ!! こんなところにいたのね、ｍｙ ｆｒｉｅｎｄ!!」

不意に、明るい声と大きなゴム鞠が腕にぶつかった。否、それは女性だった。心地よい体温を伴う、柔らかで、それもとびきり華やかな。蹌踉めいて、そして視界に飛び込んできた金髪に眼が眩む。そして名を呼びかけそうになる。

「あ、アイオ」

「もう、待ち合わせ場所からｍｉｓｓｉｎｇしてると思ったら！ ｒｅｎｄｅｚｖｏｕｓに遅れちゃうじゃない！ Ｄａｒｌｉｎｇが待ってるわ、そういう訳で貴男達」

突然、男達の群れに飛び込んできた英語混じりの女性――アイオワは、力任せに提督の体をアルファの男の腕から引き千切った。そしていまだ目を瞬いている彼らに、極上の笑顔を振りまいてみせる。

『悪いけど、私達はダーリンと待ち合わせしてるの。また今度、もっと人の多い場所で会いましょ』

『……そ、そうか』

『それなら、仕方ないな……』
その勢いに押し負けたのだろう。あるいは、「若い美人＝艦娘」という公式に思い当たったか。彼らは眩しそうにしながら、オメガの少年という獲物をみすみす逃していった。
のちに、彼らは酒場で、鎮守府に勤める一般軍人から、若い司令官の顔を知るのだが、これは余談である。
連れ去られた提督はといえば、腕に大きくよく弾むゴム鞠を押しつけてくる金髪の美女にようやっと言葉をかけたのは現場から離れてきっかり1分経過してからの事だ。敢えて腕を振り払わなかった理由については察して欲しい。オメガといえど提督も男性だった。
「……アイオワ、さすがだね。助け方が洗練してる」
「Ａｄｍｉｒａｌもｔｅｒｒｉｂｌｙね。ＪａｐａｎのＯＭＥＧＡの男の子となれば、こっちじゃ良いｐｒｅｙよ。Ｍｅが来た時で３年でしょ、もっと危機感を持たないと」
間近の――しかし目線の位置が上になる――アイオワは、やっと腕から豊かな胸を外すと、しかし提督の腕を手で掴んだまま、真顔で人差し指を振る。大柄で豊かな肢体は、明るい表情によくマッチしていた。
「Ｍｅ達オメガは、いつだって狙われるｐｏｓｉｔｉｏｎなんだから」
「……そうだね」
肯かざるを得ない。この鎮守府はベータが大多数だ。しかし、比例してオメガの艦娘が多い。それは、司令官である青年がオメガであり、彼女達への配慮を出来るだろうという試みからだ。同じ「アイオワ」でも、オメガの彼女が、先日の春の合同殲滅作戦で報酬艦としてやって来たのは。当初は必要以上に居丈高に振る舞っていた彼女だが、この鎮守府の内情を知ると次第に態度を軟化させていった事は記憶に新しい。性差別はどの国でも存在する。ただ、日本よりも他国は、直截的に生存に関わる事が多いと、話には聴いていた。オメガの彼女が、ただでさえ海域を封鎖されて窮状に陥っている米国で、どんな人生を歩んできたかは想像に難くない。出来れば、戦う事を強いられる日々でも、この任地ではせめて少しでも心穏やかに過ごしてくれ

ればいい。「同性」の提督はそう思いながらも、気軽に苦笑しながらいう。
「今までは何だかんだと、毎回艦娘か親切な人に助けて貰うか逃げるかしてたからね……かといって軍人が殴ると問題になるし。士官学校時代から、程度の差はあれどこんなんだったし。学校側も配慮してくれたけど、妊娠して一緒に卒業できなかった同期もいたよ」
「Ｏｈ……　想像しただけでｈｅｌｉｓｈ……　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？　ケツ穴ｆｕｃｋされなかった？」
「全部逃げ切ったから大丈夫、あと出来ればもっと穏当な話し方して欲しい」
　並びながら、何となくアイオワが赴く方へ歩いていく。元々、春の作戦が終わり、久し振りの非番を楽しむ為に街を漫ろ歩くつもりだったのだ。初っ端から思わぬ障害に出くわしてしまったけれど。人気の増えてきた町中は、健全な賑わいに染まってきていた。時間帯は昼に近い。こんな明るい時間帯から絡まれた事を考えると、思ったよりも治安は悪化しているのかも知れない。非番明けには憲兵の屯所に直接向かう事を視野に入れた。そして、どうやらある目的地に向かっているらしい事に気付いた彼は、「賑やかな街ね」と嬉しそうにしているアイオワに話しかける。
「ところでアイオワ。俺はそろそろどこかの店に入って、同じく非番の誰かを呼ぶよ。だから安心して、埠頭で待ってる大和とデートしてきなよ」
　途端、振り返る。長い金髪が当たった。星を抱いた眼を見開いて、彼女は声を上げる。
「……ｏｂｎｏｘｉｏｕｓな男ね、いつからわかってたの?!」
「確信を持ったのは、さっきの男達と遭遇した時だよ」
　ここで煙草でも咥えれば様になるのだろう。しかし生憎と手ぶらだった。だから代わりに、ポケットに手を突っ込む。目を瞠ってくる彼女に、提督は語る。
　春の作戦が終わって暫く経つ。作戦を立てる都合上、ヒートの時期については密かに申請しておいてくれといわれていた。つがいが出

来てもヒートはやって来る。しかし、つがいがいるのといないのとでは、大きく差異があった。この鎮守府においては、加賀がその最たる例だった。
「あいつら、つがいを持ってない俺のにおいには気付いたのに、お前がオメガだって気付いてなかった。つがいが出来れば、オメガはヒートは起きてもアルファを引き寄せるフェロモンを発しなくなる――俺らオメガが、性教育で重点的に教わる事でしょ」
「Ａｄｍｉｒａｌ、貴男食えない奴ね」
「それに、更に今のお前のリアクションで確信した。日本だと、薬は倦厭される傾向にある。でも欧米、特に米国だとオメガの為のヒートの抑制剤だけじゃなく、フェロモンを抑制する薬も積極的に摂取すると聴いてる。艦娘に処方されてるピルと同じ感覚でな。――アメリカ人で、且つ艦娘のお前がそれを飲んでたからこそ、あいつらも気付かなかったって可能性も考えていたんだけどな」
「あぁ、もう、いいわよ！　Ｙｏｕが頭の良い男っていうのはよくわかったわ！」
大仰に頭を振ると、街角の壁。そこで顔を手で覆う。そんな彼女を見上げながら、提督は思い出す。
事前に、オメガのアイオワが着任するとは聴いていた。大体の「艦娘」としての人柄も聴いていた。想定外だったのは、春の総力戦の為に、大型艦建造で着任していた大和に「ジャパニーズヤマトナデシコ！」とひと目ぼれした事だった。
大和は心底困った様子だった。ベータならば火遊び程度で済んだかも知れない。ただ、大和はアルファだったのだ。
艦娘の恋愛関係については、余程の事がない限りは顔を突っ込まない事にしている。それでもアルファとオメガに関わる事ならば、作戦にも響くから無視は出来ない。ましてや、彼女は米国から預かっている艦娘なのだ。
「全く、ヤマトのいう通りね。……ｈｅａｔの時期が来たら、いうつもりだったわよ。その、Ｍｅにだって恥ずかしい事はあるのよ」
「あんなに大っぴらに大和にくっついておいて……」

「あんなの挨拶よ！」
「でも、俺、大和に相談されてたよ。ちょっと前まで。『アイオワさんがかわいくって困る』って。今にして思えば惚気だったんだろうけど」
「……Ｏｈ，Ｄａｒｌｉｎｇったら！　相変わらず慎ましやか！」
「とりあえず、次のヒートの時期が来たら、正式に書類手続きしてね。つがいになったなら、フェロモンが出なくなる。ひいては深海棲艦も引き寄せなくなるから、戦域に出せる」
　今度は心から嬉しそうに、辺り構わず頬に手で覆って身を振る。アメリカ人は賑やかだ。そんな事を思いながら、溜息混じりに肩を竦める。
　オメガもアルファも面倒な事だ。色々と。恐らく深海棲艦側でも同じような事を考えているだろうけれど。
「……あいつらが何を考えてるかは知らないけど、オメガがヒートの時期に出撃すると、潜水艦娘さえ無視して攻撃してくるっていう実例があるからね。大井はお前みたいに早々に北上とつがいになったからバンバン活躍してくれてる。お前らにも是非活躍して貰いたいから、その辺はお願いね」
「Ｙｅｓ　ｓｉｒ！」
　先程までの怒りはどこへやら、上機嫌に腕を上げる彼女に溜息を吐く。脳内では、数日前の大和のぼやきが再生されていた。
『アイオワさん、あんまり無邪気でかわいくって、……』
　音声化されなかった部分は、どんな顔をしていたか。思わず身を引いた程度には、アルファの本能が剥き出しだった事は覚えている。
　ハリウッド映画のような恋でもしたのだろうか。この短期間で何があったのか。同じオメガの自分は身を守る事に精いっぱいだから、いつか彼女達の口から語られるまで待とう。喫茶店を見つけて、スマートフォンを取り出す。さて、誰にヘルプを出そうか。別れようとした矢先、ふと、アイオワは尋ねてきた。
「そういえばＡｄｍｉｒａｌ、何で待ち合わせ先までわかったの」
「あれは出任せ。このまま歩いていけば行き着く先はあそこだろうな

あって思っただけ」
「……本当！　ｕｎｒｅｌｉａｂｌｅ!!　次またナンパされても助けないから!!」
「ははは、デート楽しめよ。それと、さっきは本当に有難う。気を付けるよ」
　ジェスチャーを交えて怒るアイオワに、笑って手を振りながら店に入る。ここはカツサンドの美味しい店なのだ。足音荒く去っていく彼女を見送り、店員に挨拶されながら席を選ぶ。メニューを眺めて、ふと溜息を吐いた。
　既に３年だ。オメガはアルファとつがいを作る事を推奨されている。スマートフォンのＬＩＮＥグループ「鎮守府」、今日が非番の艦娘の中に見つけた名前に、連絡する事は大分躊躇された。
（明石がアルファであってくれれば、せめてオメガ同士なら、まだ今頃もっと進展があっただろうに。……アイオワが羨ましい。自身の甲斐性のなさを性別に押しつけるのはよくないのはわかってるけど）
　ＬＩＮＥグループにひとまず、「アルファの男にナンパされた。●●店でヘルプ乞う」と投稿する。
　すると、すぐさま通知が入った。
『大丈夫ですか?!　私、大淀と近くにいるので直ぐ行きますね！』
「……明石は優しいなあ」
　「「（「^　o^）」」「アッー」「乙ｗｗｗｗｗｗｗｗ」という暖かさの籠もったリプの中、まともな返答をくれた意中の彼女に心中で苦笑する。
　優しい子だ。だから好きになったのだ。でもこの３年、ずっとこのままだ。彼女の体温を乞うて、３年が経っていた。無邪気な笑顔の温かな優しさに。
　体温
「早く行ってあげないと！　それにしても、提督って艦娘の誰かとつがいになる気はないのかな」
「……私はこっちに用があるから、明石。貴女がひとりで行ってあげ

なさい」
「えーでも、人数が多い方が」
「いいから！」

End.